

鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 3

昭和61年度発掘調査報告

北条時房・顯時邸跡（雪ノ下一丁目233番9他地点）
北条泰時・時頼邸跡（雪ノ下一丁目419番3地点）

昭和62年3月

鎌倉市教育委員会



北条時房・顎時邸跡(雪ノ下一丁目273番口)検出の家屋跡



北条時房・顎時邸跡(雪ノ下一丁目233番9)III・IV面全景



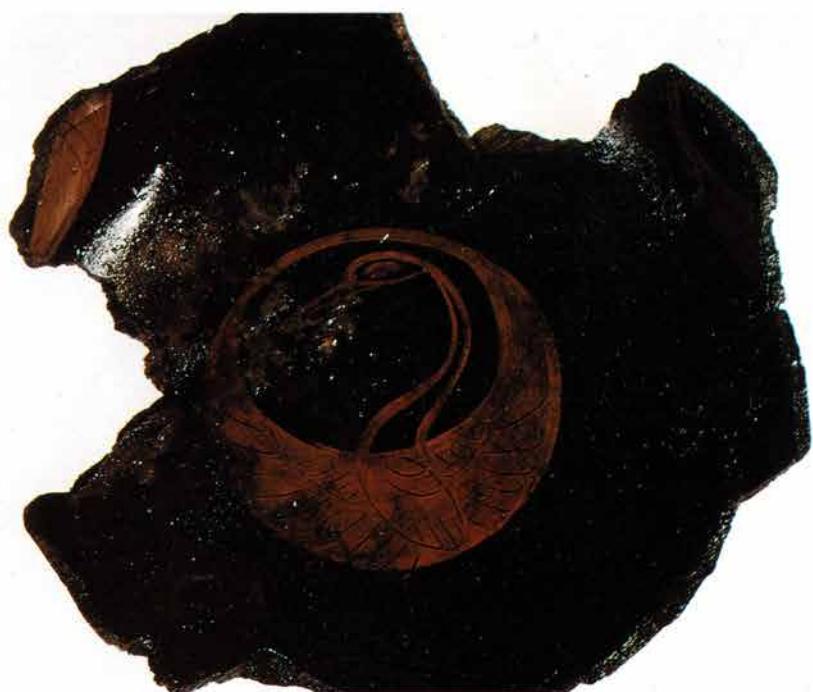
北条泰時・時頼邸跡(雪ノ下一丁目419番3)全景



若宮大路周辺遺跡群(由比が浜一丁目128番7)全景



北条時房・顯時邸(雪ノ下一丁目273番口)野沓出土状態



北条時房・顯時邸跡(雪ノ下一丁目273番口)出土鶴丸文漆絵皿



北条時房・顯時邸跡(雪ノ下一丁目273番口)検出の若宮大路側溝

序 文

鎌倉市教育委員会

教育長 尾崎 實

近年、鎌倉の街は、古い家屋や店舗の建て替えが相ついでいます。その中で、埋蔵文化財に影響を及ぼす様な大規模な工事も多くなってきました。そのため、工事に先だって発掘調査を実施する件数も多くなりました。このため昭和59年度からは国庫・県費の補助を受けて個人専用住宅等については鎌倉市教育委員会が独自に発掘調査を実施するようにしてきました。

しかし急速な都市化・再開発が進む中で調査が順調に進んできたとは言えません。

郷土の文化財を守るということは市民の責務ですが、当市のように市街地の中心と遺跡の中心が全く重なってしまうという条件のもとでは、特に市民の皆様のご理解なくしては、埋蔵文化財の保存や発掘調査は不可能であるといえましょう。皆様の御協力をお願い申し上げる次第です。工事計画作成に当ってはできるだけ早くから当委員会との協議を行い、文化財の保護の方策を煮つめて行って頂きたいと思います。

本書は昭和61年度に国庫・県費補助を受けて、鎌倉市教育委員会が実施した、個人専用住宅・店舗併用住宅建設に伴う発掘調査の記録です。本書が鎌倉の歴史を明らかにするのに少しでも役立つことを祈念すると共に、調査実施に際してお世話になった調査員をはじめ多くの方々に、心からお礼を申し上げます。

例　言

1. 本書は昭和61年度国庫補助事業埋蔵文化財緊急調査にかかる発掘調査報告である。
2. 本書は、以下に掲げる箇所の調査報告を収録したものである。
 - (1) 北条時房・顕時邸跡（雪ノ下一丁目233番9他地点）
 - (2) 北条泰時・時頼邸跡（雪ノ下一丁目419番3地点）
3. 昭和61年度にはこの他、北条時房・顕時邸跡(雪ノ下一丁目273番一口地点)と若宮大路周辺遺跡群(由比ガ浜一丁目128番7他地点)の2箇所の発掘調査を行ったが、文化庁記念物課の了承を得て報告書の刊行を次年度に繰越した。
4. 発掘調査及び出土品整理は鎌倉市教育委員会文化財保護課が行った。
5. 各調査地における施主・調査期間・所在地等は、別表を参照されたい。
6. 出土品及び写真・図面等の記録は、鎌倉市教育委員会文化財保護課が保管している。

目 次

序 文	(i)
例 言	(ii)
目 次	(iii)
I はじめに	(1)
II 調査の概況	(5)
1. 北条時房・顕時邸跡	(5)
例言	(6)
目次	(7)
第一章 調査地点の位置	(11)
第二章 調査の概要	(14)
第三章 検出遺構と出土遺物	(16)
第四章 調査のまとめ	(70)
図版	(75)
2. 北条泰時・時頼邸跡	(101)
例言	(102)
第一章 調査地点の位置と歴史的環境	(103)
第二章 調査の経過	(104)
第三章 検出遺構	(104)
第四章 出土遺物	(113)
第五章 まとめ	(115)
図版	(117)

I はじめに

発掘調査に至る経過及び発掘調査期間は以下のとおりである。

1. 北条時房・顕時邸跡（雪ノ下一丁目233番9他地点）

鎌倉市雪ノ下一丁目233番9・234番4に所在する。当遺跡は北条時房・顕時の館跡と推定され、鎌倉における北条氏の代表的な館跡の一つである。

昭和60年11月、鉄筋コンクリート造3階建店舗併用住宅建設に当り、当該地の埋蔵文化財の取り扱いについて協議したい旨、設計者から申し出があった。このため建築計画について事情聴取し、至急発掘調査を実施したい旨回答した。同年12月、計画図面に基づいて協議したところ、地盤が軟弱であるため、杭打工法で基礎を造りたいとのことであった。当該工法では埋蔵文化財に対する影響は避けられないため、同年12月16日～18日かけて試掘調査を行い、木組溝・礎石等の遺構と共に大量の遺物を発見した。これに基づき、施主、設計者と協議したところ、昭和61年3月に工事に着手したい旨、調査には協力するが、発掘調査経費の全額負担は困難である旨、申し出があった。このため経費負担については国庫補助の対象として良いか県文化財保護課と協議するが、対応できたとしても4月以降である旨、回答した。これにより県文化財保護課と協議したところ、個人経営の店舗併用住宅であり、経費負担は困難であるから昭和61年度の国庫補助事業に組み込み鎌倉市教育委員会が発掘調査を実施するよう指導があった。昭和61年2月、重ねて県文化財保護課と協議したところ、同様な指導があったため、その内容を設計者へ伝達し、あわせて文化財保護法第57条の2の届出を提出するよう指導した。同年3月12日、届出の提出があり、あわせて調査工程の打合せを行ったが、3月31日、工程が遅れる旨の連絡があったため、工程について再度協議を行った。4月、調査工程の詳細について協議を行い、4月30日付で県教育長からの通知があったので、これに基づき、5月6日、施主・設計者・建設業者と最終協議を行い、協議が整ったので鎌倉市教育委員会が発掘調査を実施した。

2. 北条泰時・時頼邸跡（雪ノ下一丁目419番3地点）

鎌倉市雪ノ下一丁目419番3に所在する。

当遺跡は北条泰時・時頼の館跡と推定され、鎌倉における北条氏の代表的館跡の一つであり、若宮幕府跡の一画であるとも推定されている。

昭和61年4月、建築確認申請に伴う個人専用住宅建設の事前相談があり、基礎が深く、埋蔵文化財に対する影響が予想されるため、試掘調査を実施し、その結果により協議を進めたい旨、指導を行った。これにより4月28日～5月1日まで試掘調査を行ったところ、良好な遺構面と柱穴等を検出した。当該設計では埋蔵文化財に対する影響が避けられないため、設計変更を依頼した。あわせ

て県文化財保護課と協議したところ、個人用住宅であるため、設計変更が不可能である場合は国庫補助事業として対応するよう指導があった。7月2日、設計者から設計変更は施主の意志が固く、できない旨の回答があり、あわせて文化財保護法第57条の2の届出の提出があった。このため施主と調査の工程等について協議を行ったところ、同年9月9日付で県教育長からの通知があったので同年8月11日から鎌倉市教育委員会が発掘調査を実施した。

3. 北条時房・顯時邸跡（雪ノ下一丁目273番口地点）

鎌倉市雪ノ下一丁目273番口に所在する。

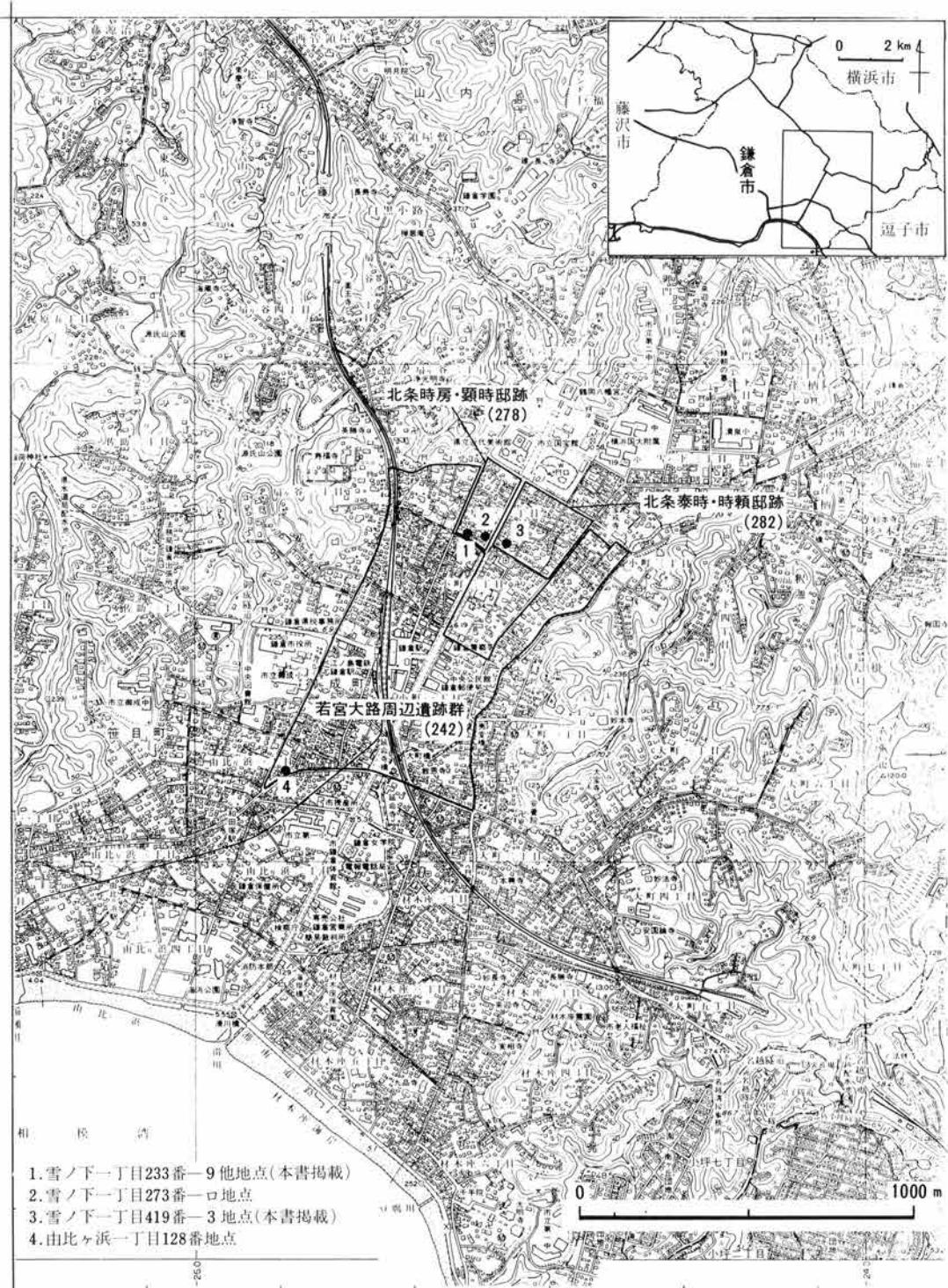
昭和60年1月、建築確認申請に基づく事前相談があり、当該地に鉄筋コンクリート造4階建の店舗ビル建設の計画があることが判明した。このため試掘調査の実施、文化財保護法第57条の2の届出の提出及び原因者負担で発掘調査を実施するよう指導を行った。同年8月、再度建築確認申請に伴う事前相談があり、前記の内容を指導したところ、10月中旬に現状建物の解体を行いたい旨の連絡があった。このため試掘の日程の調整をするよう指導した。昭和61年1月、事業計画が固まったため、至急試掘調査を実施してほしい旨の要望があったため、1月25日から28日まで調査を行い、若宮大路に平行する建築遺構、井戸等を検出した。このため、事前の発掘調査の実施は不可避である旨を施主に説明した。2月6日付で届出が提出されたが、計画に一部変更があり、建物内に事業者の住宅が含まれることになったため、県文化財保護課へ送付し、あわせて取扱いについて協議を行った。2月17日、施主から事情聴取を行ったところ、事業者が個人であり、調査費の全額負担は難しい旨の回答があった。このため、県文化財保護課へ報告したところ、県文化財保護課が文化庁記念物課と協議し、一部について昭和61年度国庫補助事業市内遺跡調査として対応するよう指導があった旨連絡があった。このため事業者に指導内容を伝えると共に調査経費について協議を行い、発掘調査実施について了解が得られたため、県文化財保護課及び文化庁記念物課に報告した。一方、2月20日付で県教育長から通知があったため、これに基づき調査、方法、日程等調整を行い、調査の早期着手に努めたが、事前工事が遅延したため発掘調査の着手も遅れ、5月20日から発掘調査に着手した。

4. 若宮大路周辺遺跡群（由比ガ浜一丁目128番7他地点）

鎌倉市由比ガ浜一丁目128番7、同番12、13、同15に所在する。

当該遺跡は国指定史跡若宮大路周辺に形成された武家・公家の館を中心とする遺跡群で、中世都市鎌倉の中核となる遺跡である。

昭和61年4月、建築確認申請に伴う事前相談があり、鉄筋コンクリート造3階建の店舗併用住宅建設計画があることが判明した。このため試掘調査を実施し、その結果により協議を進めたい旨、指導を行った。6月13日～20日まで試掘調査を行ったところ、遺構面、土塙等を検出したため、当該計画では埋蔵文化財が破壊されるため事前の発掘調査が必要である旨説明した。あわせて事情聴



昭和61年度の緊急発掘調査地点

()内数字は県遺跡台帳番号

収を行ったところ、地主三者の共同事業であり、三者各々個人又は零細企業であるため、発掘調査費の軽減をはかってほしい旨、文化財保護法第57条の2の届出の提出を指導した。また調査に早急に着手できるよう要望があった。これにより県文化財保護課と協議したところ、事業者がいずれも個人又は零細企業であり、また自己用住宅もあることから、国庫補助事業市内遺跡調査として鎌倉市が発掘調査を実施するよう指導があった。これに基づき、施主と協議し、同年7月2日付で届出があったため、県宛送付したところ、7月9日付で県教育長名で通知があったので、7月17日から発掘調査を実施した。

昭和61年度調査地点一覧

No.	遺 跡 名	所 在 地	原 因 者	調 査 原 因	遺 跡 種 類	調 査 面 積	現 地 調 査 期 間
1	北条時房・ 顕時邸跡 (No.278)	雪ノ下一丁目 273番口	鈴木 忠一	店舗併用住宅	館	200m ²	61. 5. 20 61. 7. 21
2	北条時房・ 顕時邸跡 (No.278)	雪ノ下一丁目 233番9他	吉崎俊一郎	店舗併用住宅	館	152m ²	61. 5. 8 61. 6. 22
3	若宮大路周辺 遺跡群 (No.242)	由比が浜一丁目 128番7	鬼頭 貞夫 他	店舗併用住宅	館	300m ²	61. 7. 17 61. 8. 30
4	北条泰時・ 時頼邸跡 (No.282)	雪ノ下一丁目 419番3	山本 すず	専用住宅	館	87m ²	61. 8. 11 61. 8. 30

II 調査の概況

1. 北条時房・顯時邸跡

雪ノ下一丁目233番9他地点

例　　言

1. 本報は鎌倉市雪ノ下一丁目233番9他における、吉崎俊一郎の店舗併用住宅建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の報告である。

2. 本報の執筆には馬渕和雄が、図版作成には馬渕・浜口康があたり、馬渕がこれを編集した。

3. 本報で使用した写真のうち、遺構は馬渕・浜口・武淳一が撮り、遺物は市教育委員会嘱託福田誠が撮った。

4. 調査体制は以下の通り。

担当者　　馬渕和雄（鎌倉市教育委員会嘱託）

調査員　　浜口康

調査補助員　　武淳一・田畠佐和子・村上和久
(資料整理)・渡部律子(資料整理)
理)・ホップ黄子(資料整理)

5. 出土品等発掘調査資料は鎌倉市教育委員会が保管している。

6. 発掘調査、および資料整理の際には、以下の諸氏・諸機関から貴重な御教示と援助を賜った。記して感謝の意を表したい。(順不同・敬称略)

手塚直樹・河野真知郎・斎木秀雄・宮田真・原広志・福田誠・大河内勉・宗臺秀明・菊川英政・木村美代治・高田静子・及川加代子・吉田章一郎
貫達人・三浦勝男・石井進・大三輪龍彦・佐久間貴士・中田英・服部実喜・柳川清彦・清水信行・伊藤正義・小林康幸・清水菜穂・荒川正明・大橋康二・鎌倉市高齢者事業団・清興建設・角田組・都実業

目 次

例 言	(6)
目 次	(7)

本 文 目 次

第一章 調査地点の位置	(11)
第二章 調査の概要	(14)
第三章 検出遺構と出土遺物	(16)
第1節 層序	(16)
第2節 I面の遺構と遺物	(16)
第3節 II面の遺構と遺物	(23)
第4節 III面の遺構と遺物	(46)
第5節 IV面の遺構と遺物	(50)
第6節 包含層等からの出土遺物	(51)
第四章 調査のまとめ	(70)
遺構の変遷とその年代	(70)
南北溝について	(71)

挿 図 目 次

図1 鶴岡八幡宮周辺の主な発掘調査地点	(12)	図15 木組遺構出土遺物	(28)
図2 調査地点位置図	図16 柱穴列	(30)
図3 調査区設定図	図17 囲炉裏1	(30)
図4 I面遺構全図	図18 囲炉裏2	(30)
図5 I面出土遺物(1)	図19 囲炉裏2出土遺物	(30)
図6 I面出土遺物(2)	図20 井戸	(31)
図7 I面出土遺物(3)	図21 井戸出土遺物(1)	(32)
図8 I面北東土丹面出土遺物	図22 井戸出土遺物(2)	(33)
図9 I面柱穴出土遺物	図23 井戸掘方出土遺物	(35)
図10 II面遺構全図	図24 土塙1・2・3・4	(36)
図11 南北溝	図25 土塙3出土遺物	(37)
図12 南北溝出土遺物	図26 土塙4・5出土遺物	(38)
図13 東西溝出土遺物	図27 柱穴32出土遺物	(39)
図14 木組遺構	図28 II面上出土遺物(1)	(40)

- | | |
|--------------------------|-----------------------------|
| 図29 II面上出土遺物(2).....(42) | 図43 I面上包含層出土遺物.....(53) |
| 図30 II面上出土遺物(3).....(43) | 図44 II面上包含層出土遺物(1)....(55) |
| 図31 II面上出土遺物(4).....(44) | 図45 II面上包含層出土遺物(2)....(56) |
| 図32 II面下土丹敷.....(46) | 図46 II面上包含層出土遺物(3)....(58) |
| 図33 II面下土丹敷内土塙.....(46) | 図47 II面上包含層出土遺物(4)....(59) |
| 図34 III・IV面遺構全図.....(47) | 図48 II面上包含層出土遺物(5)....(61) |
| 図35 III面柱穴と礎板群.....(47) | 図49 II面上包含層出土遺物(6)....(62) |
| 図36 柱穴58出土遺物.....(48) | 図50 III面上包含層出土遺物(1)....(64) |
| 図37 土塙6・8.....(48) | 図51 III面上包含層出土遺物(2)....(65) |
| 図38 土塙6出土遺物.....(48) | 図52 III面上包含層出土遺物(3)....(66) |
| 図39 木組遺構2・3.....(48) | 図53 III面上包含層出土遺物(4)....(68) |
| 図40 木組遺構2西側出土遺物.....(49) | 図54 表採品.....(69) |
| 図41 IV面出土遺物.....(51) | 図55 調査地点近辺の溝検出例.....(72) |
| 図42 上層客土出土遺物.....(52) | |

図版目次

- | | |
|---------------------|-----------------------|
| 図版1-1 調査開始時近景(南から) | 図版10-1 囲炉裏1(南から) |
| 1-2 調査開始時全景(南東から) | 10-2 囲炉裏2(東から) |
| 図版2-1 I面上南東土丹面(西から) | 図版11-1 II面木組遺構(東から) |
| 2-2 同上(東から) | 11-2 柱穴列(北から) |
| 図版3-1 I面西域全景(北から) | 図版12-1 III・IV面全景(南から) |
| 3-2 同上(南から) | 12-2 同上(西から) |
| 図版4-1 I面東域全景(西から) | 図版13-1 木組遺構2・3(南から) |
| 4-2 同上(東から) | 13-2 同上(北から) |
| 図版5-1 II面西域全景(北から) | 図版14-1 かわらけ出土状況 |
| 5-2 同上(南から) | 14-2 木製品出土状況 |
| 図版6-1 II面東域全景(西から) | 14-3 自在鉤出土状況 |
| 6-2 同上(東から) | 図版15-1 漆器(鏡箱蓋)出土状況 |
| 図版7-1 南北溝(南から) | 15-2 漆器椀出土状況 |
| 7-2 同上(北から) | 15-3 漆器椀出土状況 |
| 図版8-1 南北溝北端拡張区(南から) | 図版16-1 かわらけ・漆器出土状況 |
| 8-2 東西溝(東北から) | 16-2 漆器・板草履出土状況 |
| 図版9-1 井戸(西から) | 16-3 かわらけ・漆器出土状況 |
| 9-2 同上木枠内部(東から) | 図版17-1 高足駄出土状況 |

図版17-2	鎌出土状況	図版22-5	ミニチュアかわらけ
17-3	子供用下駄出土状況	22-6	鉄製品
図版18-1	舶載陶磁器	図版23-1	火鉢と滑石製品
18-2	同上	23-2	砥石と硯
図版19-1	常滑・渥美	図版24-1	漆器椀
19-2	常滑	24-2	杓文字
図版20-1	捏鉢類	24-3	漆器蓋
20-2	同上	24-4	漆器鏡箱蓋
図版21-1	墨書きわらけ	図版25-1	木製品
21-2	かわらけ類	25-2	同上
図版22-1	火鉢	図版26-1	木簡
22-2	土釜	26-2	横櫛
22-3	伊万里染付	26-3	下駄
22-4	白かわらけ	26-4	高足駄

第一章 調査地点の位置

北条時房・顕時邸跡は若宮大路北端西側にあり、北面を鶴岡八幡宮、東面を若宮大路に臨む、東西約110m、南北約220mの長方形の場所を占めている。北条泰時・時頼邸跡とも、いわゆる若宮大路幕府跡ともいわれる場所の、若宮大路を挟んで相対する位置でもある。調査地点は、この場所の南辺やや西寄り中央部の一角にある。地番は鎌倉市雪ノ下一丁目233番-9および234番-4。

時房・顕時邸の調査は、本地点以前にも二箇所で行われており(図1の4と5)、昭和61年度には本地点の他に二地点が調査されている(同2と3)。また年度内には近辺で調査の予定がなおある。

このように当地付近の調査事例は増加しつつあり、図1の2および3の地点では、若宮大路の側溝と考えられる大規模な南北溝が検出されている。これは以前に検出された対面位置の北条泰時・^{註1}時頼邸跡の若宮大路側溝と併せて、大路の様相を探る有力な手掛りになったと言えよう。

北条時房(1175-1240)は時政の子で、連署・相模守に任せられ、奥州征伐(1189)・畠山重忠追討(1205)・和田の乱(1213)に従軍。承久の変の際には泰時と共に上洛し、のち六波羅南方(初代)^{註2}探題となる。連署は泰時のもとで元仁元年(1224)から没するまで任じた。

北条顕時(1248-1301)は実時の子。引付衆・評定衆などの要職を務めたが、弘安八年(1285)岳父安達泰盛の起こした霜月騒動のため、下総国埴生庄に配流された。のち出家、号恵日。実時の開いた称名寺を整備した。^{註3}

註

1 馬渕和雄『北条泰時・時頼邸跡 雪ノ下一丁目371番-1番地点発掘調査報告書』北条泰時・時頼邸跡発掘調査團／鎌倉市教育委員会1985

2 『鎌倉事典』東京堂出版1976 268・269頁

貫達人「北条氏亭址考」『金沢文庫研究紀要』第8号 1971 18頁

3 『鎌倉事典』263・264頁



図1 鶴岡八幡宮周辺の主な発掘調査地点

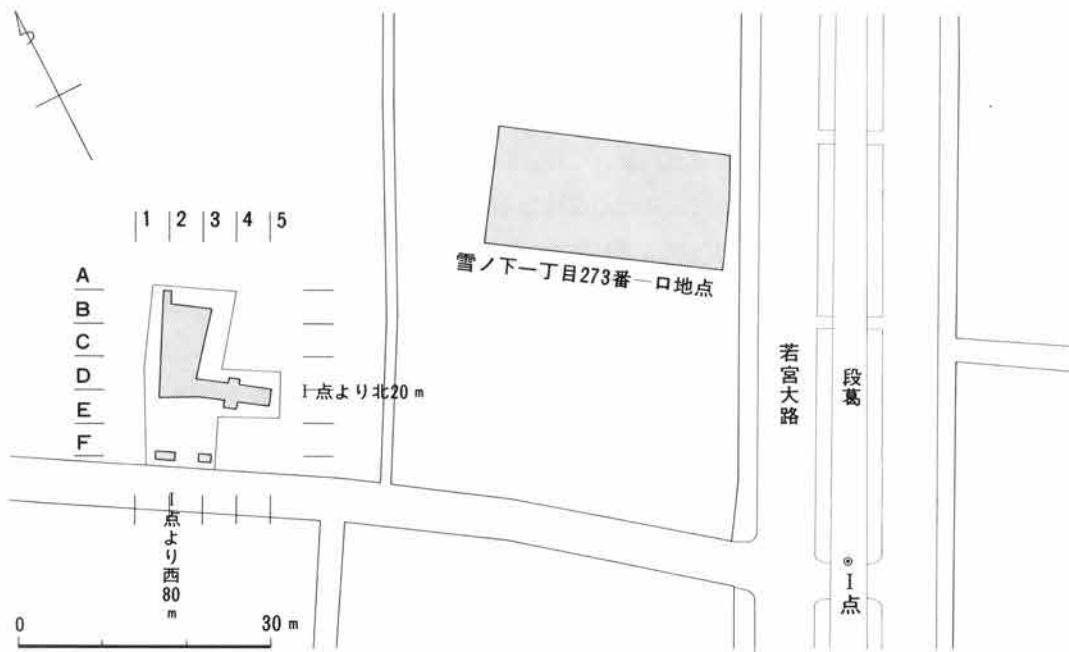


図2 調査地点位置図

図1 調査地点名

1. 雪ノ下一丁目233番—9他地点(調査地点)
2. 雪ノ下一丁目273番一口地点
3. 雪ノ下一丁目274番—2地点
4. 雪ノ下一丁目269番地点
5. 雪ノ下一丁目267番—1地点
6. 雪ノ下一丁目419番—3地点
7. 雪ノ下一丁目372番—7地点
8. 雪ノ下一丁目371番—1地点
9. 雪ノ下一丁目374番—2地点
10. 鶴岡八幡宮境内研修道場用地
11. " 国宝館収蔵庫用地
12. " 直会殿用地
13. 大倉南御門遺跡
14. " B地点
15. 小林邸内遺跡

第二章 調査の概要

昭和60年12月16日～18日に当該地点において行った三箇所、計 18m^2 の試掘調査の結果、どの試掘壙においても地表下80～90cmまで近・現代の整地層が認められたので、本調査の際には70cmの深度まで重機によって排土した。以下根切深度の地表下140cmまで人力によって掘り下げた。また隣地建物が境界線のすぐ近くまで迫っているため、湧水が非常に多く軟弱な土質の当地点では調査区壁面の崩落の危険があると判断し、境界線から1.5～2m程度の後退距離を確保することにした。調査区は調査期間中に隨時拡張し、南端にも二箇所の調査区を設けたので、調査面積は最終的には約81.5 m^2 となった。調査期間は昭和61年5月8日から6月20日までである。なお後退距離をとった未調査部分については、建築に伴なう掘削の際に立会い調査を実施した。

調査にあたっては、若宮大路主軸に平行した軸線と、これに直交する軸線を4mおきに配し、便宜上前者を南北軸、後者を東西軸と呼んでそれぞれ算用数字とアルファベットの名称を付した。南北軸方位はN-32.5°-Eであり、若宮大路中心軸からの距離は、2軸でちょうど80mを測る。

なお以下の文中で使用する「土丹」・「鎌倉石」は、それぞれ泥岩・凝灰角礫岩の当地域における呼称である。

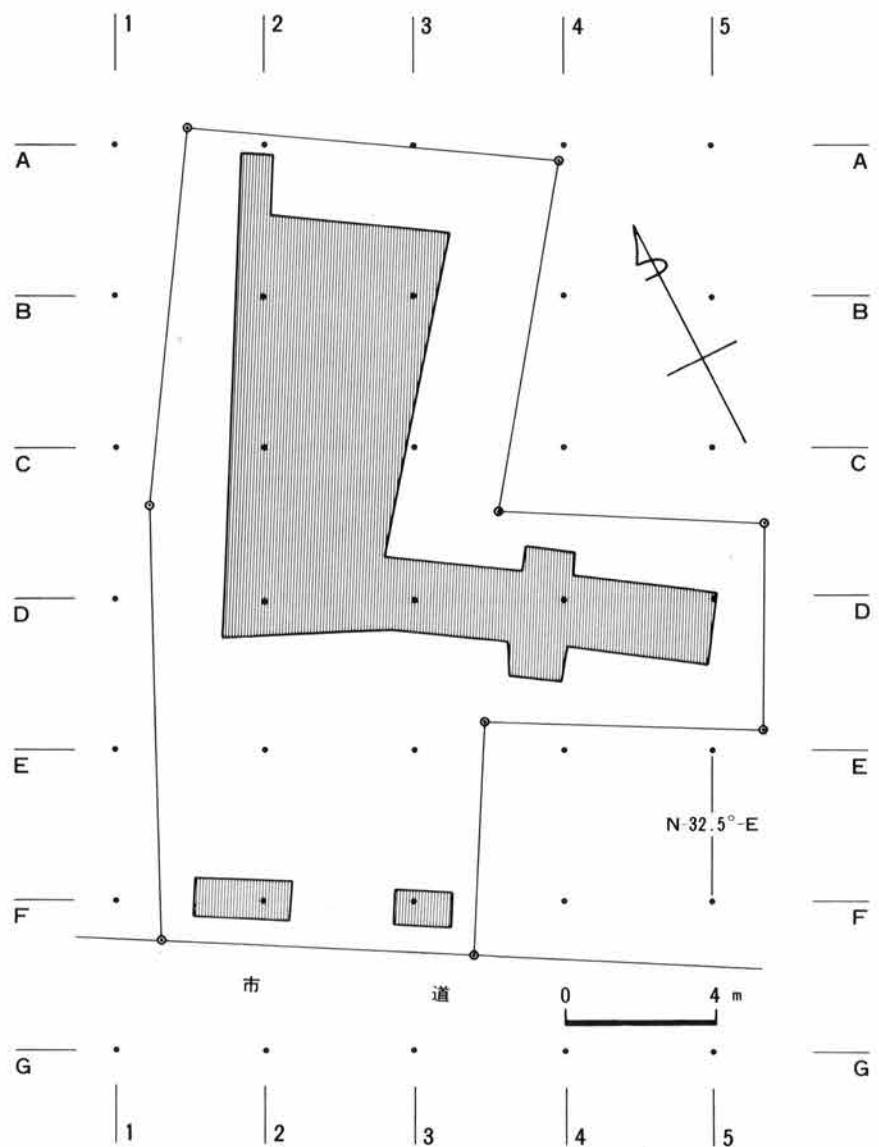


図3 調査区設定図

* D軸はI点(図2参照)から北20m
2軸はI点(同上)から東80m

第三章 検出遺構と出土遺物

第1節 層序

地表下約70cmで黒色の中世包含層に達する。この黒色土は20~30cmの厚みがあり、かわらけ・土丹等の小片を多量に含む、粘性土である（I面上包含層）。これを除いて現われるI面は部分的に貝殻の粉・人頭大の土丹塊によって構築されているが、やや柔かく、築き固められたという程ではない。

I面下には明褐色軟質の柔弱な土の厚い堆積が認められた（第II面上包含層）。この土は植物纖維を大量に含み、当初は明褐色を呈するが忽ち暗褐色を呈するようになる、水気の多い、木製品を多量に包含する土である。

第II面は、調査区北域では土丹版築、南域では茶褐色粘質土上にあり、北域に比べ南域は30~40cm程度低くなっている。北域の土丹版築面は修復が見られるが、連続した時期で断絶はないと判断した。

すでに予定深度に達していたので、III面は南域のみで検出した。上に載る包含層はこれも、明褐色軟質の、木製品の良好に遺存する土である。この層の下層には半人頭大~人頭大の土丹の集石が部分的に認められ、範囲内から土塙を検出した。III面には部分的（調査区南西域）に土を築き固めた土間様の硬化面がある。またIII面の一部を掘り下げ、下層遺構面（第IV面）を検出した。この間層も又、明褐色植物纖維質の軟質土である。

第2節 I面の遺構と遺物

遺構面は概ね暗褐色土上にあるが、調査区北東域と東端部に、半人頭大の土丹版築が残っている。面上には、ほぼ全域に涉って白い貝殻の粉が撒かれており、これがこの面の一連であることの目安となった。

面上からは柱穴数10口、礎板、木組の名残り等が検出されたが、総じて荒れており、建物などは見当らなかった。

1. I面出土遺物（図5~7）

青磁（1~5）

1 - 鎬蓮弁文碗。口径19.2cm。釉薬は灰緑色半透明、胎土は灰色。幅の広い蓮弁文を持つ。2 - 同前。口径16.3cm。釉薬は灰緑色失透、胎土は灰色。3 - 同前。口径15.3cm。釉薬は緑色半透明、胎土は灰白色堅緻。4 - 口径9.3cm。折腰小碗。釉薬は灰緑色で濁る。胎土は灰色。5 - 小碗。

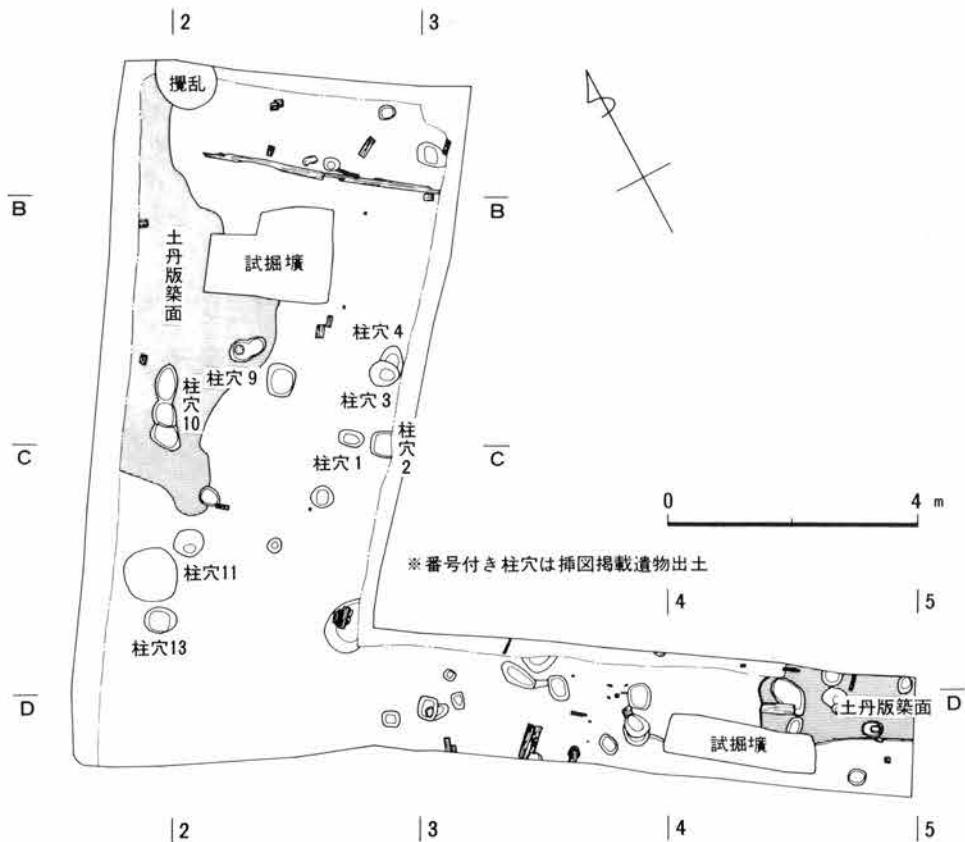


図4 I面遺構全図

径 7.7 cm。釉薬は緑褐色透明、胎土は灰色。

白磁 (6~9)

6—口元げ皿。口径11.9cm、釉薬は透明で胎土は灰白色結晶性。7—同前。釉薬はやや白濁、胎土は灰色。8—同前。底径 7.4 cm。釉薬は乳白色、胎土は灰白色結晶性。9—同前。釉薬は灰白色、胎土は灰色でガラス質。

青白磁 (10)

瓜形水注。胴部径 9.5 cm 前後、口径 2.1 cm 前後。釉薬は淡水青色透明、胎土は白色結晶性。

常滑 (11~14)

11—壺。胴部最大径17.7cm。胎土は灰黒色で岩石質。器表面は茶褐色。肩部はヘラ削り。12—捏鉢。胎土は黄褐色～灰黒色。器表面はほぼ灰黒色。13—甕。頸部～縁帶に灰緑色の降灰。胎土は灰色で粗い。14—同前。口径39cm。肩部に降灰。胎土は灰黒色で岩石質。

猿投 (15)

壺。底径 9 cm。胎土は灰色堅緻。一部に降灰。

山茶碗窯系捏鉢 (16~19)

16—内外面に降灰顯著。胎土は灰色で粗い。17—口径19cm。片口が付く。胎土は灰色できわめて

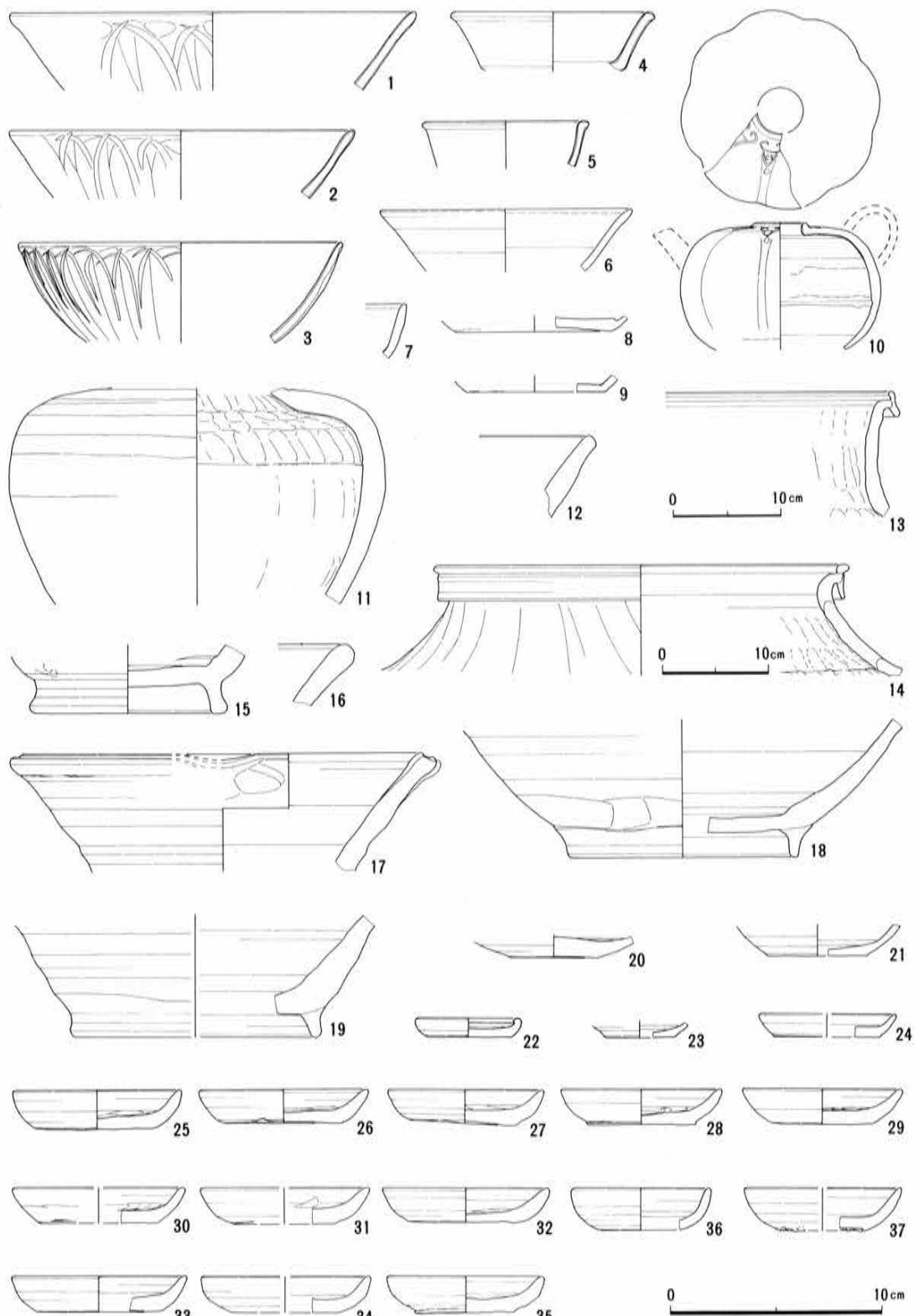


図 5 I面出土遺物(1)

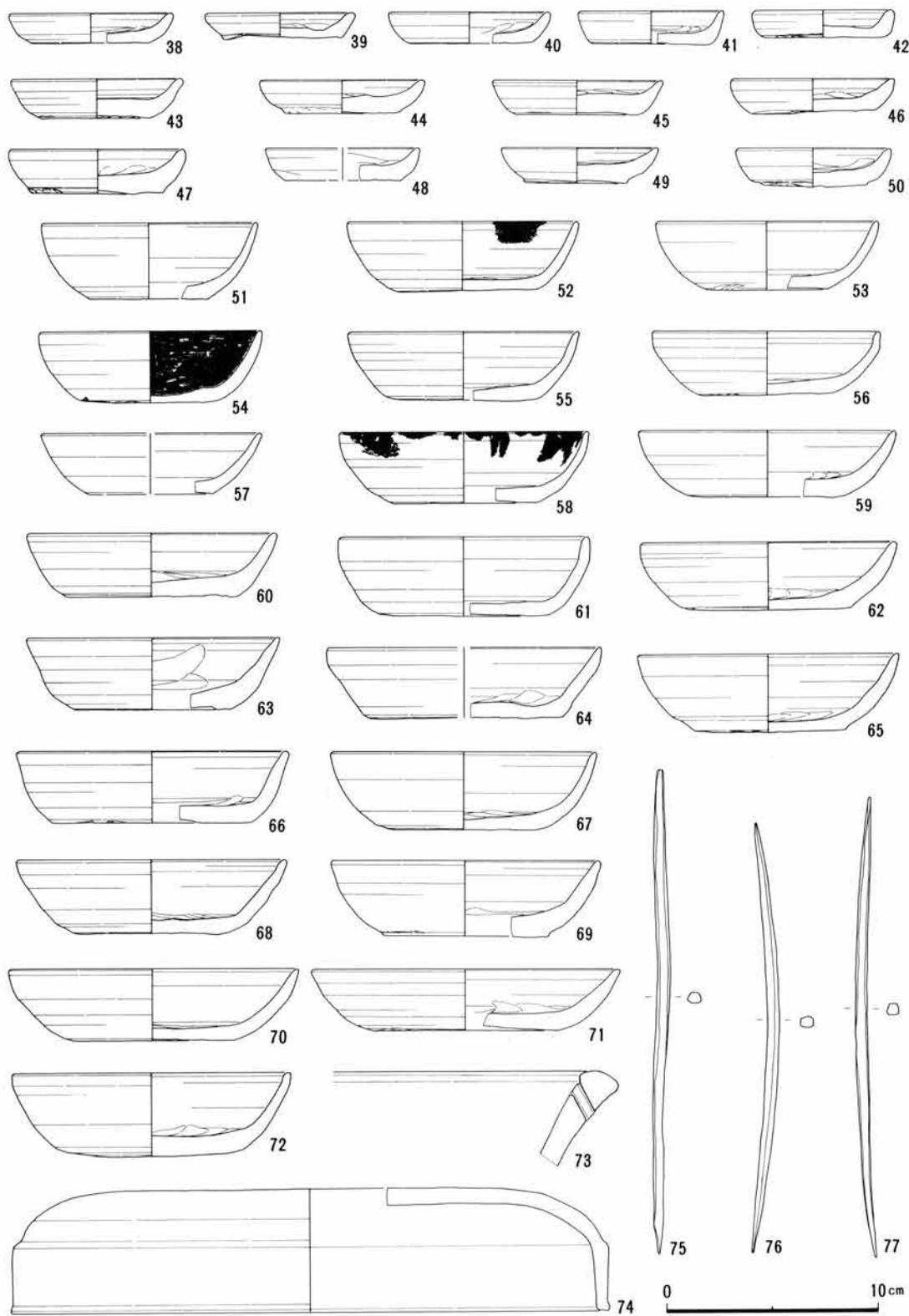


図6 I面出土遺物(2)

堅緻。18—底径10.7cm。胎土は灰黒色で粗い。19—底径11.5cm。胎土は灰色、粗い。

白かわらけ（20・21）

20—皿底部。底径4.2cm。胎土は乳白色でやや軟質。21—小皿底部。底径4.7cm。胎土は灰色。

かわらけ（22～72）

すべてロクロ成形（I類）である。口径によつミニチュア型（23・24）—Ia類・小型（24～50）—Ib類・中型（51～57）—Ic類・大型（58～72）—Id類に分けられる（以下の記述はこの分類に従つて進める）。

Ia類：小さな壁が内側に折れるもの（22）—Ia-1と普通のもの（23）Ia-2がある。

Ib類：器壁が薄く、内彎し、器高の高いもの（36・37）Ib-1等がある。器壁が薄くて器高の比較的低いもの（25～35）Ib-2・器壁が薄くて器高の非常に低いもの（38～42）Ib-3・口径が比較的大きく、器壁が楔形で斜め上方に向くもの（43～50）Ib-4もみられる。

Ic類：概ね薄手で器高が高く、器壁は内彎する（Ic-1）。

Id類：薄手、内彎形のものが多いが（61・65・67・68・70・72）Ib-1、器高が低めで直線的な器壁のもの（60・64）Id-2、同じく低めで大口径のもの（71）Id-3、体部上半の外反するもの（63）Id-4などがある。

火鉢（73）

瓦質で口縁下に円孔がある。口縁端部は肥厚し、上縁部に丸味を帯びる。

漆器（74）

鏡箱蓋。口径28cm、器高5.9cm。黒漆塗りで無文。

箸状木製品（75～77）

75—長さ23cm、幅6mm。76—長さ20.6cm、幅5mm。77—長さ21.8cm、幅5mm。

銭（78～82）

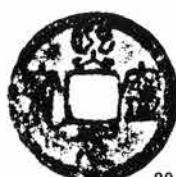
図7に掲げたもの他に、78・80と同型のものが各一枚出土した。82は背面を擱つてあり、縁辺を欠く。



皇宋通宝
宝元二年
(1038)



熙寧元宝
熙寧年間
(1068—1077)



同左



紹聖元宝
紹聖年間
(1094—1098)



元豐通宝
元豐元年
(1078)

図7 I面出土遺物(3)

2. I 面北東土丹面出土遺物（図8）

青磁（1）

劃花文系の碗（遺存部分は無文）。底径 5 cm。釉薬は暗緑色透明、胎土は灰色で精緻。

火鉢（2）

瓦質で口縁下に円孔がある。口縁部は内側に凸帯を持ち、上面は丸味を帯びる。胎土は灰色で、ややきめが粗い。外面は焼けて剥落が顕著。

かわらけ（3～15）

1点の手捏ね成形大型（II c 類）が含まれる。

I b 類：I b - 2（6）、I b - 4（7・9）

やや厚手で内彎する小さめの器壁のもの（8・10）
I b - 5 に分けられる。

I d 類：I d - 1（12・14）、I d - 2（13）、
I d - 3（15）がある。

3. 柱穴1出土遺物（図9）

かわらけ（1～9）

I b - 1（2・3）、I c - 2（1）が出土している。

4. 柱穴2出土遺物（図9）

青磁（4・5）

4—劃花文碗。内面に区画を持ち蓮華文を配する。釉薬は灰緑色透明、胎土は灰色でやや岩石質。

5—鎬蓮弁文碗。口径15.3cm。釉薬は淡緑色失透、胎土は灰色結晶質。

白磁（6）

口兀皿。口径 7.5 cm、底部 4.5 cm、器高 1.8 cm。釉薬はやや白濁、胎土は灰白色で結晶状。

かわらけ（7・8）

I a - 2 類（7）、I c - 1 類（8）の2点である。

高坏（9）

脚部。最大径 3.3 cm。胎土は肌色、砂質で金雲母を含む。中空の、管状になっている。

5. 柱穴3出土遺物（図9）

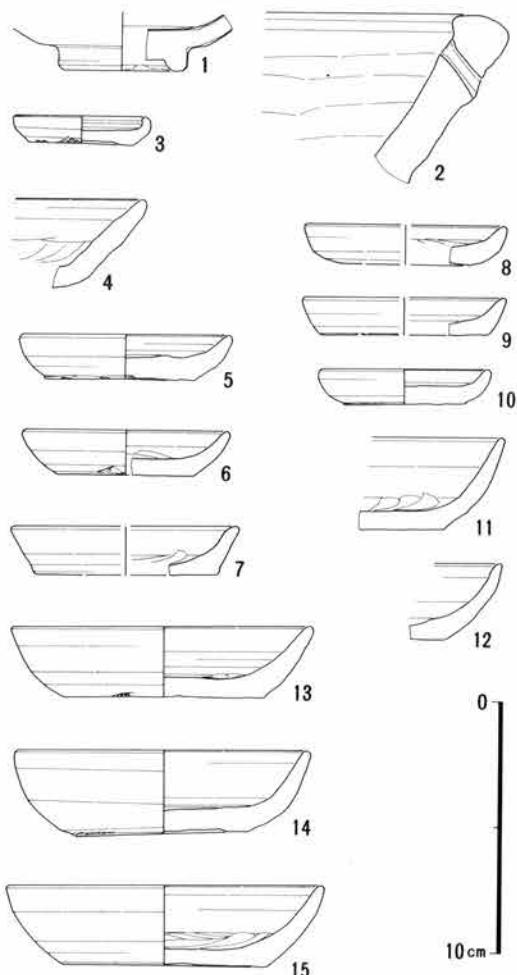


図8 I 面北東土丹面出土遺物

不明木製品 (10)

基部に 2 孔があけられている。幅 1.3 cm。

6. 柱穴 4 出土遺物 (図 9)

青磁 (11)

碗底部。底径 5.5 cm。内底面に、4 つの目痕がある。二次焼成を受けて釉薬が緑褐色に変色し、失透している。胎土は灰～肌色。焼成不良。

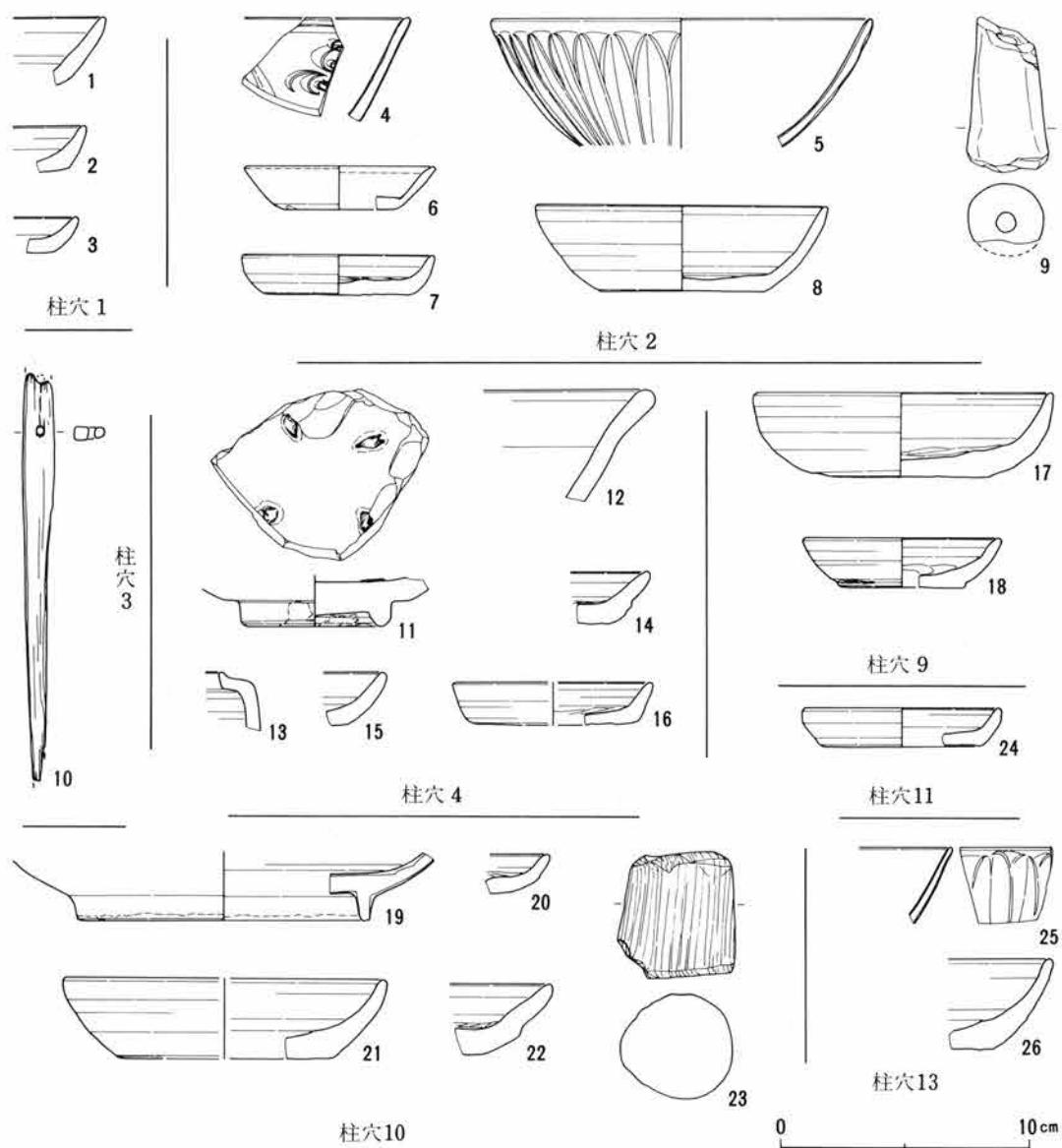


図 9 I 面柱穴出土遺物

常滑 (12)

捏鉢。やや肥厚し外反する口縁を持つ。胎土は明褐色、長石を多く含む。焼成不良。

土器小壺 (13)

胎土は橙色でかわらけ質。

かわらけ (14~16)

手捏ね成形の小型のもの (14) II b 類と I b - 2 類 (15) 、 I b - 4 類 (16) がある。

7. 柱穴 9 出土遺物 (図 9)

かわらけ (17・18) の I d - 1 (17) と I b - 1 (18) が出土している。

8. 柱穴 10 出土遺物 (図 9)

青磁 (19)

皿底部。底径 11.7 cm。釉薬は明緑色失透、胎土は灰白色で結晶質。

かわらけ (20~22)

II b 類 (20) 、 II d 類 (22) 、 I d - 3 類 (21) の 3 点が出土。

不明木製品 (23)

円筒形の木製品。直径 4.8 cm.

9. 柱穴 11 出土遺物 (図 9)

I b - 3 類のかわらけ (24) が出土。

10. 柱穴 13 出土遺物 (図 9)

青磁 (25)

鎬蓮弁文碗。釉薬は灰緑色透明で気泡多い。胎土は灰色で精緻。

かわらけ (26)

体部下半が厚く、急激に薄くなって内巣氣味に伸びるもの。

第 3 節 II 面の遺構と遺物

II 面はほぼ C 軸付近を境に南北で様相が異なっており、以北では堅牢な土丹版築、以南では茶褐色土上にある。また、南域は北域に較べ、約 40~50 cm 低い。北域の土丹版築には修復が認められた。

この面で検出された遺構は、掘立柱建物らしき柱穴列を含む柱穴約 70 口、東西方向と南北方向の溝 1 条ずつ、木組遺構 1 、囲炉裏 2 基、井戸 1 基、土塙 5 基である。出土遺物も、木製品を初め豊富であった。

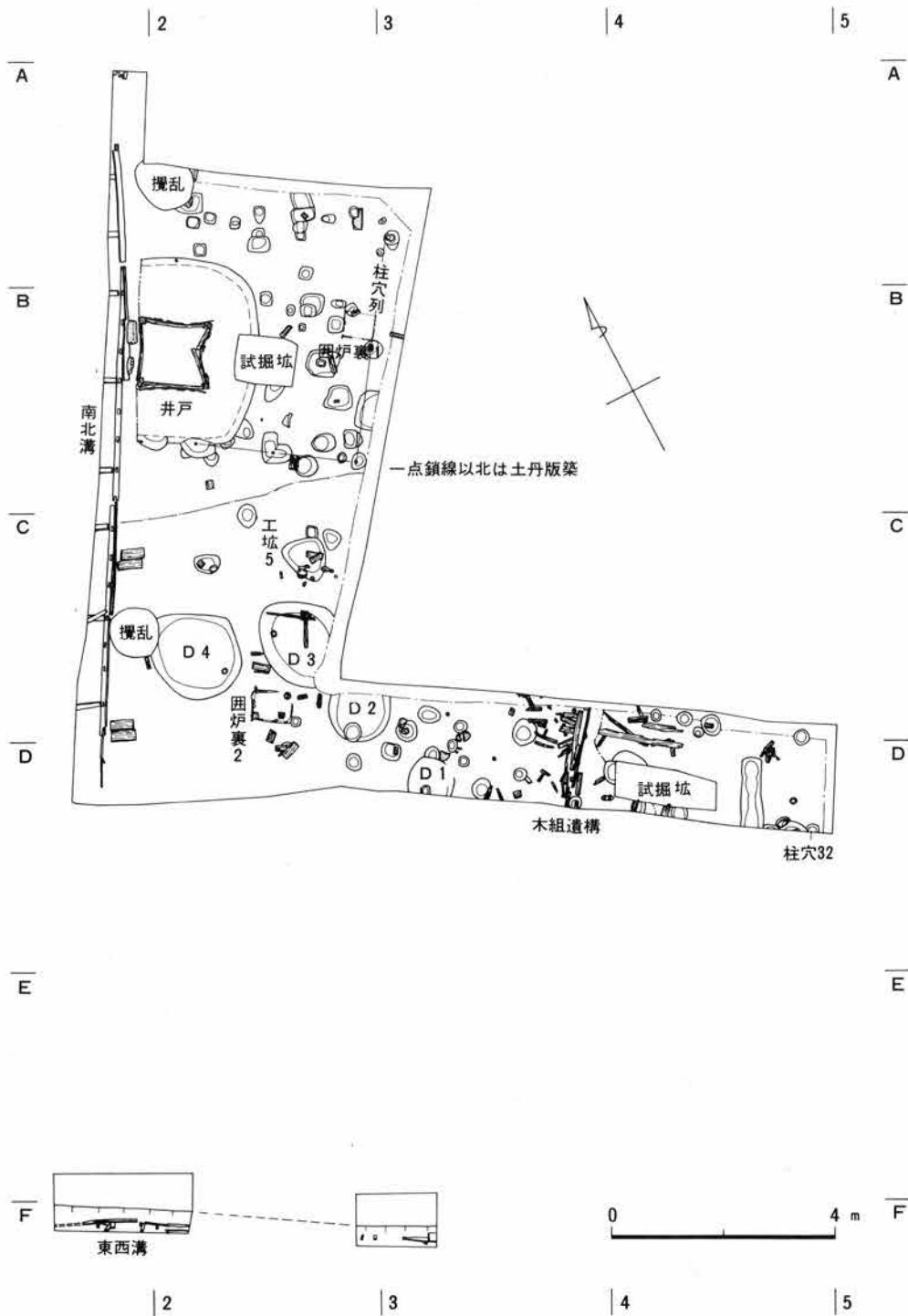


図10 II面遺構全図

1. 南北溝（図11）

調査区西壁沿いに、若宮大路と平行に走っている。規模と構造からみて屋敷地の中の区画というよりも、街割を担っていると考えられる。西半が調査区外に出しているため、正確な幅は不明であるが、横根太を抜いてみると約60cmの長さがあった。若宮大路中心軸から、本址中心軸(推定)までの距離約81mを測る。木組の構造は次の如くである。

長さ約3.2m（北半は欠失）と4mの、まちまちの角材を南北に横たえ、その上に厚さ2~4cm、幅約30cmの板が、木端が角材に接して立てられている。おそらくこの幅30cmが溝の深さである。角材には40~50cm間隔（まちまち）で枘穴が貫通しており、縦木で板の内側へのずれを防いでいる。また底面には先述のように長さ約60cmの横根太が枘穴二つおきに並んでいる。底面の標高は、調査区北端で7.45m、南端で7.36mと、海岸に向って流れている。

2軸沿いの南域で確認された二枚一组の大型の礎板は、あるいはこの溝にかかる橋脚か、溝東側の居住区の門のようなものと思われる。

出土遺物（図12）

三彩（1）

盤。口径31cm、底径27.8cm、器高9.1cm（推定）。内面器壁立上り部分に線刻による二条の円圏と、内底面に花文の一部がある。釉薬は内外面器壁部分と

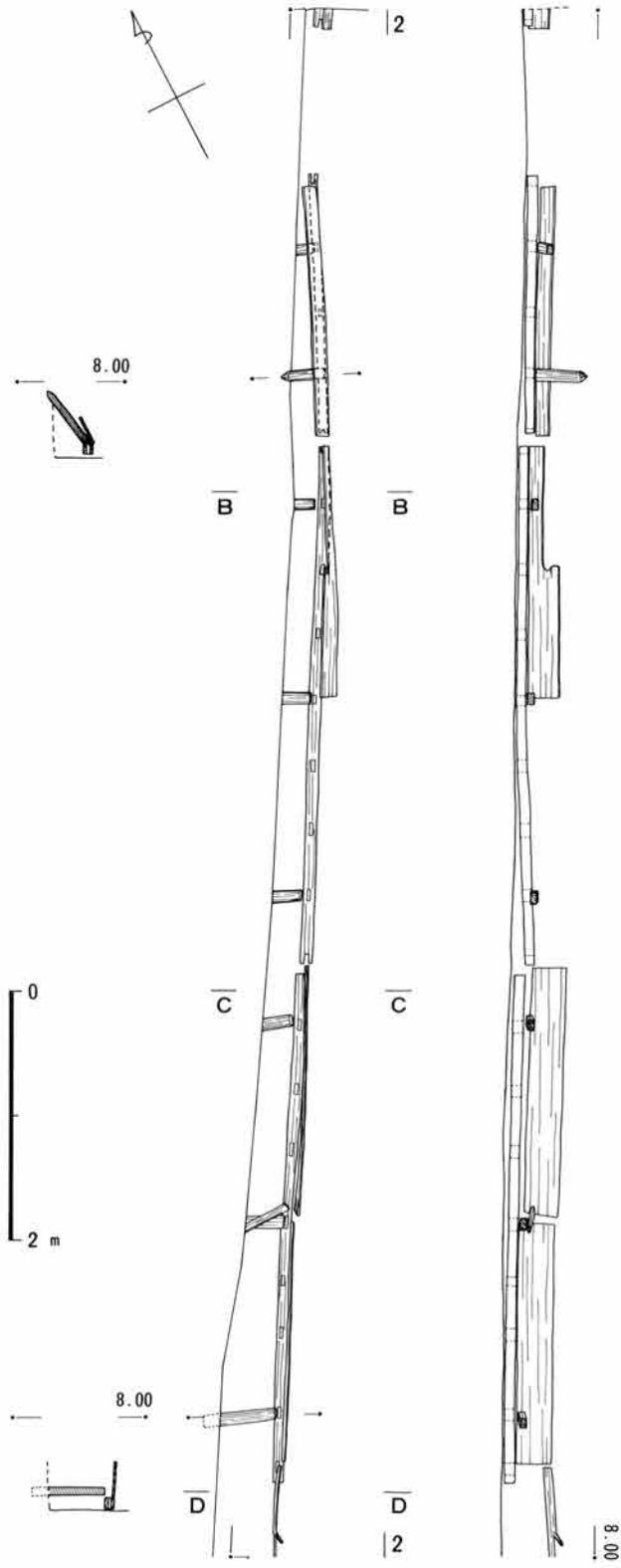


図11 南北溝

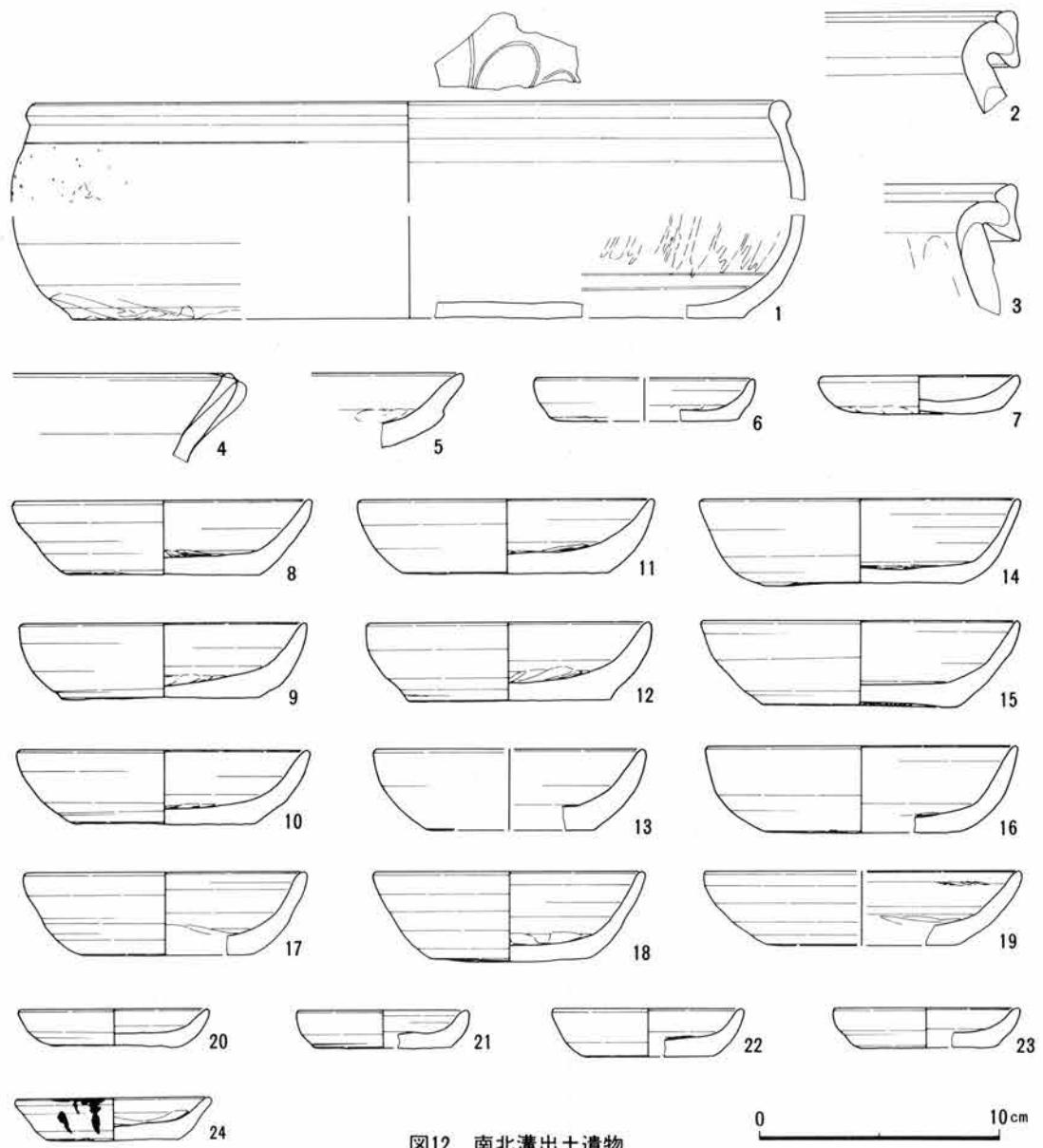


図12 南北溝出土遺物

内底中央付近で深緑～明緑色、内底周縁部で茶褐色を呈す。外底面は露胎。胎土は明褐色で、胎芯のみ肌色の、気孔の多い粘質土。

常滑（2・3）

2—甕。胎土は灰黒色および明褐色、長石・石英を多く含み岩石質。外器表は褐色に焼け、内面上縁部に降灰顯著。3一同前。胎土は灰色でやや粗く、流紋がみられる。外器表は褐色を呈す。

山茶碗窯系捏鉢（4）

片口の一部が残る。胎土は灰色でやや粗目。体上半はやや外反氣味で、口縁部のみに僅かに内巻する。

かわらけ (5~24)

3点の手捏ね (5-II d、6・7-II b) の他はロクロ成形のもの。

ロクロ成形には I b - 1 (22)・I b - 2 (20)・I b - 4 (21・23)、I d - 1 (10・14・15・16~19)・I d - 2 (8) などがみられるが I d 類にはやや器高が低めで器壁が楔状のもの (9・11) I d - 5 類、やや深めで I d - 1 類を厚くしたようなもの (12・13) I d - 6 があり、また I b 類中には底部に比べて薄い器壁が上部でやや外反気味になるものがある。

2. 東西溝

調査地点南辺のトレンチの中で確認した。現代の道路側溝に近接しているため、南壁は確認できなかった。横枠の板と、その倒壊を防ぐ角杭によって構成されているが、後代に相当荒らされており、遺存状態は悪い。また木枠そのものも、もともと南北溝のような堅牢な作りではなかったと思われる。

出土遺物 (図13)

幅 3.8cm、長さ 10.5cm、厚さ 7mm の木筒が出土している。画面に、読み取りにくいが、墨書文字がある。

- ・「□□□ラシ」
(いカ)(たか)(レカ)
「に□□ウ」
- 「けろれ」
(そか)
- ・□

(鎌倉国宝館々長三浦勝男氏御教示による)

3. 木組遺構 (図14)

板囲いの一部で、角杭によって西側への倒壊を防いでいる。この木組の西側は広く落ち窪んでおり、全容は不明ながら、方形堅穴遺構の一辺である可能性がある。

角板の堅杭は幅、長さ共にまちまち (それぞれ 5~12cm、35~45cm) で、造りそのものは丁寧であるとはいえない。倒壊した縦板の上から柄付の鎌が出土している。

出土遺物 (図15)

山茶碗 (1~3)

1 - 底径 4.3cm。体部は薄く、全体に緩く内彎する。胎土は灰~灰白色でやや軟かい。2 - 底径 5.3cm。高台はつぶれたような低い逆三角形。疊付にモミ殻圧痕が付いている。胎土は灰色で、

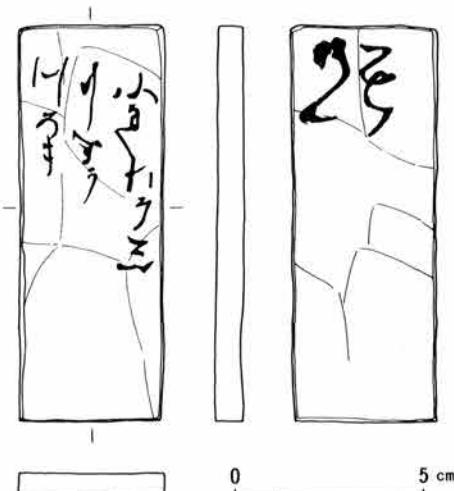


図13 東西溝出土遺物

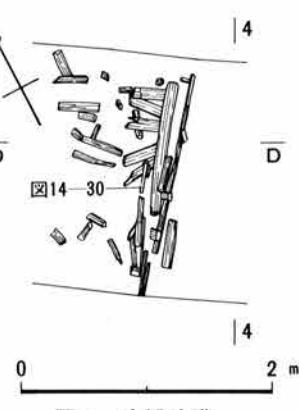


図14 木組遺構

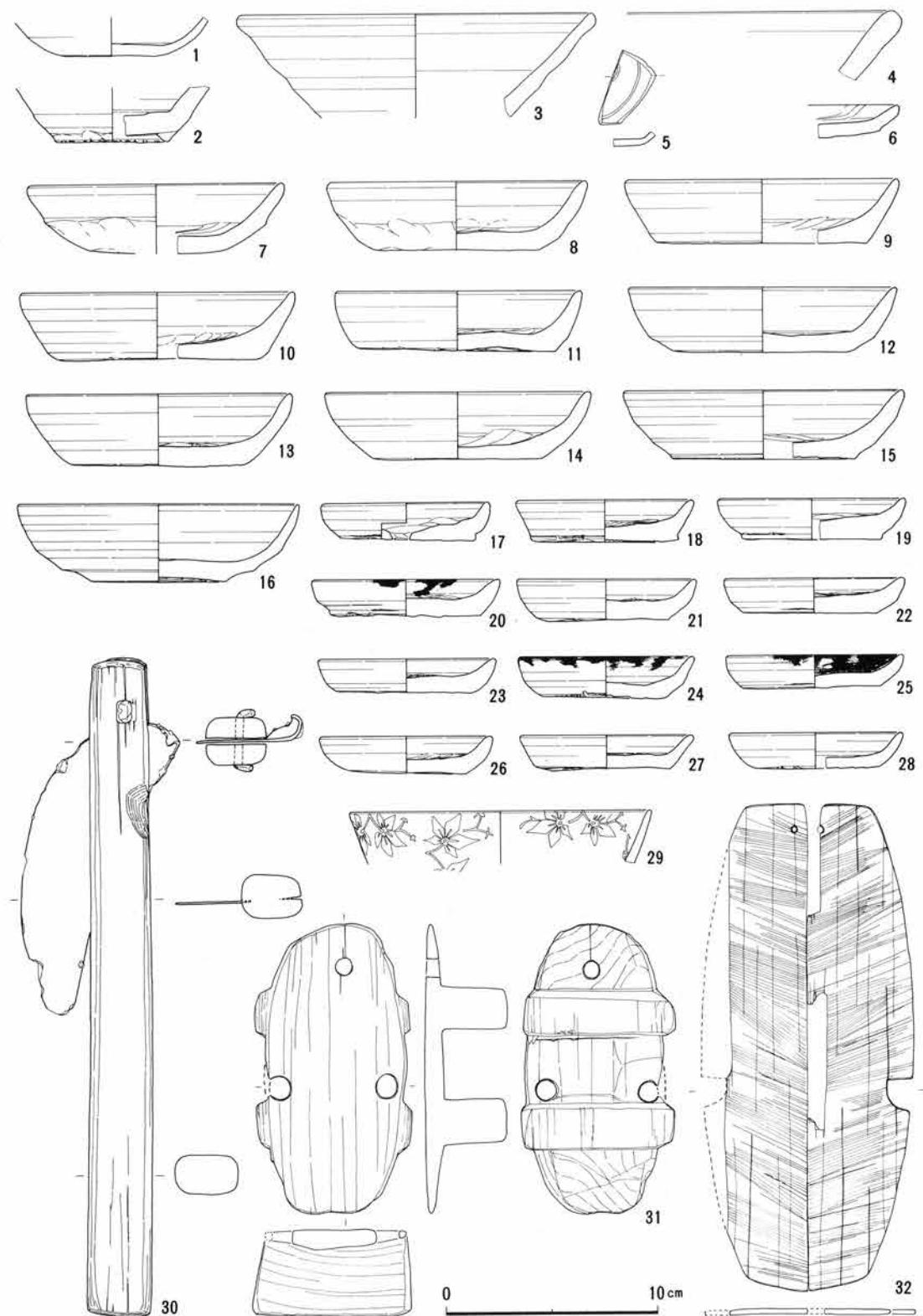


図15 木組遺構出土遺物

やや粗い。3—口径16.5cm。端部は尖る。胎土は灰色で粗いきめのもの。

山茶碗窯系捏鉢（4）

口縁部。丸い、やや肥厚気味の端部を持つ。胎土は灰色、やや粗めである。

瓦器（5）

碗底部。内底面周縁に円圏があり、中央の文様の一部がみえる。胎土は灰白色で緻密、器表面は内面灰白色、外面黒色を呈する。

かわらけ（6～28）

3点のII類（II b 1点—6、II b 2点—7・8）の他はすべてI類である。

8は手捏ね成形に稀れな、器壁と底部の境界が明瞭で、やや内彎気味ではあるが略直線的な器壁を持つもので、同時代のロクロ成形の、例えばI a-5類等に範型を求め得ると思われる。

I類は、I b-2（28）、I b-3（25・26・27）、I b-3（17～24）と小型のものでは楔形の器壁を持つものが多く、I d-2（12）、I d-5（9・10・11）、I d-6（13・14・15）と大型のものでは器高の低い一群が多くなっている。また16は深くて薄い器壁の碗形のもので、ロクロ目が明瞭で内底面にナデが認められない。これは古式の系譜を引くと思われる。

漆器（29）

椀体部上半。口径14.2cm。黒漆地に朱漆で花文が見える。

鎌（30）

柄の長さ30.2cm、幅3cm。本来は可動であった可能性があるが、該品は錆びついて動かない。鎌本体は三日月形で、長さ14.5cm、幅4.3cm、手許側の端は折り曲げられているが、柄上部の刻みに正常位置の時喰い込むかどうかは不明。また柄上部の釘が目釘の役目を果たしたかどうかは、千葉地東遺跡の同型の鎌に目釘穴のないことからも（『千葉地東遺跡』397頁）怪しいと思われる。

下駄（31）

連歛下駄。長さ13.8cm、幅7.2cm、高さ3.9cmで、子供のもの。

板草履（32）

長さ23.1cm、幅（復元）10cm、厚さ2～3mm。わらの圧痕が全面に認められる。

4. 柱穴列（図16）

北域の土丹面上に柱穴が等間隔で並んでおり、おそらく掘立柱建物であると思われる。井戸と重なっているが本址の方が古い。

西北部が調査区外にあると考えられるが、現状2×2間、柱間は東西各140cm、南北各200cmである。南北列の北から1・2本目には柱根部と思われるひと回り小さい角柱穴がある。

出土遺物なし。

5. 囲炉裏1(図17)¹²

北域土丹面上、B-2北東部で検出した。縦板を並べて作った方形の木枠で、東南部を失なっているが、南北約50cm、東西約45cmを測る。囲炉裏の報告例は、諏訪東遺跡にすでに例がある(『諏訪東遺跡』の20・21頁)。縦板の幅は5~20cmで、上部は焼失している。木枠内部には掘込みの名残りが認められた。

該址の位置は、前述柱穴列の南北柱通りに東辺部がちょうど一致することになり、柱穴列を建物と考えれば、その施設の一つである可能性がある。

出土遺物なし。

6. 囲炉裏2(図18)

C-2南域に位置する。東西72cm、南北56cmの長方形を呈し、縦板が一部遺存する。枠内には浅い掘込みが認められた。縦板幅10cm~12cmで、先端は逆台形に鈍く尖らせている。西東隅には扁平な、一辺15~17cmの土丹が置かれる。周辺の柱穴との関係は明らかでない。これも上部は焼失。

出土遺物(図19)

手捏ね成形(II d類)が一点東北隅から出土。器厚が厚く、全体に丸味がある。

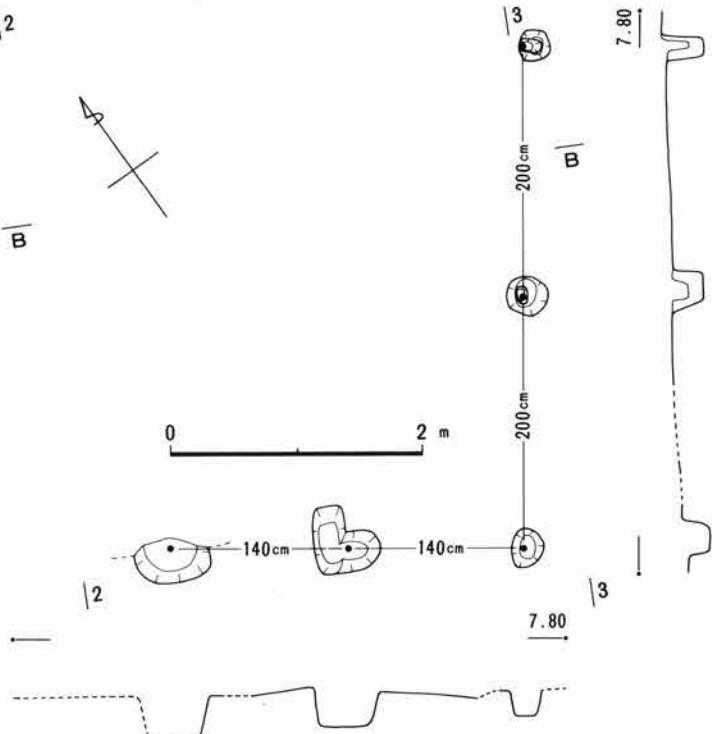


図16 柱穴列

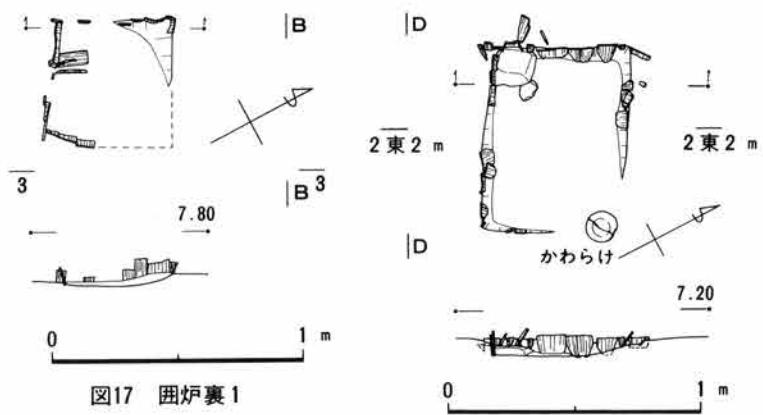


図17 囲炉裏1

Figure 17: Plan view of Kiln Site 1 (囲炉裏1). It shows a rectangular structure with a dashed line indicating a missing section. A vertical profile view to the right shows a height of 7.80 m. A scale bar indicates 0 to 1 meter.

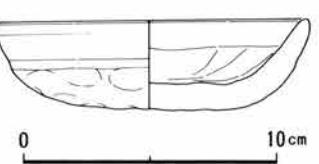


図18 围炉裏2

7. 井戸 (図20)

北側土丹面上、A・B-1・2にあり、西側掘方は調査範囲外にある。井戸枠は約120cm四方の方形の木組で、深さは確認面から約3.1mを測る。

幅約30cmの縦板4枚で一面が作られており、これを、角材を四角に組んだ枠で、内側から支えている。角材の内枠は現状で5段である。掘方は上端で一辺330cmの隅丸方形を呈する。

井戸枠内出土遺物 (図21・22)

青磁 (1・2)

1—鎧蓮弁文碗。口径13.8cm。釉薬は暗灰緑色半透明。胎土は灰色で岩石質。2—同前。底径4.3cm。釉薬は暗緑色透明、胎土は灰色で緻密。

白磁 (3~5)

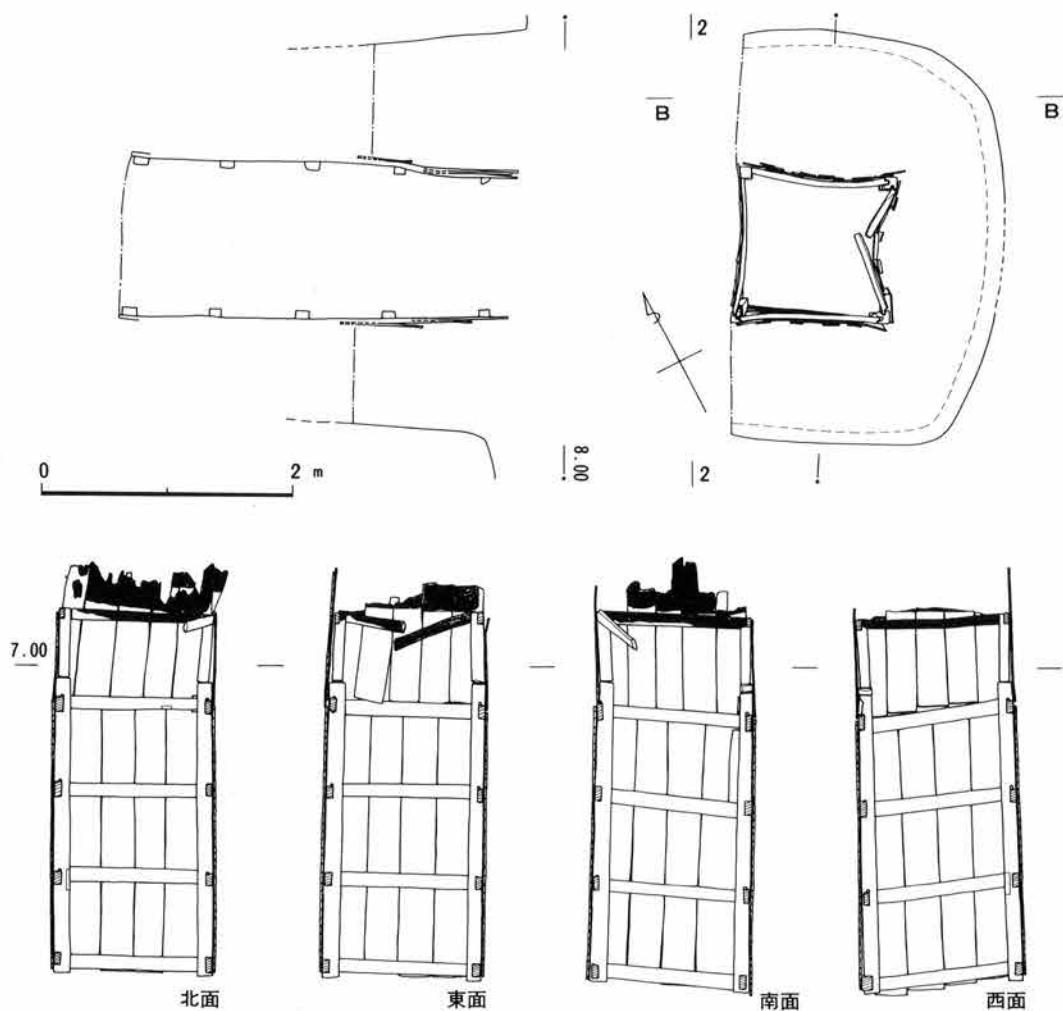


図20 井戸 (黒く塗ってあるのは炭火した部分)

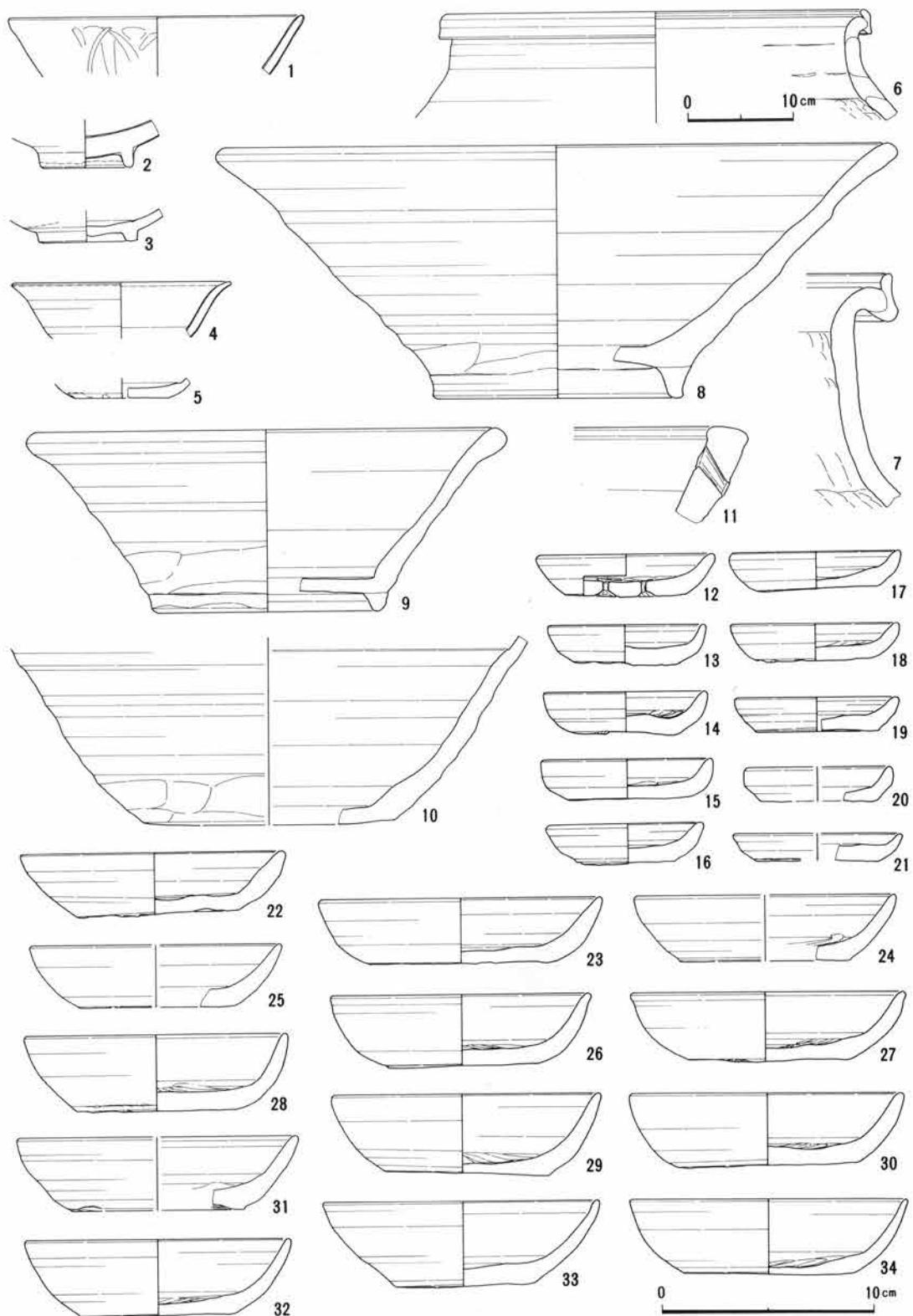


図21 井戸出土遺物(1)

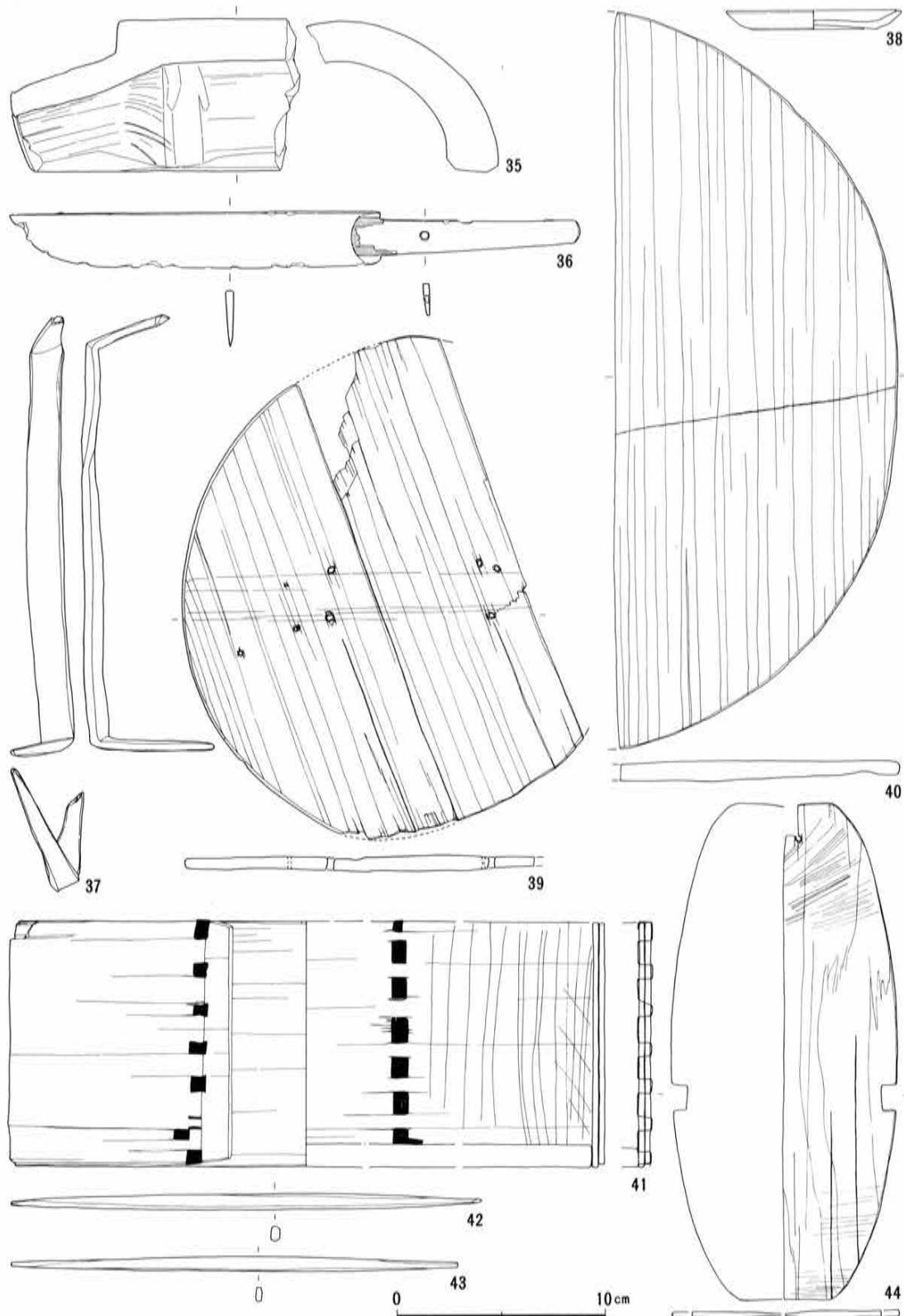


図22 井戸出土遺物(2)

3—碗。底径4.6cm。釉薬は白濁、胎土は乳白色で堅緻。漆による補修痕がある。内底面周縁部に円圈が廻る。4—一口兀皿。口径10.2cm。釉薬は白濁、胎土は灰白色で結晶質。5—同前底部。底径4.4cm。釉薬は白濁して灰白色、胎土は灰色で結晶質。

常滑（6・7）

6—甕。口径39.6cm。胎土は灰色で粗く、岩石質。器表面は内外とも褐色に焼け、外面肩部に降灰顯著。7—同前。胎土は灰黒色、岩石質で、表面は暗褐色を呈する。頸部下半以下に降灰顯著。

山茶碗窯系捏鉢（8～10）

8—口径31.4cm、底径11.7cm、器高12cm。胎土は灰黒色できわめて粗い。内面と外面に煤が薄く付着。内面はよく使われて滑らかである。9—口径21.8cm、底径10.7cm、器高8.7cm。胎土は灰黒色、きめが細かい。外面口縁下に降灰が多い。10—底径11.9cm。胎土は灰黒色で粗い。高台は見られない。

火鉢（11）

瓦質で、口縁下に円孔。端部は内側に凸帯状に肥厚する。胎土は肌色～灰色で器表面は灰黒色を呈す。内外面とも焼けて剥落が目立つ。

かわらけ（12～34）

I b - 3 (13～14・18)、I b - 4 (15・17・19・20)、I b - 5 (12・16)、I d - 1 (26～30・32～34)、I d - 5 (22・23・24・31)、I d - 6 (25)に分けることができる。I d - 1類の多さが目立つ。この中で12は底部に2孔の穿孔があり、灯明皿として使われたと思われる。

瓦（35）

丸瓦。凹面の繩目はナデ、または削りで薄くなっている。胎土は淡褐色で、砂粒を少量含む。

包丁（36）

片刃なので包丁とした。長さ27.3cm、身部幅2.7cm、茎部幅（目釘部分）1.6cm、厚さ3mm。重量94.9g。柄の木質の痕跡が残る。

かすがい（37）

長さ21cm、幅1.8cm。重量93.9g。ややねじれている。

漆器（38）

黒漆無文皿。高台は磨り減ったか、もとよりなかったか不明。口径8.4cm、底径6cm、器高0.9cm。

蓋（39）

鍋蓋。直径24cm。把手の痕が残り、紐を通す円孔が空く。

曲物（40・41）

40—底部。底径35.4cm以上。41—径28.5cm、器高11.8cm。樹皮で縫い合わされる。内壁には曲げを容易ならしめるための傷が、幾条もつけられている。

箸状木製品（42・43）

42—長さ22.5cm、最大径8mm。43—長さ21.4cm、最大径7mm。

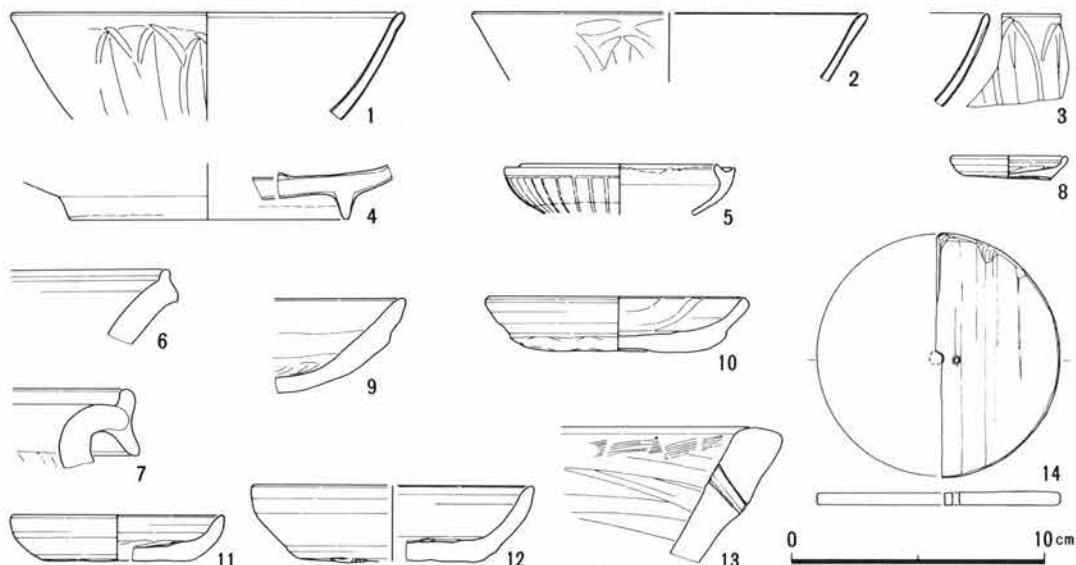


図23 井戸掘方出土遺物

板草履（44）

長さ23.8cm、復元幅10.8cm、厚さ4mm。わらの圧痕が部分的に残る。

井戸掘方出土遺物（図23）

青磁（1～4）

1—蓮弁文碗。口径15.4cm。釉薬は灰緑色透明で貫入目立つ。胎土は灰色で岩石質。2—同前。15.5cm前後。釉薬は灰緑色透明、胎土は灰色で堅緻。3—同前。釉薬は青灰色半透明。胎土は灰色でやや岩石質。4—皿。底径11cm。貼付文の一部が内底面に見える。釉薬は灰緑色失透、胎土は明褐色で焼成甘く、やや軟質。

青白磁（5）

合子身部。口径9cm。釉薬は淡灰青色、胎土は灰白色でやや粗い。体部下半に熔着痕がある。

常滑（6・7）

6—甕。胎土は灰色を呈し岩石質で粗い。内面は茶褐色、外面は淡緑色の自然釉がかかる。7—同前。胎土は灰黒色を呈し、焼成不良でやや軟質。外面縁帶部は灰黒色、他は茶褐色を呈する。

かわらけ（8～12）

I a-1(8)、I a-5(11)、I c(12)、II b(10)、II d(9)がみられる。

火鉢（13）

瓦質。内面は細かな刷毛目、外面は粗い刷目で整形された後、口縁部はなでられている。体部上方に円孔が空く。胎土は胎芯で灰黒、器表近くで灰色を呈し、粗い。

木蓋（14）

直径9.7cm。中程の2孔は把手、またはつまみを装着するためのものであろう。

8. 土塙 1 (図24)

D-3 にあり、南側は調査区壁外に出ている。東西83cm、南北73cm以上の円形で、深さ24cm、断面は逆台形を呈する。覆土は上層が茶褐色、下層が明褐色の、いずれも粘質土であり、下層は特に柔弱で、植物纖維質である。

9. 土塙 2 (図24)

D-3 南東隅にあり、北側は調査区壁外にある。東西 110 cm。南北 90 cm 以上の円形で、深さ 23 cm、逆台形の断面を持つ。覆土は土塙 1 と同様である。

10. 土塙 3 (図24)

D-3 南東部にあり、東側は調査区外にある。南北 152 cm、東西 130 cm 以上のおむすび形を呈する。深さ 20 cm で、皿状の断面を呈する。覆土は、土丹小片・木片を多量に含むしよりの悪い暗褐色土である。

出土遺物 (図25)

かわらけ (1~4)

I d-5 (1・2)、I d-6 (4) の他に、I d-2 に近いもの (3) がある。

漆器 (5~13)

5-皿。底径 5.8 cm。黒漆地に朱漆で印判の三ツ巴文が捺される。6-無文皿。口径 8.8 cm、底径 6.3 cm、器高 1 cm。7-同前。口径 8.8 cm、底径 7.4 cm、器高 1.2 cm。8-皿。口径 9.1 cm、底径 6.7 cm、器高 1.5 cm。菊花文が乱雜に配される。9-椀。底径 8.4 cm。内面と外面に葵文。10-同前。口径 14.5 cm。菊花文。11-椀、底径 5.6 cm。内底面に葉文。12-無文椀。口径 16 cm、底径 7.4 cm、器高 5.2 cm。高台は盤状。13-盤。脚が付く。

その他木製品 (14~18)

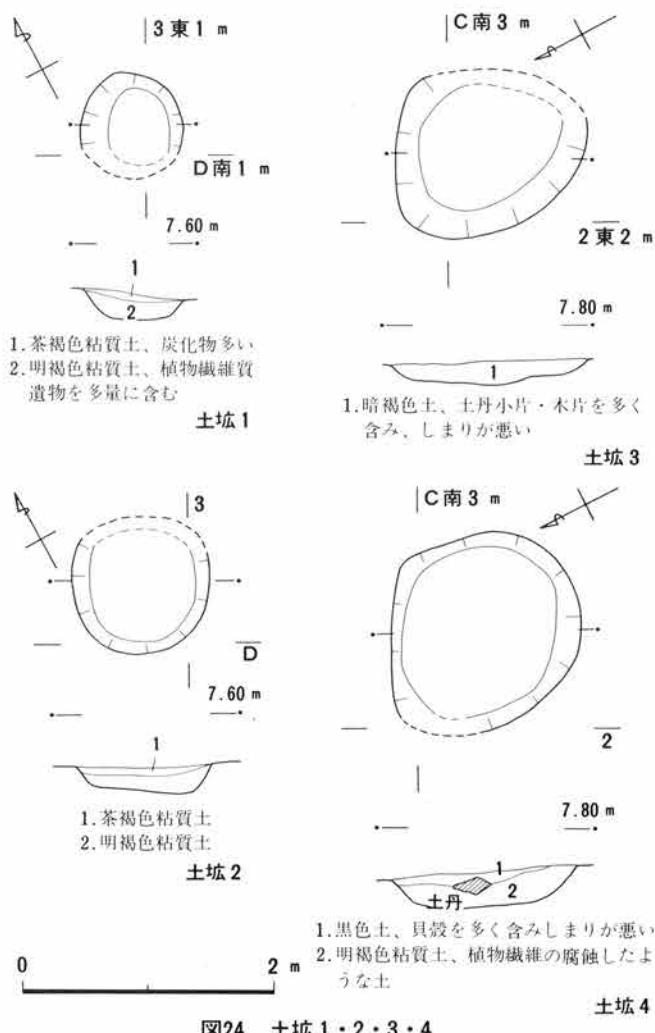


図24 土塙 1・2・3・4

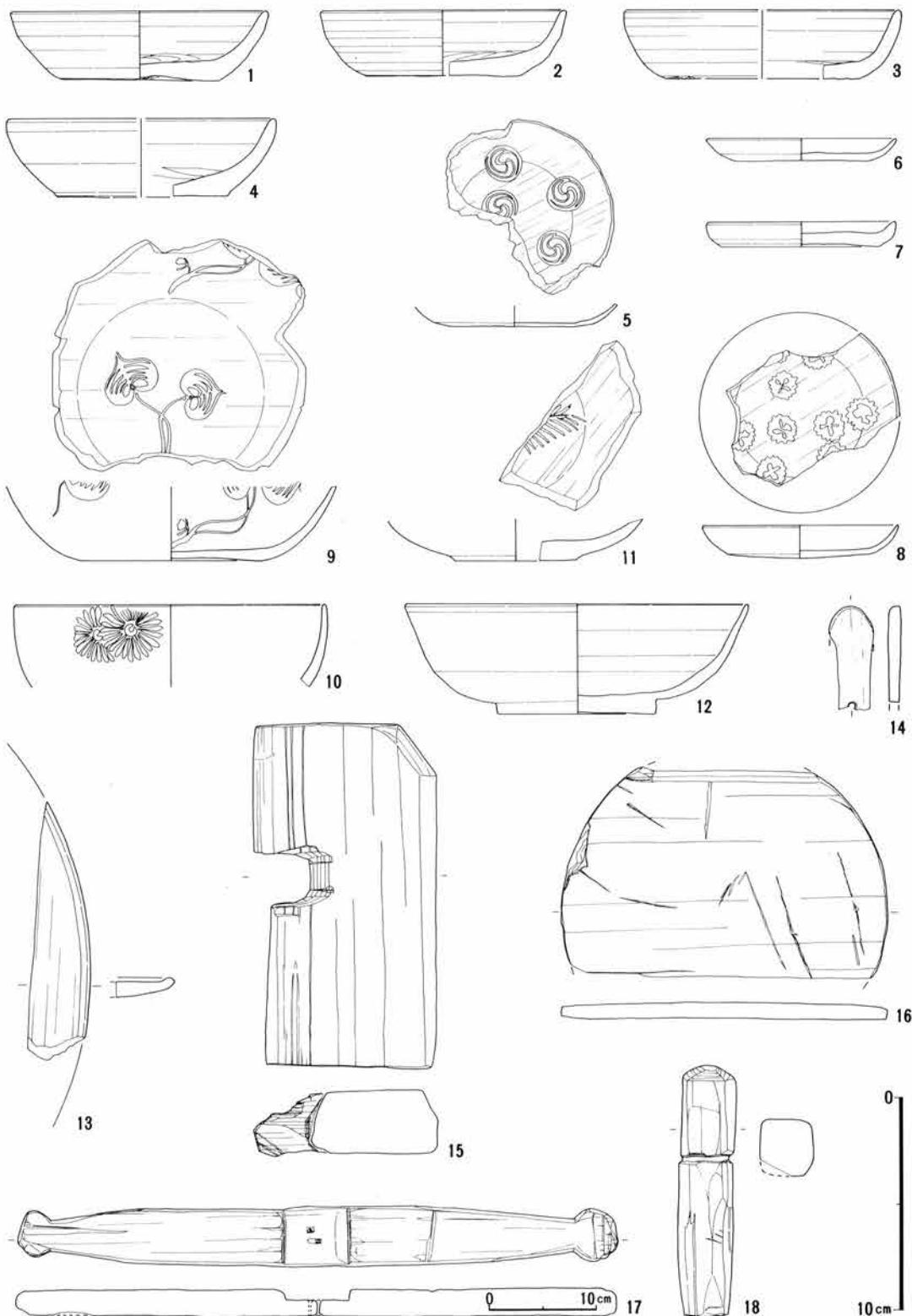


図25 土塙3出土遺物

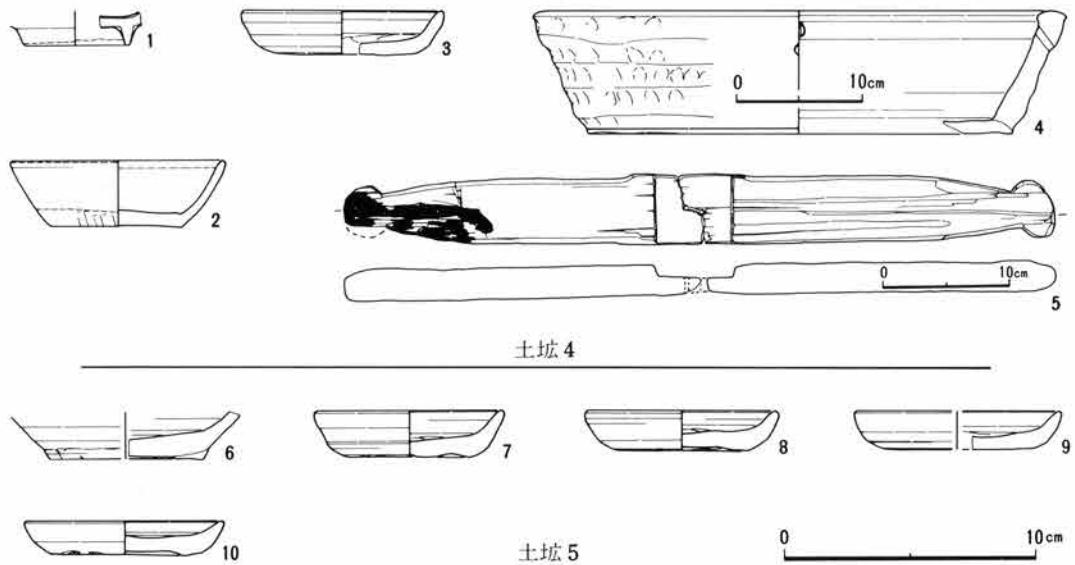


図26 土塚4・5出土遺物

14—用途不明。長さ4.8cm以上、幅2.1cm以上、厚さ6mm。例えは楽器などの部品か。15—用途不明。鋤ではないかと思われる。長さ16.7cm、幅7.8cm以上、厚さ3cm。16—曲物底。直径15.1cm、厚さ8mm。表面に引っ搔き傷がある。17—用途不明。長さ52.2cm、幅5.7cm、厚さ2.5cm。中央に釘跡のある、四角く切り取られた部分があり、この部分で、土塚4出土の同様のもの（図26-5）と十字に組み合わされていたと思われる。18—用途不明。長さ11.8cm、幅2.5cm。

11. 土塚4（図24）

C-2にあり、北西部を攪乱塙で壊されている。東西160cm以上、南北150cm、深さ27cmの不整円形を呈する。断面は皿形。覆土は、上層が貝殻を多く含むしまりの悪い黒色土、下層が植物繊維の腐蝕したような明褐色粘質土である。

出土遺物（図26）

青磁（1）

小碗底部。底径4.1cm。釉薬は暗緑色半透明、胎土は灰色できめ細かく、粘性強い。

白磁（2）

口兀皿。口径8.4cm、底径5.2cm、器高2.6cm。釉薬は白濁して僅かに青味を帯びる。胎土は灰白色で結晶質。

かわらけ（3）

I b-3類に含まれる。器形的に手捏ね成形のものと共通の要素がある。

火鉢（4）

瓦質。口径42cm、底径33.6cm、器高9.9cm。外面は指頭痕が残って凹凸が顕著。その上から外面

には縦方向の粗い刷毛目が施こされ、口縁部と内面はなでられる。胎土は灰色できめが粗い。器表面は灰黒色を呈する。口縁部の3分の2程残るが穿孔はなし。

木製品（5）

用途不明。土塙3出土の同型品（図25-17）と十字に組み合わされていたと思われる。長さ52.2cm、幅5.7cm、厚さ2.4cm。

12. 土塙5（図10）

C-3北東部にある。東西76cm、南北76cm、深さ19cm、おむすび型を呈する。断面形は皿状で、覆土は明褐色の柔弱な纖維質土である。

出土遺物（図26）

山茶碗（6）

底径6cm。高台は低くつぶれている。胎土は灰色、砂粒を多く含み、非常に粗い。

かわらけ（7～10）

4点ともIb-3に分類されよう。

13. 柱穴32出土遺物（図27）

青白磁梅瓶の蓋。口径5.1cm。頂部径5.1cm、器高3.4cm。側面に円孔が二孔あく。頂部は、渦巻紋が施文される。内面には墨と覚しいものが付着して黒ずむ。釉薬は淡灰青色半透明。胎土は灰色でややきめが粗い。

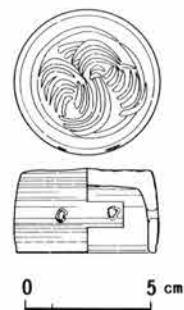


図27 柱穴32
出土遺物

14. II面上出土遺物（図28～31）

青磁（1～5）

1-鎬蓮弁文碗。口径15.4cm。釉薬は淡灰青色半透明、胎土は灰白色結晶性。

2-同前。口径15.9cm前後。釉薬は淡灰青色半透明、胎土は灰色できめ細かい。

3-同前。釉薬は暗灰緑色半透明、胎土は灰色で結晶質。4-内面花文ある碗。底径5.3cm。釉薬は暗緑色透明、やや茶色味を帯びる。胎土は灰白色で粘質。5-鉢。釉薬は水青色失透、胎土は灰白色結晶質。

白磁（6～13）

6-一口兀皿。口径12cm前後。釉薬は白濁、灰味帯びる。胎土は灰白色結晶性。7-同前。口径10.7cm。釉薬は白濁、灰味帯びる。胎土は灰白色結晶性。8-同前。口径7.8cm、底径4.5cm、器高2.2cm。釉薬は灰味帯びて白濁、胎土は灰白色でやや粗目。9-同前。口径10.4cm前後。釉薬は多少白濁するが透明に近い。胎土は白色結晶状。10-同前。底径5.1cm。釉薬は若干白濁、胎土は乳白色で結晶性。11-同前。底径5.7cm。釉薬はやや白濁、胎土は灰白色結晶質。12-同前。釉薬は灰味がかった透明、胎土は灰白色で結晶質。13-同前。底径5.5cm。釉薬は灰味帯びて失透、胎土

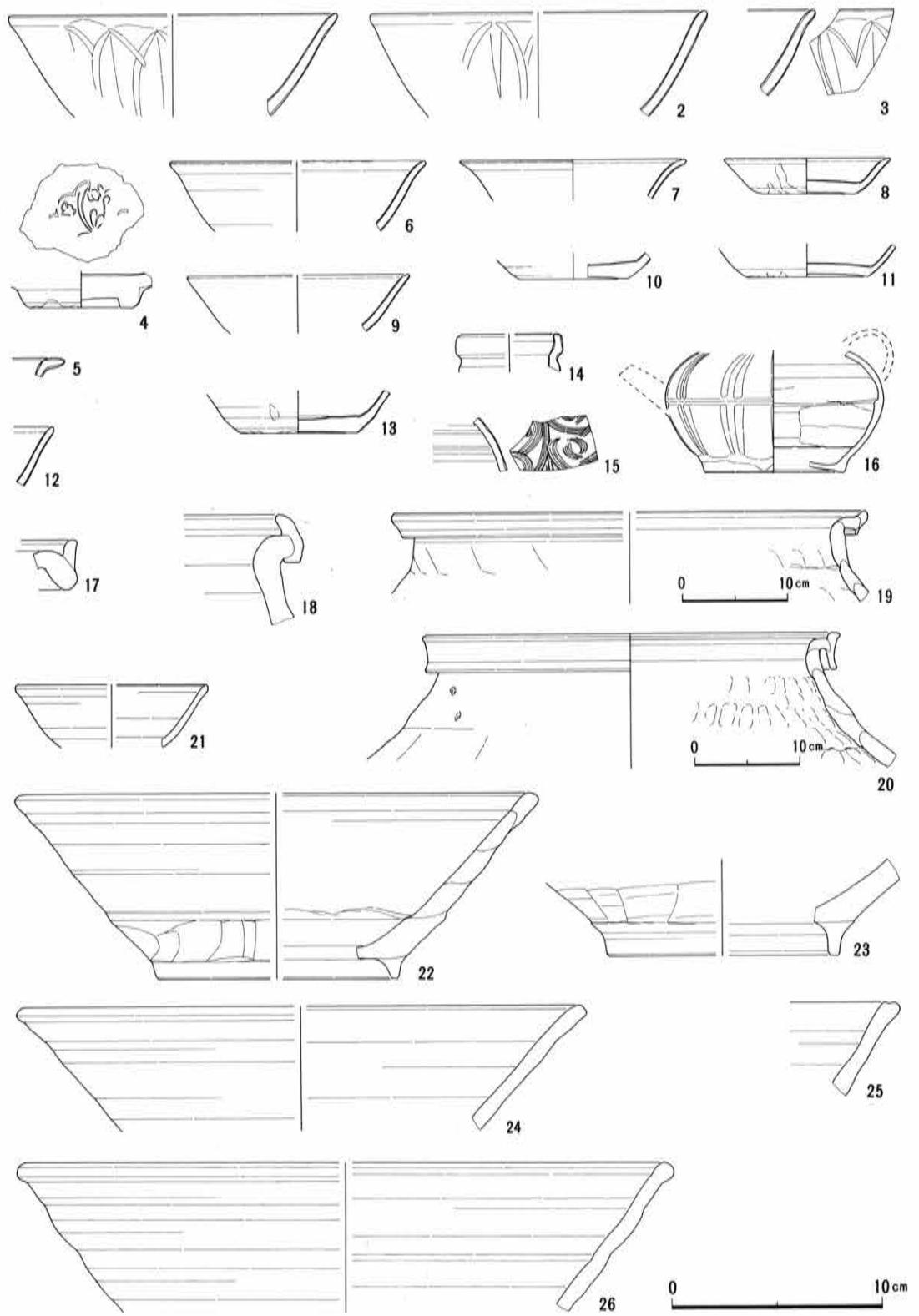


図28 II面上出土遺物(1)

は灰色結晶状。

青白磁 (14~16)

14—梅瓶口縁部。口径14.7cm前後。釉薬は水青色半透明、胎土は灰白色でやや粗。15—同前肩部。14と同一個体である可能性がある。釉薬、胎土とも14に共通。16—瓜型水注。底径 6.6 cm、胴部径10.4cm。胴部に注口の一部がのぞく。釉薬は淡灰青色透明、胎土は灰白~肌色できめが粗い。焼成不良。

常滑 (17~20)

17—甕。胎土は灰色できめ粗く、岩石質。器面は暗褐色を呈する。18—同前。胎土は灰黒色で堅緻、器面は黒褐色を呈する。19—同前。口径44.7cm前後。胎土は胎芯黒色、器表近くで明褐色、ややきめが粗い。器表面は茶褐色を呈する。降灰顯著。焼成やや不良。20—同前。口径39.5cm。胎土は灰色、岩石質。内面は黒褐色を呈し、外面には全面に降灰。

瀬戸 (21)

入子。口径 9 cm。胎土は灰色で、きめ細かくやや軟質。

山茶碗窯系捏鉢 (22~26)

22—口径24.2cm前後、底径11.4cm前後、器高 8.9 cm。胎土は灰色、非常にきめが粗い。内外面に少量の煤が付着。23—底径11cm前後。胎土は灰色でやや軟質、きめが細かい。内面はよく摩耗している。24—口径26.8cm前後。胎土は灰色で岩石質。25—口径30.4cm前後。胎土は灰色で、きめは粗いが締りは良い。岩石質。26—口縁端に凹帯もしくは沈線が巡る。胎土は灰色、岩石質だが締りは良い。外器表は、部分的に黒色を呈す。

白かわらけ (27)

手捏ね小型皿。口径 7.8 cm。底径 6.7 cm、器高 1.9 cm。黄白色の胎土で、非常にきめが細かく、夾雜物を含まない。

かわらけ (28~56)

手捏ね成形のII b が3点 (31~33)、II d が1点 (34) 含まれる他はすべて I 類である。先ず I a-1 (28・29)、I a-2 (30) が認められる。I b-2 (37・38・40・41・43・45)、I b-3 (35・36・39・44)、口縁部のやや外反する I b-6 (42・48)、I c-1 (49)、I d-1 (56)、I d-5 (50~55) に分類することができる。

火鉢 (57)

2点あるが、同一個体であると判断して組み合わせた。胎土は赤褐色を呈し、炻器質で非常に堅く焼き締っている。外面には指頭痕が残り、内面にはナデが施こされる。

脚付火鉢 (58・59)

同様のものは光明寺裏・千葉地・千葉地東の各遺跡から出土している。火盆として使われたと考えられる。58—底部縁辺の、おそらく脚の脇に、肘木形の装飾がつく。外面上部に2本の、同下部に1本の凸帯が巡っている。外面にはいちめんに漆喰の痕跡が見られる。胎土は土器質で、胎芯灰

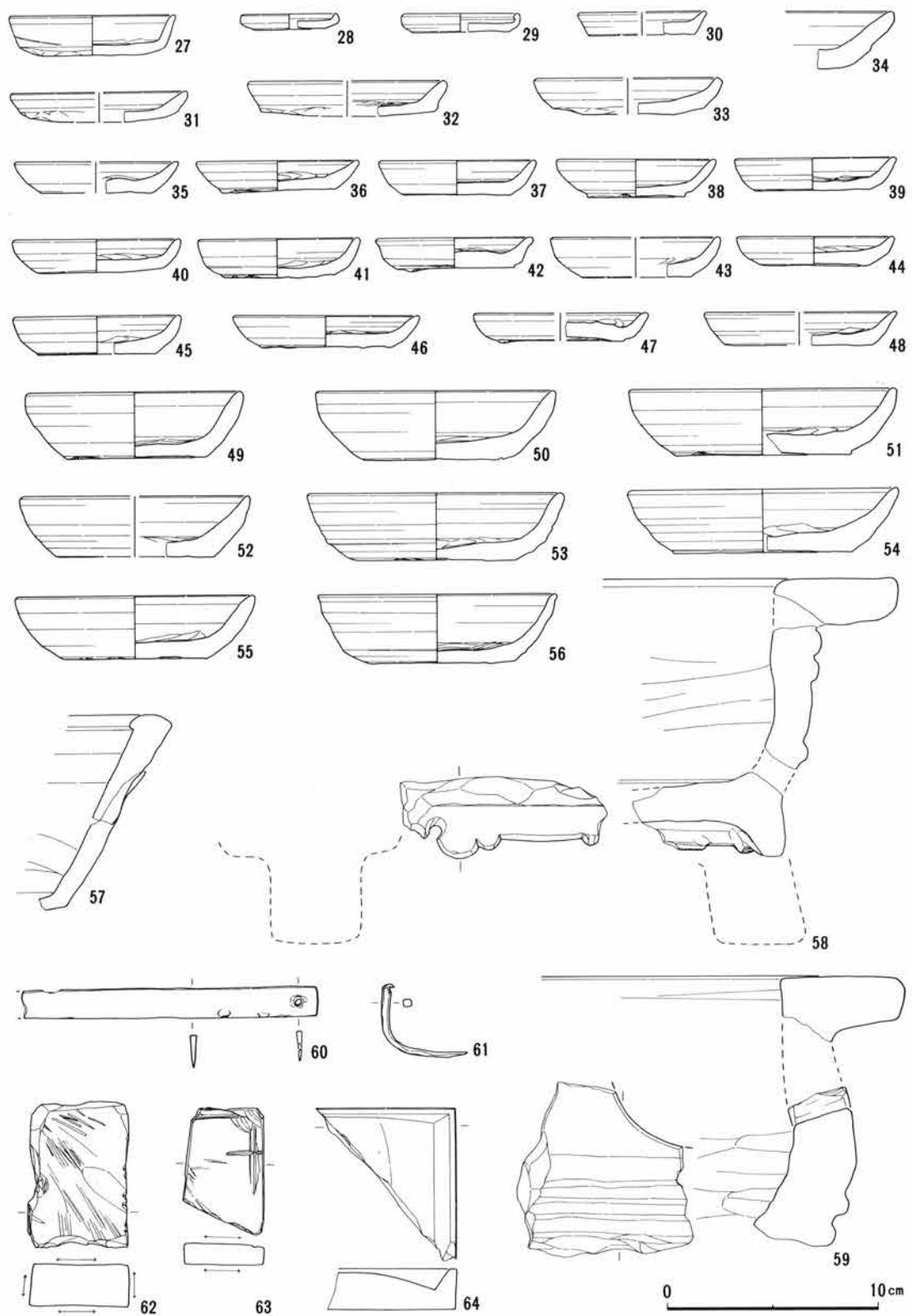


図29 II面上出土遺物(2)

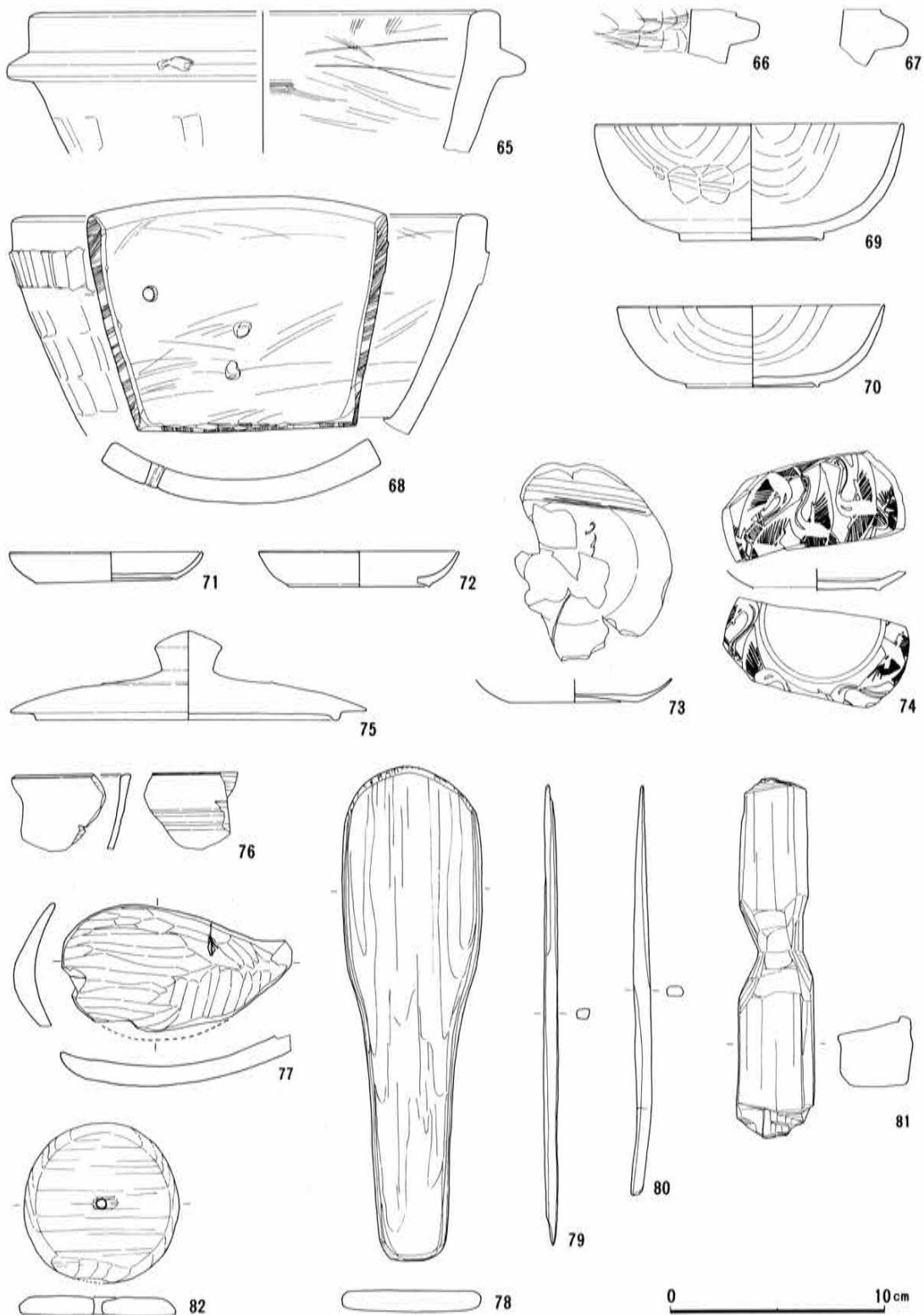
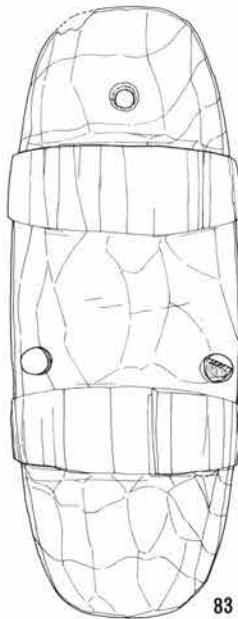
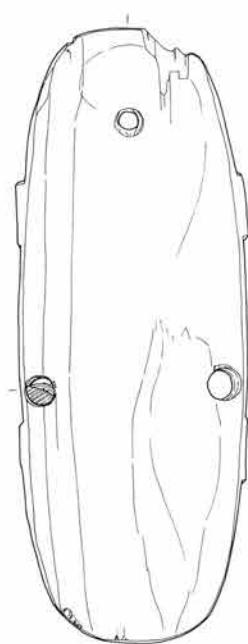
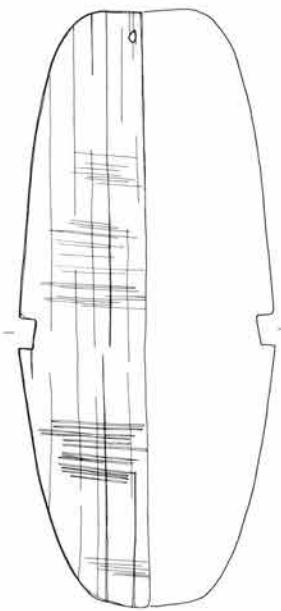


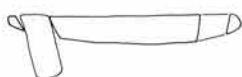
図30 II面上出土遺物(3)



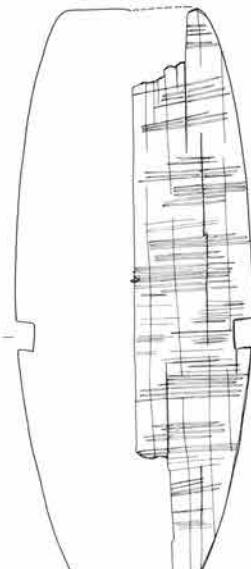
83



84



85



86

0 10 cm

図31 II面上出土遺物(4)

黒色、器表近くは灰色を呈しきめが粗い。白色の針状物質を多量に含む。器表面は肌色で、内面～口縁帶上面には煤が付着している。59一同様の器形であるが胴部に大きな円窓を持つ。胎土は灰色で一部淡褐色を呈し、きめが非常に粗い土質である。外面には漆喰が塗られている。内面～口縁帶上面は、よく焼けて剥落が目立つ。

鉄製品（60・61）

60—刀子。茎部と身部の間に幅の着はない。長さ15cm以上、幅1.4cm、厚さ3mm弱。61—釘。長さ6.5cm、幅4mm。重量2.3g。

砥石（62・63）

62—黄白色の凝灰岩製荒砥。長さ6.9cm以上、幅4.7cm以上、厚さ2cm。4面とも砥面になつてゐる。63—灰白色の泥岩を用いた仕上げ砥。長さ6cm以上、幅3.9cm、厚さ1cm。表・裏の2面が砥面。64—頁岩製の硯。暗褐色を呈する。池の深さ1cm、陸の深さ2mm。

滑石製鍋（65～68）

65—口径22cm前後、鍔部径24.2cm前後。銀色の滑石製。内面に擦過傷が目立つ。外面は口縁部まで煤付着。66—鍔部。灰色～銀色の滑石製。内面に細かな擦過傷あり。67—同前。銀色の滑石製。外面に煤が厚く付いている。

68—鍋を四角く切断し、鍔を削り取って穴をあけ、温石様のものへ転用しようとしたもの。しかし、外面に厚く煤が付着し、切断面にも煤が付いているので、一概に温石としうるかどうか疑問がある。鍋としては口径22.3cm、再加工後の製品としては長さ14.1cm、幅11cm、厚さ1.4cm。銀色の滑石製。

漆器（69～76）

69—無文椀。口径14.4cm、底径6.7cm、器高5.5cm。体部中央部に二箇所の傷がある。高台は盤状に近い。70—同前。口径12.4cm、底径6.1cm、器高5.8cm。71—無文皿。口径9.4cm、底径6.5cm、器高1.7cm。72—同前。口径9.4cm、底径6.6cm、器高1.7cm。73—草文の皿。底径5.9cm。内底面大きく欠損。74—松喰鶴文皿。底径5.9cm前後。75—無文蓋。口径14cm、最大径16.7cm、つまみの径3.1cm、器高4.2cm。76—朱漆鉢。口縁部のみ黒漆地を残し、あとは全面朱漆を塗る。外面体部中位に二条の沈線が巡り、口縁部は肥厚する。

杓子（77）

長さ10.7cm以上、幅6.2cm前後(推定)。内面は丸い先端のノミで割り込まれる。

杓文字（78）

長さ27.1cm、幅は最大で6.5cm、柄の部分中程で3.8cm、厚さ1cm。

箸状木製品（79・80）

79—長さ21.6cm、幅7mm。80—長さ19.2cm、幅8mm。いわゆる箸状木製品は、この他にも大量に出土しているが、ここでは省略した。

用途不明木製品（81）

長さ17cm、幅3.6cm。中央にきざみの一回するこの種の木製品はしばしば出土するものの用途は明らかでない。

蓋 (82)

中央につまみを差し込む円孔がある。小壺の蓋と思われる。直径7.4cm、厚さ9mm、円孔径3mm(中程で)。

下駄 (83)

長さ24.4cm、幅9.1cm、厚さ1.3cmの大人用。三つの円孔のうち1孔に、紐の抜けるのを防ぐために差し込まれたと思われる小さな木片が遺存している。

板草履 (84~86)

84—長さ25.6cm、幅10.2cm(復元)、厚さ3mm。部分的にわら圧痕をとどめる。85—長さ19.7cm、幅7.9cm、厚さ3mm。子供用か女性用と考えられる。86—長さ25.7cm、幅9.3cm、厚さ2.5cm。

15. II面下土丹敷 (図32)

C-1・2付近のII・III面間に、人頭大の土丹を敷いた、面の名残りと思われるものが認められ、ここから土塙1基を検出した。

土塙 (図33)

隅丸長方形、あるいは楕円形の平面形で、長径118cm、短径67cm、深さ20cm、浅い逆台形の断面形を呈する。覆土は、柔弱な、植物繊維質の明褐色粘質土であるが、砂礫を含む。

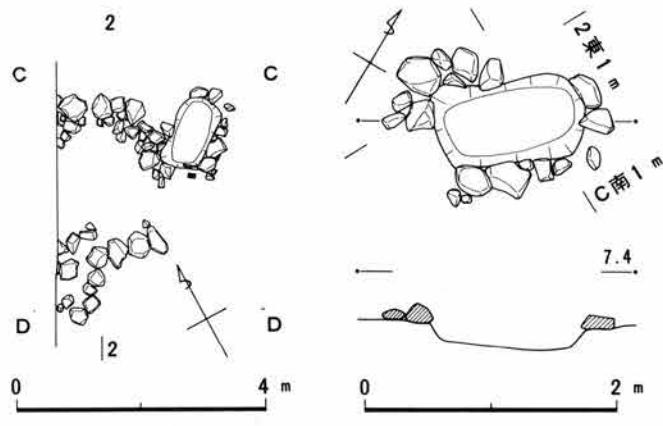


図32 II面下土丹敷

図33 II面下土丹敷内土塙

第4節 III面の遺構と遺物

C・D-2・3付近で検出したこの面は、茶褐色粘質土上にあるが、南側の半分程に、非常に堅く踏み締められた土間状のものが認められた。この硬化面上には多数の柱穴と、いくつかの土塙があり、その東側には、板材と角杭による木組遺構を検出した。第III面は、何か堅穴状遺構の一角である可能性が考えられる。

1. 柱穴と礎板群 (図35)

柱穴と礎板が、主として土間状の硬化部分に多数検出されたが、調査範囲の狭さから、建物としてのまとめりは認められなかった。柱根の遺存するものもいくつかあるが、すべて角柱で、幅15cm、

厚さ9cm前後のものが多い。柱穴の深さは深いもので約40cm、浅いものでは10cm程のものもある。

出土遺物(図36)

土間状硬化部分にある柱穴58から、土塙3から出土した図25-14と同様の形状の木製品が出土している。ただし当該品は漆塗で、星型、または花文の象嵌がみられる。長さ5cm以上、幅2.2cm以上、厚さ3.5mm。

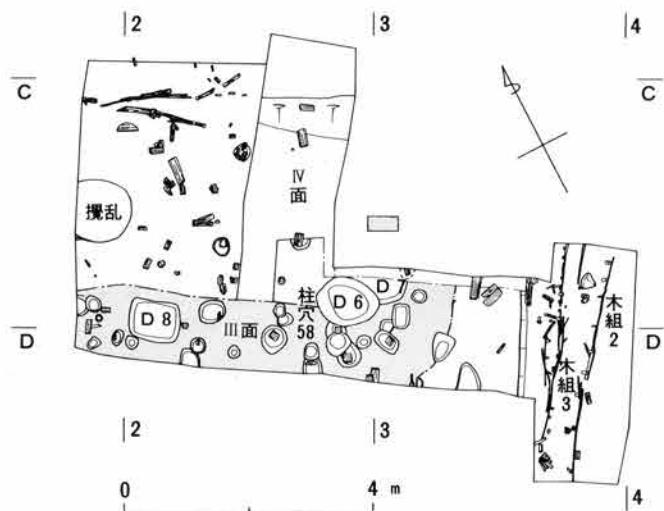


図34 III・IV面遺構全図

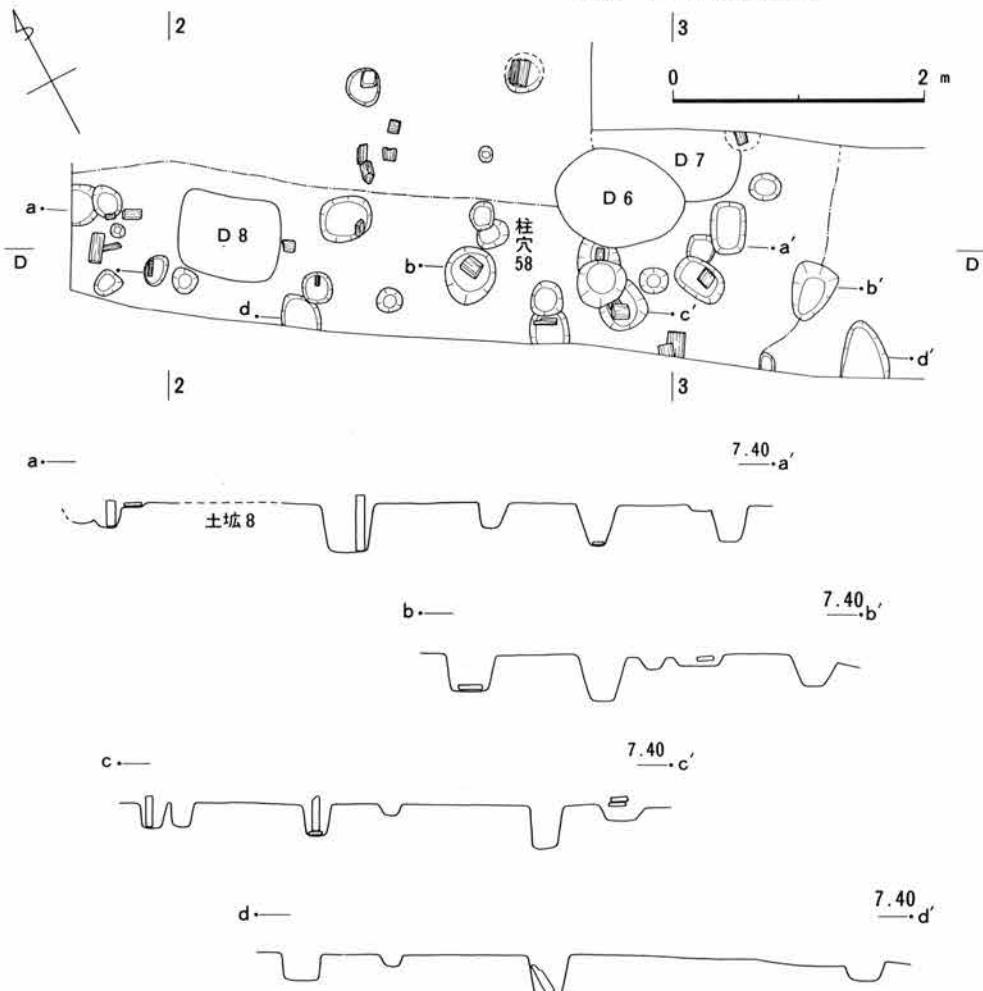


図35 III面柱穴と礎板群

2. 土塙6(図37)

C-2 東南隅にあり、土塙7を切っている。長径103cm、短径77cm、深さ53cmで、平面形はほぼ橢円、断面形状は逆台形を呈す。覆土はこれも、植物繊維質の明褐色粘質土。

出土遺物(図38)

かわらけ1点がある。手捏ね

成形、小型のII b類。体部下半の稜が強い。内・外面に油煤らしき黒色の付着物がみられる。

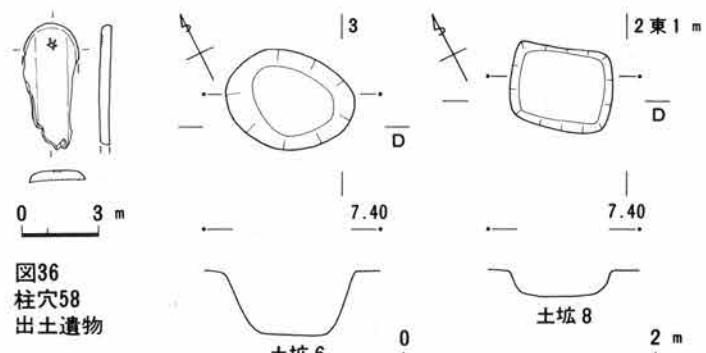


図37 土塙6・8

3. 土塙7(図34)

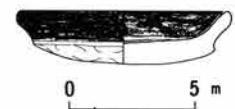


図38 土塙6出土遺物

D軸と3軸の交点付近にある。北側は調査区外にあり、西側は土塙6に切られているので、ほとんど全容は不明に近い。覆土は土丹混りの繊維質土。深さ約15cmで、断面は平たい逆台形を呈する。

4. 土塙8(図37)

D軸と2軸の交点付近に位置する。長さ80cm、幅66cm、深さ22cmで、平面形は隅丸長方形、断面形は低い逆台形を呈する。覆土は、多少土丹小塊の混じる茶褐色粘質土。

5. 木組遺構2・3(図39)

4軸西側を南北に走っている。ほぼ同位置の上層にある木組遺構(II面木組遺構)の、当初の施設であると思われる。

木組遺構2は、おそらく堅穴状遺構の東壁であると考えられ、幅15cm前後の板の西脇に、同6cm程の角材を打ち込んで、板の倒壊を防いでいる。板の西側は東側に較べ、浅いところで約15cm、深いところで40cm近く落ち窪む。

板西側に堆積した土は、砂礫、貝殻混りの暗褐色砂質土で、上面に堆積している明褐色の植物繊維質土塊の混入も認められた。

木組遺構3は、同2の西約50~70cmに、2とは

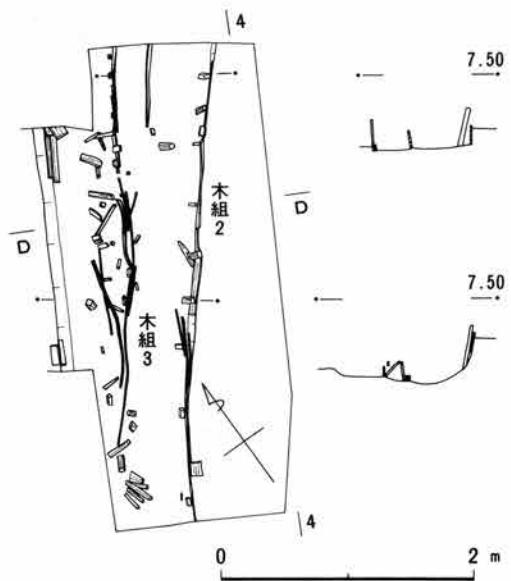


図39 木組遺構2・3

ば同方向に走っており、おそらく作り直しであると考えられる。土間状の硬化部分からは約170cm程度離れている。板の幅は15~20cmで、木組遺構2と異なり両側に角杭を打ち込んでいる。

木組遺構2西側出土遺物(図40)

木組遺構3との間から出土したものをまとめた。同3以西のものはII面上出土遺物とした。

かわらけ(1~13)

1点のII b類(1)のある他はすべてI類である。

I b-2(2・3・4)、I b-4(5・6)、I d-2(11)、I d-3(7・8・13)、I d-5(9)、I d-6(12)に分けられるが、口径上I cに属する器高の低いもの(10)も認められる。

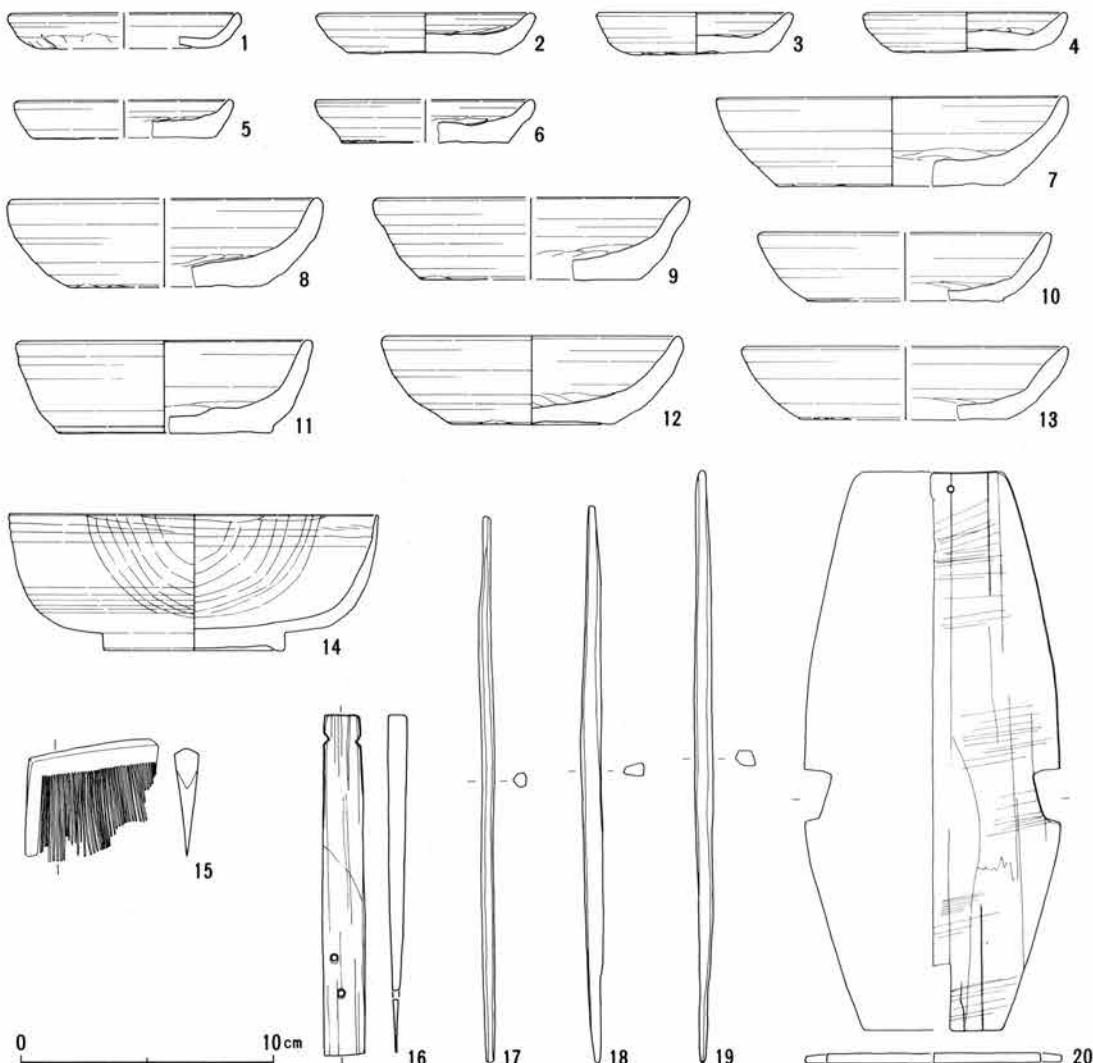


図40 木組遺構2西側出土遺物

漆器（14・15）

14—無文椀。底部は盤状に近いが、浅い高台内の削り込みは認められる。口径14.6cm、底径7.1cm、器高5.4cm。15—横櫛。棟厚9mm、棟高1.6cm、歯の長さ3.4cm。歯の厚さは1mmに足らず、歯間はきわめて密である。

不明木製品（16）

細長い、断面楔形の板で、頂部近くに刻み、先端近くに2孔の円孔を持つ、長さ13.5cm、幅1.7cm、厚さは頂部で7mm、先端で1mm弱。

箸状木製品（17～19）

17—長さ21.7cm、幅5mm。18—長さ22.2cm、幅8mm。19—長さ23.6cm、幅7.5mm。

第5節 IV面の遺構と遺物

III面下約25～30cmにある。既に予定深度を超えていたので、掘削範囲は4m×1.2mにとどめた。この面は非常に堅牢な土丹版築によって構築され、ほぼ平坦である。

面上には目ぼしい柱穴等は認められなかったが、II面北域の柱穴の載った面の、版築層下部構造の落ち際を確認した。ほぼ東西方向（若宮大路と直交方向）を向いている（図34）。

1. IV面出土遺物（図41）

青磁（1）

鎬蓮弁文の碗であろう。底径3cm。畳付以外施釉。釉薬は暗緑色透明、胎土は灰色で、縮まり良く、粘性が強い。

かわらけ（2～9）

薄手と厚手のII b類（2と3）の他はI類である。I b-2（5～7）、I b-4（4）、およびI d-5（9）、I d-6（8）がある。

土製円盤（10）

ロクロ成形かわらけの縁を打ち欠いて作ったもの。内外とも焼けている。用途は不明。直径5.8cm、厚さ9mm。

火鉢（11）

土製。内外ともに二次焼成を蒙っている。底部の厚さ1.4cm。内面には指頭ナデ、外面底部脇にはヘラによる整形がみられる。

鉄釘（12）

上部をひどく折り曲げている。あるいは何かの吊具に使ったかも知れない。復元長7.6cm、断面長方形を呈し、長辺5mmを測る。重量4.9g。

木蓋（13）

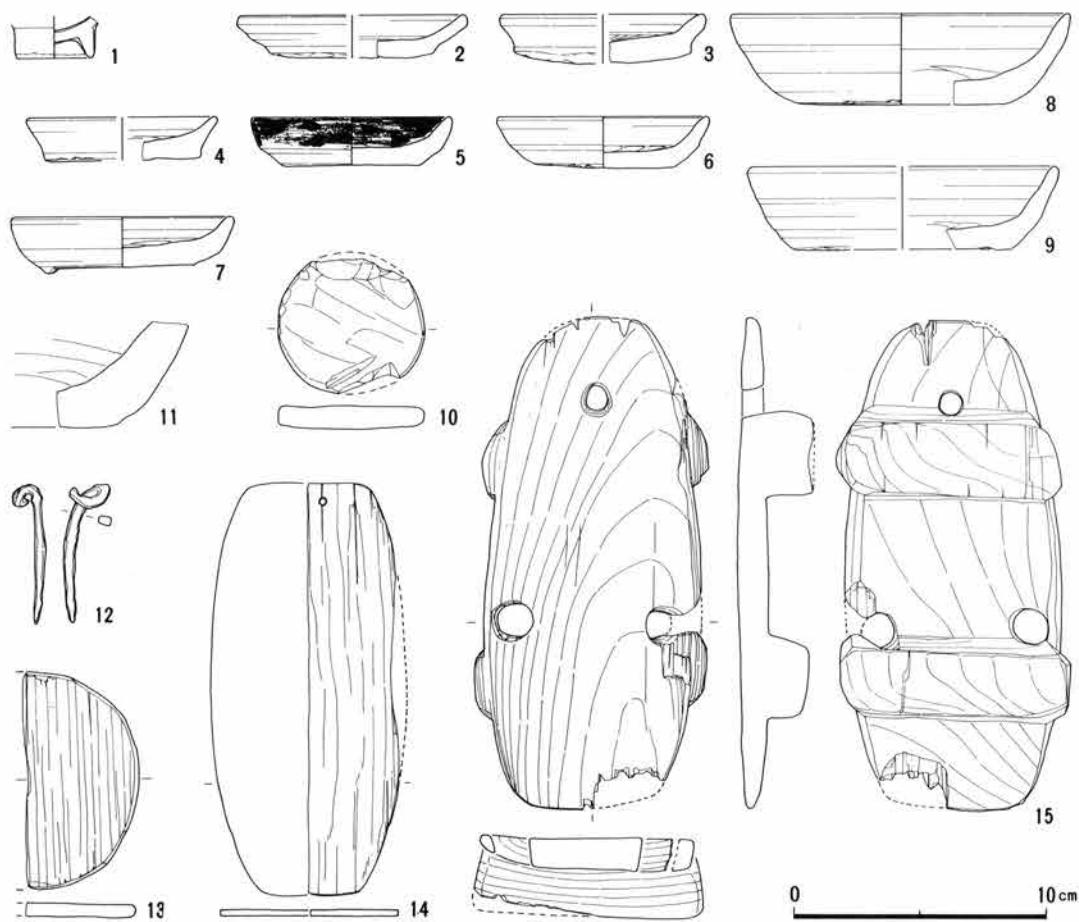


図41 IV面出土遺物

円盤状。遺存部分につまみ装着痕は認められないので曲物底部であることも考えられる。直径は 6.6 cm、厚さ 5 mm。

板草履（14）

長さ 16.4 cm、復元幅 7.8 cm、厚さ 3 mm 弱。おそらく子供用。

連歯下駄（15）

長さ 19.6 cm、幅 9 cm、厚さ 1.4 cm。これも子供用か婦人用。

第6節 包含層等からの出土遺物

1. 上層客土出土遺物（図42）

伊万里染付 1 点がある。器形は鉢で、口縁部の釉薬を拭っているので、蓋物か段重であろう。口径 19.2 cm、底径 18.1 cm、器高 6.9 cm。文様は吉祥文の一種。青海波が描かれる。呉須は淡い藍青色、

釉薬は微かに青味がかった透明釉、胎土は乳白色で非常にきめが細かく、夾雜物を含まないガラス質のもの。19世紀代のものと思われる。

2. I面上包含層出土遺物(図43)

青磁(1・2)

1—鎬蓮弁文碗。釉薬は灰緑色失透。胎土は灰色でややきめ粗く、岩石質に近い。2—同前。内底面に花文の押印がある。底径5cm。釉薬は水青色半透明、胎土は灰色で岩石質。

白磁(3)

口兀皿。底径6cm。釉薬は灰味帯びた透明、胎土は灰色でややきめが粗い。

常滑(4・5)

4—裏口縁部。胎土は灰色と明褐色で、きめが粗く、流紋が見られる。器表は褐色を呈する。焼成やや不良。5—同前。胎土は灰色で、きめは細かく、非常に堅緻。器表面は褐色を帶び、降灰のある部分で灰緑色。

火鉢(6・7)

6—瓦質。灰色のきめがやや粗い胎土で、器表面は灰黒色を呈する。7—瓦質。明るい灰色できめ粗く、砂粒の多い胎土。器表面は黒っぽい銀色を呈する。

滑石製石鍋(8)

銀灰色のやや粗い滑石が使われている。口径は14cm前後、鍔部径は16.2cm前後。内面に無数の条痕が見られる。

かわらけ(9~28)

II b類が1点含まれる他はすべてI類である。I b-1(11)、I b-2(14)、I b-3(10・15)、I b-4(16)の他にI b-1の口縁部外反するもの(12・13)—I b-7があり、I d類では、I d-1(17~20・25~28)、I d-3(22)、I d-5(21・23・24)が認められる。

漆器(29~34)

29—椀。高台はない。底径7.8cm。内外面ともに松葉文(の一種)と笹文の印文が、稠密に配される。30—同前。高台基部径8cm。内外の器壁に菊花または日輪文が描かれる。文様は朱漆で大きな円を描いたのち、先端の尖った工具で放射状の線を搔き取っている。31—同前。高台径7.2cm。高台内の割り込みは浅い。外面に文様描かれるが損耗著しく、不明。鶴であろうか。32—皿。底径6cm。内底面に鶴が描かれる。33—無文皿。口径8.5cm、底径5.9cm、器高1.3cm。高台は薄く、貧弱である。34—同前。口径8.7cm、底径5.6cm、器高1.3cm。器壁は非常に薄い。

3. II面上包含層出土遺物(図44~49)

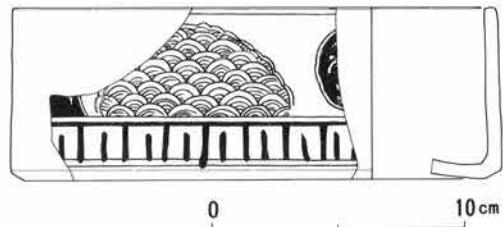


図42 上層客土出土遺物

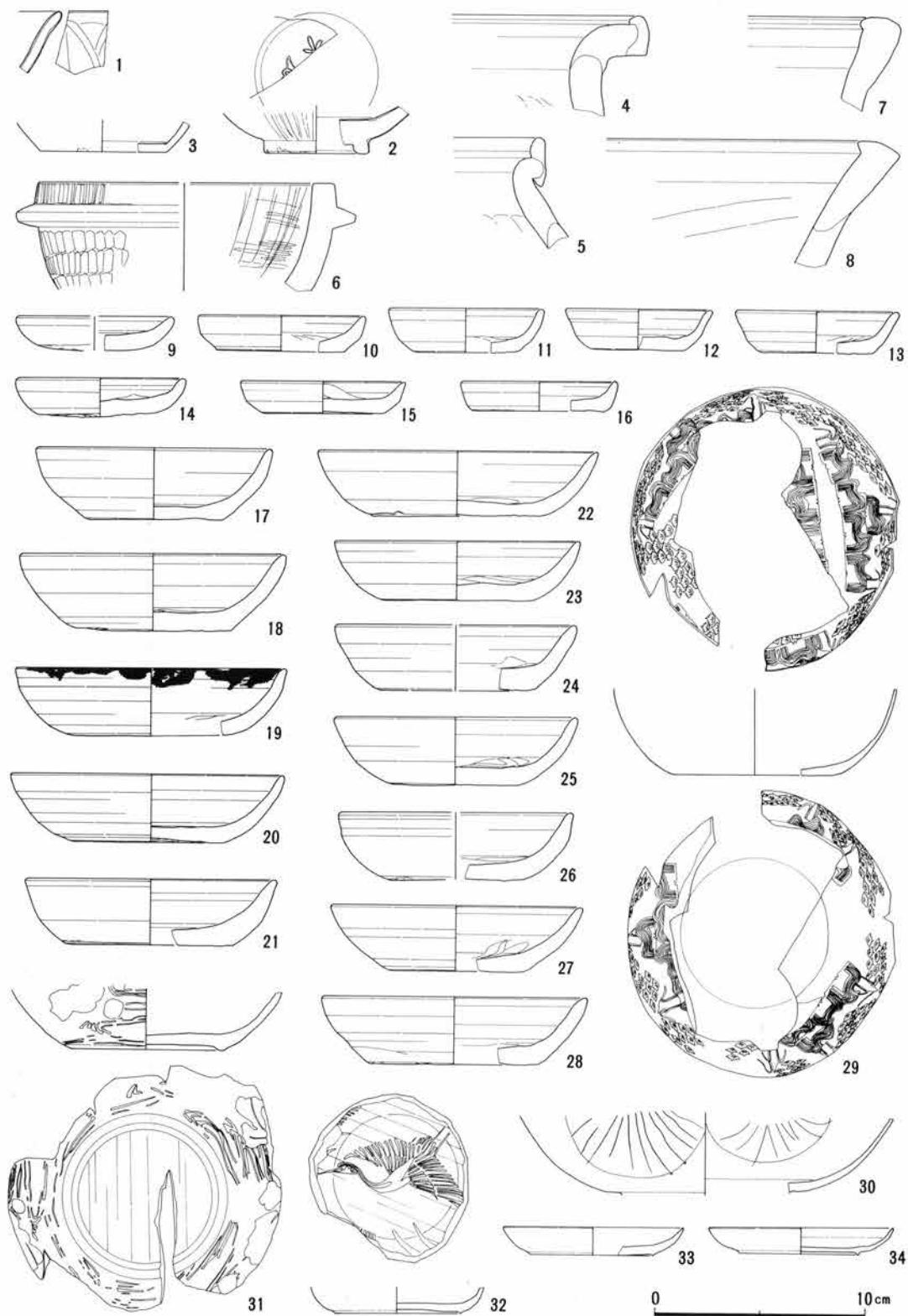


図43 I面上包含層出土遺物

青磁（1～4）

1—鎬蓮弁文碗。釉薬は灰青色失透、胎土は灰色堅緻。2—同前。釉薬は灰味の強い灰青色で失透、貫入が多い。胎土は灰色。3—劃花文碗。底径 5.6 cm。釉薬は灰緑色透明、胎土は灰色で堅緻。4—無文鉢。釉薬は灰緑色失透、貫入が目立つ。胎土は灰色で若干きめが粗い。

白磁（5）

碗。底径 5.2 cm。内底面周縁部に、沈線の円圈が廻る。高台内の削り込みは浅い。釉薬は微かに褐色味ある灰色で透明、胎土は灰色で堅いがややきめが粗い。

青白磁（6）

水注把手。幅 1.5 cm、厚さ 5.5 cm。釉薬は淡水青色透明、胎土は灰白色で結晶質。図 5-10、図 28-16 とは別個体と思われる。

黄釉（7）

鉄絵盤。口径 27.5 cm、底径 23 cm、器高 8.8 cm。内底面に花文が描かれる。内壁と内底面周縁部に 2 条ずつの条線帯があり、その間に花弁の意匠化と思われる文様を、列点状に配している。釉薬は黄褐色、鉄絵は茶褐色を呈し、胎土は灰色で、粘性強いが岩石質。口縁部、外面体部下半～外底面は露胎。

渥美（8～10・18・19）

8—甕。釉薬は釉溜で暗緑色、薄い部分で灰褐～黒褐色を呈し、胎土は灰色で岩石質。9—捏鉢。胎土は灰色で砂質。10—同前。胎土は灰色で砂質、きめが粗く、石英など夾雜物多い。18—鉢。口径 19.5 cm。胎土は明るい灰色を呈し、きめの細かい砂質のもの。19—甕。底径 14.5 cm。胎土は砂質できめが細かく、岩石質で灰色を呈する。

山茶碗（11・12）

11—口径 15.1 cm、底径 5.5 cm、器高 5.5 cm。胎土は灰色、砂質で岩石質。12—胎土は灰色、やや粘性強い。口縁部は尖り気味。

捏鉢（13～17）

13—片口が付く。口径 37.9 cm、底径 12.8 cm、器高 17.3 cm 前後。胎土は灰色できめが粗く、岩石質に焼ける。14—胎土は灰色、砂質で石英・長石等多く含む。15—胎土は灰色で、砂質だが堅緻。16—片口の一部がのぞく。胎土は灰色、やや粘性強い。17—胎土は灰色を呈し、砂粒多くきめが粗い。

常滑（20～22）

20—甕。口径 36.5 cm。胎土は胎芯部で灰黒色、器表近くで灰色を呈し、きめは細かい。器表面は褐～暗褐色に焼け、肩部、内面上辺部に灰緑色の自然釉がかかる。21—薦口壺。外面・内面とも黒褐色を呈し、胎土は灰黒色で気孔多く、流紋みられる。22—甕破片転用品。内面・外面とも磨耗している。縁辺も磨られて丸味を帯びる。常滑そのものとしては灰黒色および明褐色を呈し、きめが粗い。

火鉢（23・24）

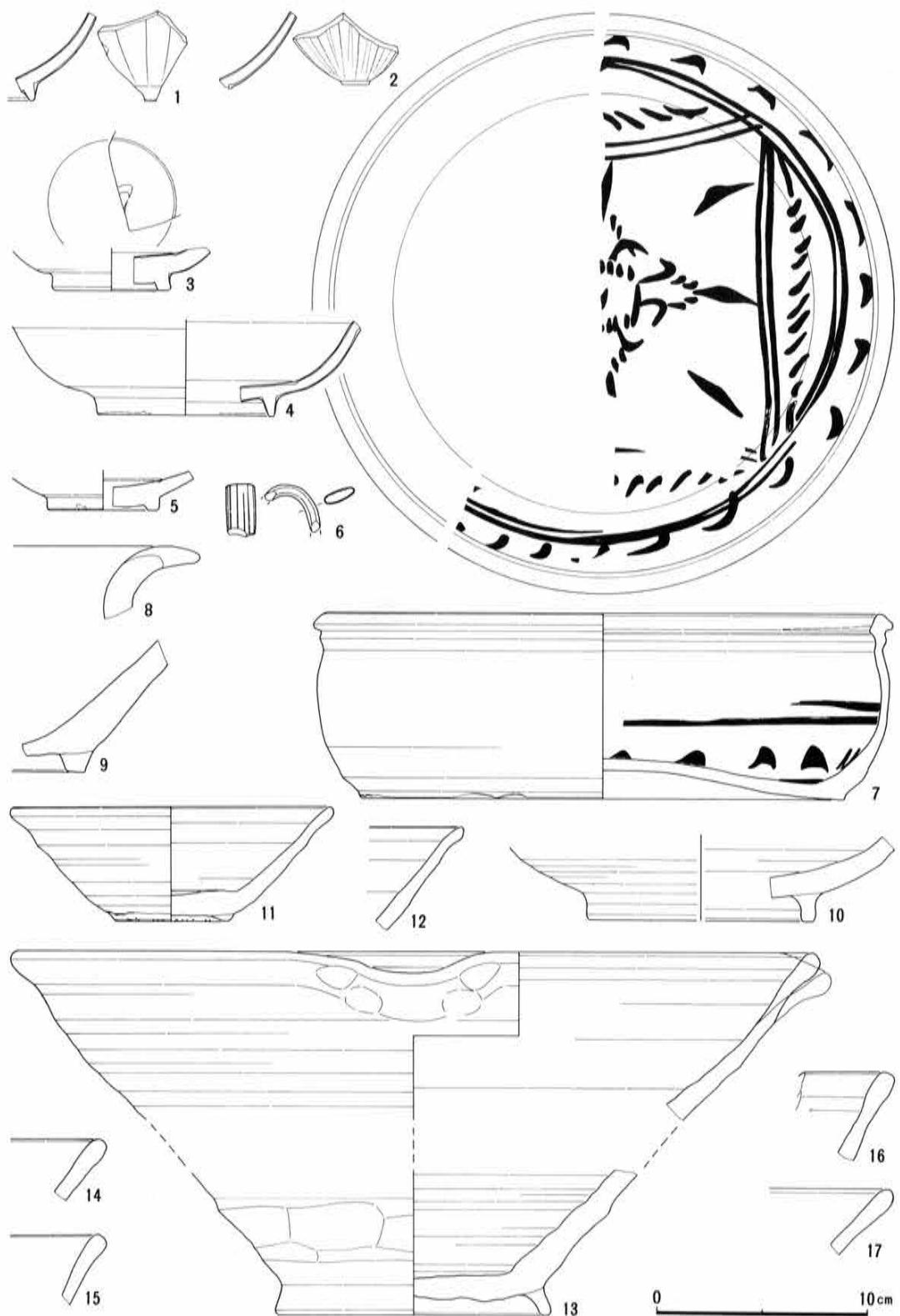


図44 II面上包含層出土遺物(1)

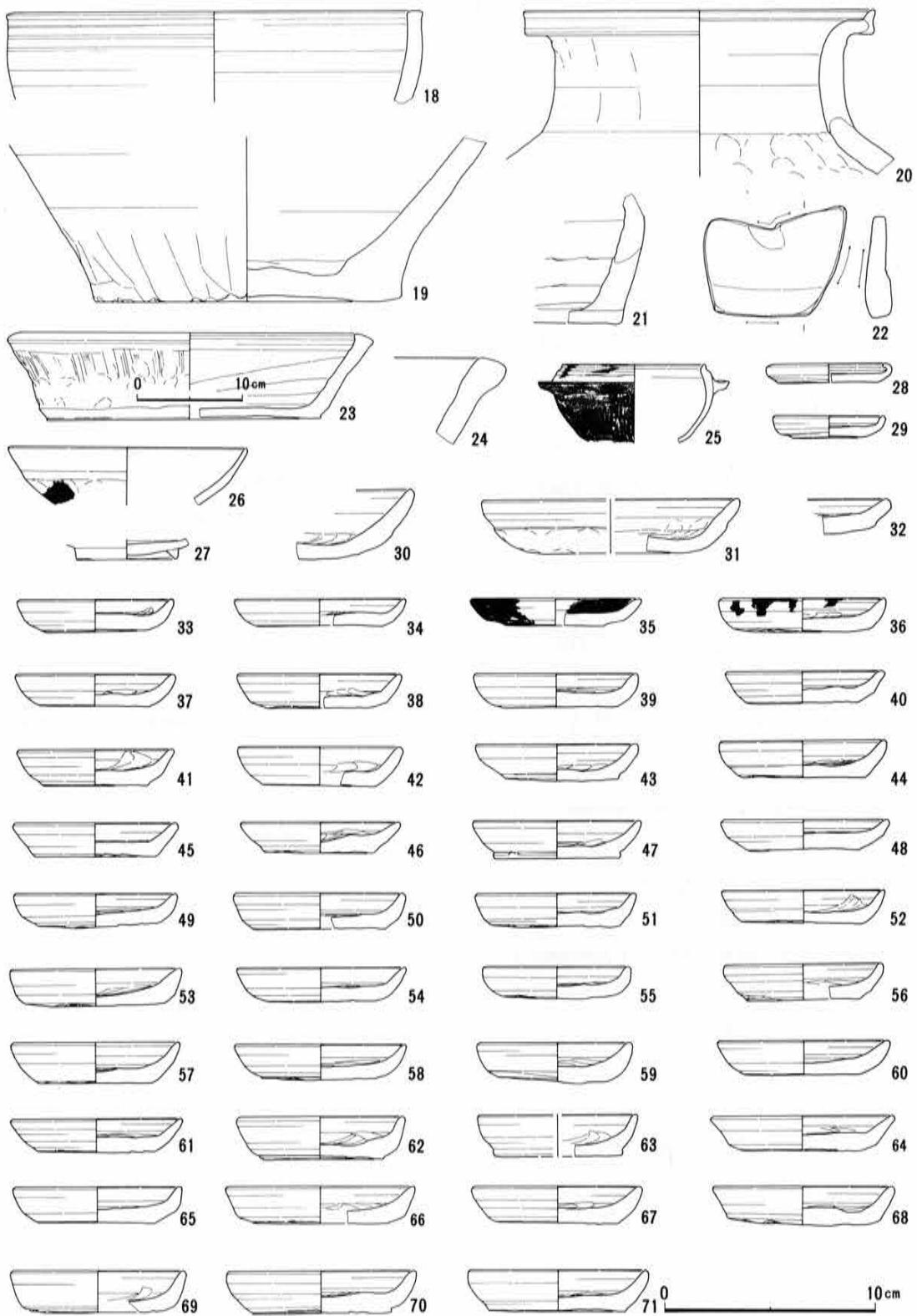


図45 II面上包含層出土遺物(2)

23—瓦質。口径32.2cm、底径26cm、器高8.4cm。外面には縦方向の刷毛目が、内面から外面口縁上部まで横ナデされる。外面には成形時の指頭痕がよく残る。胎土は灰色できめが粗い。外面下部に二次焼成痕。24—土器質。胎土には多量の白色針状物質、貝殻粒子等が含まれ、砂質できめ粗く、器表淡褐色、胎芯灰色を呈する。

土釜（25）

瓦質。口径6.8cm、鍔部径9cm。胎土は、一部の胎芯が灰色であるほかは灰白色で、非常にきめが細かい。外面鍔以下に煤が厚く付着している。

早島式土器（26・27）

2点はいずれも碗。同一個体の可能性がある。26—口径11.2cm。胎土は灰白色で、きめはやや粗目であるがよく焼き締る。27—底径4.7cm。胎土・焼成とも26に類似する。

かわらけ（28～111）

I a-1（28）、I a-2（29）、II d（30・31）、II b（32）などの他、次のように分類できる。

I b-2 : 33・36～39・42～44・46～52・54・56～58・65～71

I b-3 : 34・35

I b-4 : 72～77

I b-5 : 53・55・59・60・65～71

I b-6 : 40・41・45・61・64 :

この他I b類には62・63のように、深くて底が厚く、壁の薄いものがある。

I b-1 : 80～90

I d-2 : 101～103・106～109

I d-3 : 92～96・98・105

I d-6 : 91・97・99・100・104・110・111

鉄釘（112）

長さ11.3cm、幅6mm。断面は長方形を呈する。重量11.1g

笄（113）

鹿の四肢骨製と思われる。頂部に直径7.5mmの円孔があり、直下には、文字のような「下」か傷がある。長さ12.3cm、幅1.2cm、厚さ2mm。

硯（114）

灰黒色の粘板岩製。長さ11cm以上、幅8cm以上、厚さ1.7cm。池の深さ8mm、陸の深さ2mm弱。

滑石製石鍋（115）

口縁部を欠失する。鍔部の径19cm前後。内面には大小の傷があり、外面にはぶ厚い煤の付着が認められる。

温石（116）

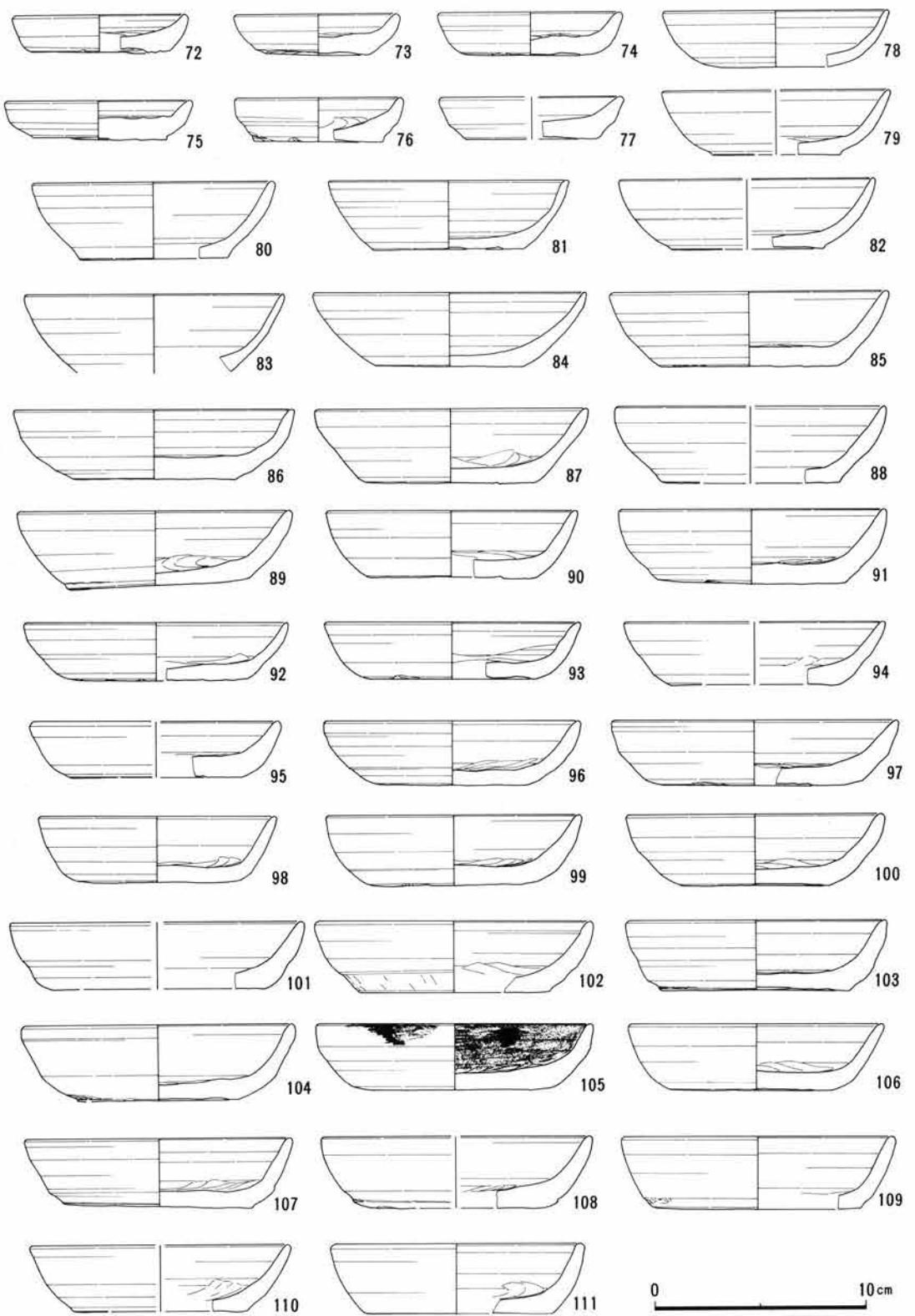


図46 II面上包含層出土遺物(3)

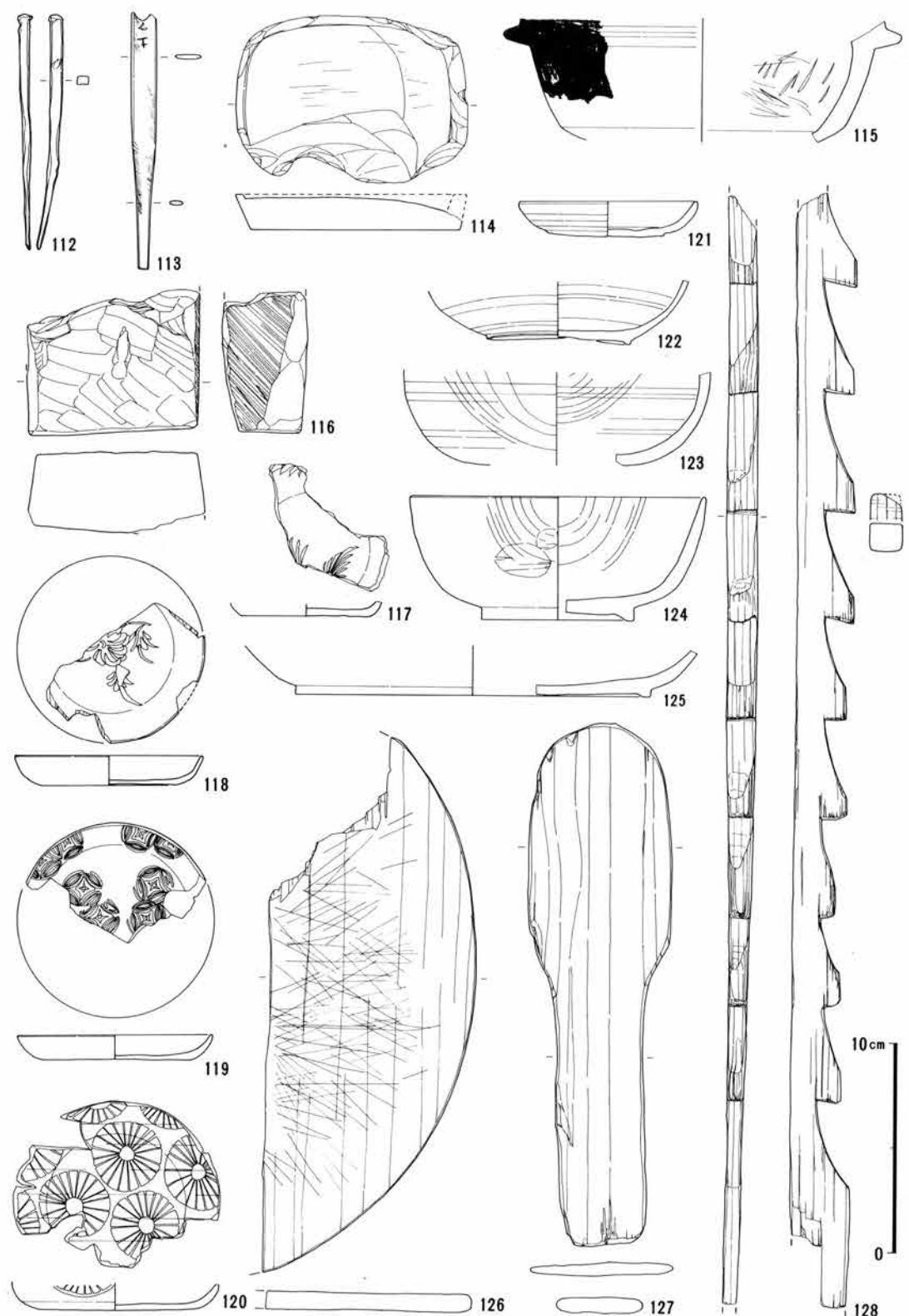


図47 II面上包含層出土遺物(4)

長さ 7.2 cm 以上、幅 8.2 cm、厚さ 4.2 mm。滑石製ではあるが、厚さからみて、石鍋の再加工品とは考えられない。あるいはブロックのままの搬入があったのかも知れない。

漆器 (117~125)

117—皿。高台なし。内面に草文らしきものがみられる。底径 6.1 cm。118—同前。口径 9.9 cm、底径 6.4 cm、器高 1.4 cm。これも高台は見られないが磨耗したものである可能性がある。内底面には菊花文。119—同前。高台なし。内底面と内壁に印判の花文がある。口径 9.2 cm、底径 7.2 cm、器高 1.2 cm。120—同前。内面と外面に菊の印文が捺される。底径 7.5 cm。高台なし。121—同前。無文。口径 8.4 cm、底径 5.5 cm、器高 1.7 cm。盤状の高台部を持つ。122—無文椀。土圧による歪みがひどい。底径 6.8 cm。123—同前。体部径 14.6 cm。124—同前。口径 13.9 cm、底径 7.2 cm、器高 5.4 cm。体部外面の破損が大きい。125—無文鉢。底径 16.9 cm。

曲物 (126)

底部であるが、切傷が多く俎板に転用されたものと思われる。径不明。

杓文字 (127)

長さ 25 cm、幅 6.8 cm、厚さ 6 mm。柄の部分では幅 4.2 cm、厚さ 7 mm。

自在鈎 (128)

上部と先端の鈎の部分はない。長さ 52.8 cm、幅 2.8 cm、厚さは上部で 1.3 cm、先端近くで 7 mm を測る。自在鈎の出土は、造り付けの閑炉裏の存在を示唆するものといえよう。

箸状木製品 (129~131)

129—長さ 29 cm、幅 8 mm。130—長さ 22.3 cm、幅 8 mm。131—長さ 22.1 cm、幅 7 mm。

横櫛 (132・133)

133—黒漆塗。棟厚 9 mm、棟高 1.3 cm、歯の長さ 3.2 cm。133—黒漆塗。棟厚 9 mm、棟高 1.1 mm、歯の長さ 3.1 cm。

不明木製品 (134~137)

134—半月形で、長さ 12.1 cm、幅 5.6 cm、厚さ 7 mm。上部に柄の装着穴らしきものがある。灰搔きか。135—一方の木口を平らに、他方の木口を鈍く尖らせる。何かのつまみか。長さ 3.5 cm、幅 2.4 cm、厚さ 2.2 cm。136—先端を楔状に形成し、上部に黒漆を塗る。長さ 31.6 cm、幅 2.4 cm、厚さ 1.2 cm。137—三つの小円孔を持つ。長さ 30.2 cm 以上、幅 3.9 cm、厚さ 3 mm。

建具部材 (138・139)

いずれも棟の組子。両端と中央に枘を持つ。138—長さ 38.2 cm、断面はほぼ正方形に近く、一辺は 1.3 cm、ないし 1.4 cm。139—寸法は 138 に同じ。

連歯下駄 (140~142)

140—長さ 21.1 cm、幅 9.8 cm、厚さ 9 mm。前歯は折損。後ろの歯は釘で補修されている。141—かかとの部分欠損。長さ 18.8 cm 以上、幅 8.7 cm、厚さ 1.4 cm。142—逆台形の歯を持つ高足駄。長さ 23.9 cm、幅 10 cm、高さ 11.2 cm。歯は幅 18.5 cm、付け根の厚さ 4 cm。折れた歯を鉄釘で補修している。

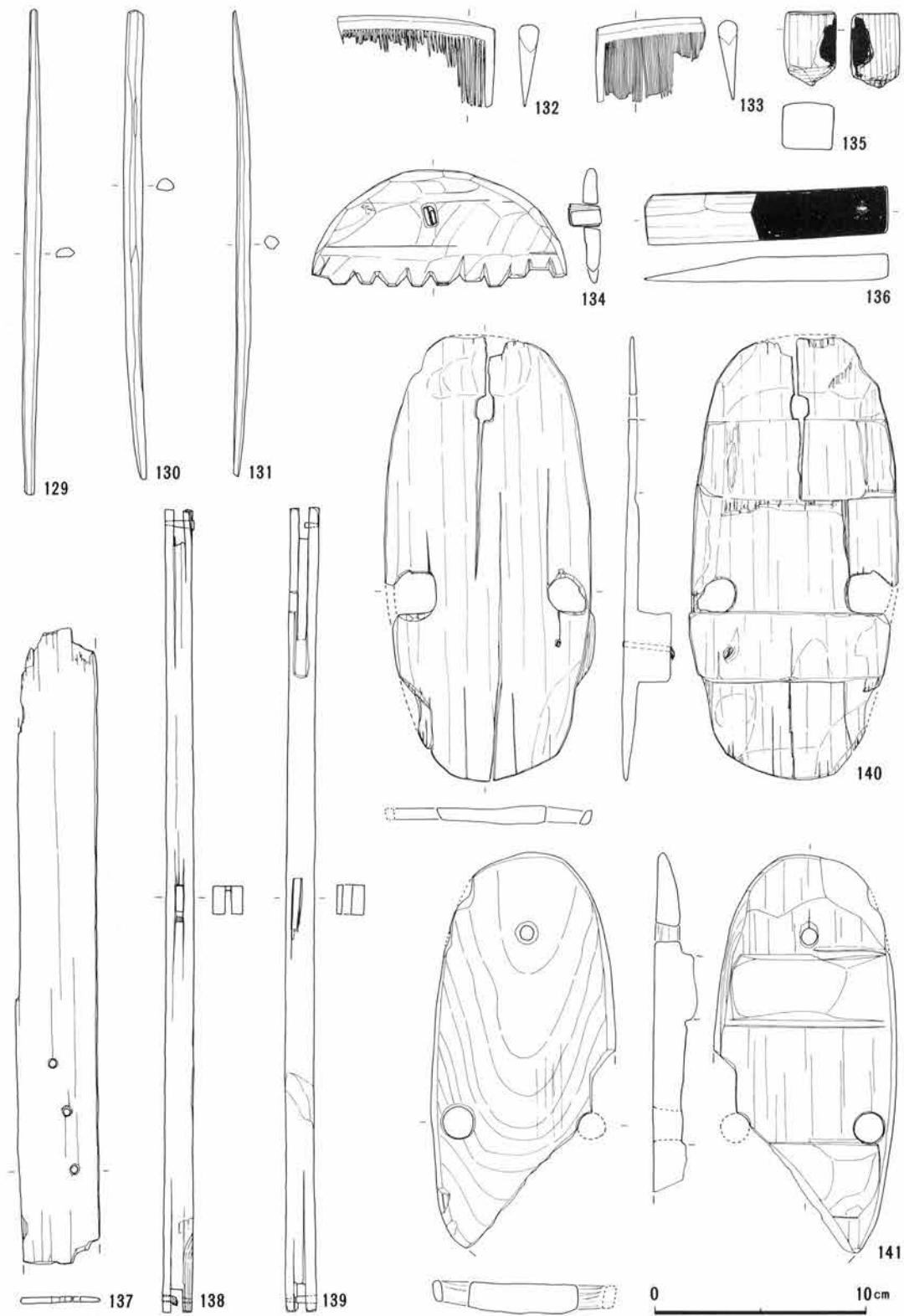
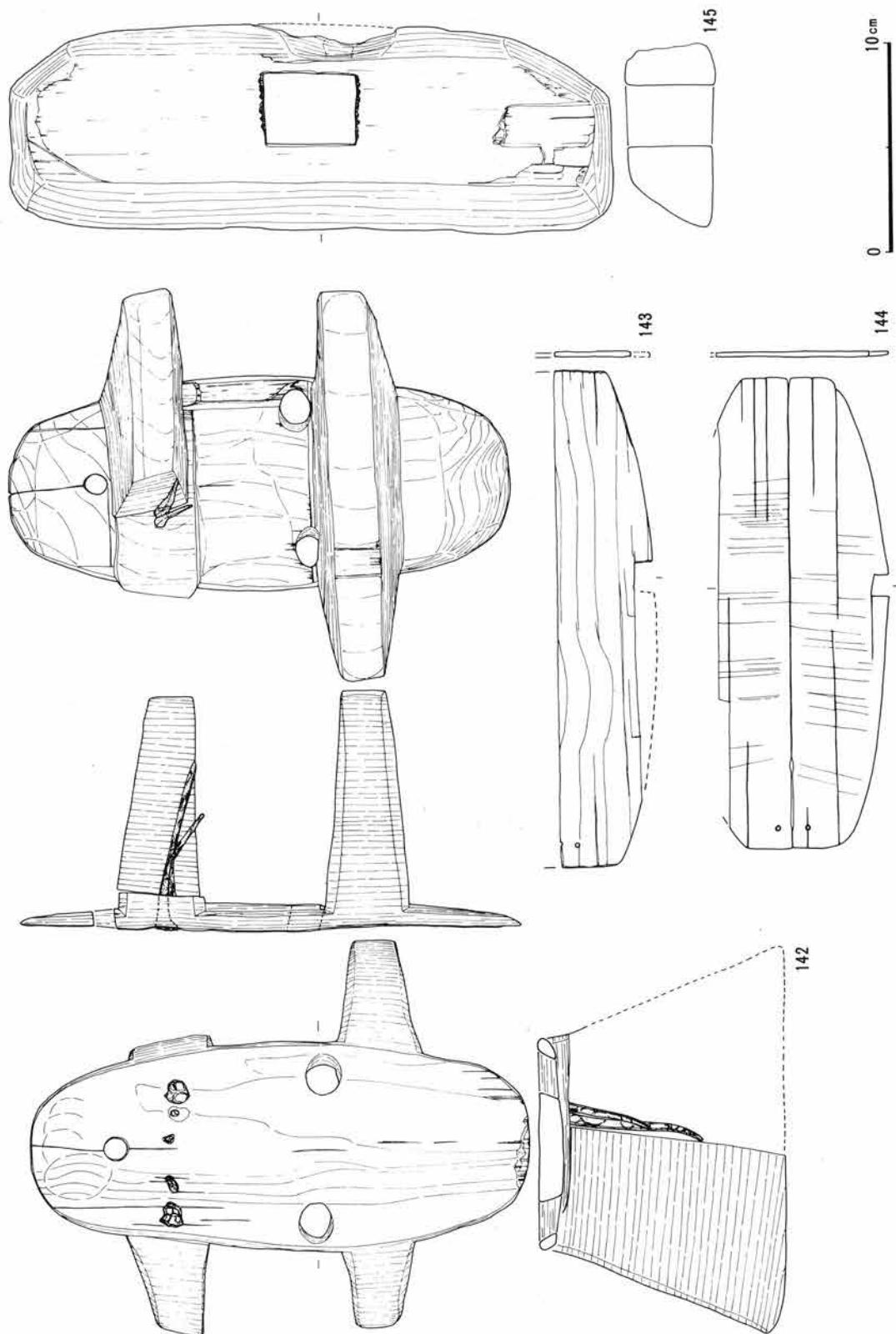


図48 II面上包含層出土遺物(5)

图49 II面上包含层出土遗物(6)



「餓鬼草紙」中に、これをはいて排便している絵があるのは有名である(『新版絵巻物による日本常民生活絵引』第1巻 平凡社1984 125頁)

板草履 (143・144)

143—長さ23.8cm、幅(復元)9.2cm、厚さ3mm。144—長さ22cm、幅(復元)9.4cm、厚さ3mm。

部材 (145)

長さ28.6cm、幅9.8cm、厚さ4.3cm、長楕円もしくは隅丸長方形を呈し、中央部に4.4×3.4cmの方形の枘穴がある。建物の部材か。

4. III面上包含層出土遺物 (図50~53)

青磁 (1)

劃花文碗。釉薬は青緑色半透明、胎土は灰色。内面に界線の一部が見える。

常滑 (2~5)

2—甕。口径17.6cm。胎土は、芯部灰黒色、器表近くで灰色、ややきめ細かい。器面は褐色に焼け、上縁、肩部に降灰が著しい。3—同前。胎土は黒褐色、岩石質できめが粗い。やや軟質。4—同前。胎土は灰黒色を主に一部明褐色が混り、きめが粗く岩石質ではあるが、焼き締りはいい。5—鳶口壺。底径7.9cm、肩部径11.8cm。口縁部を欠く。胎土は灰色できめが細かく、非常に堅緻。内面には肩部に煤のような黒色付着物、下半部にベンガラようの朱色の付着物がみられる。

山茶碗窯系陶器 (6~13)

6—捏鉢。口縁部は外側に肥厚。胎土は灰色できめが粗く、岩石質に近い。10と似ており、同一個体の可能性がある。7—同前。微かに緑味ある灰色の胎土で、岩石質、きめが細かい。8—同前。灰色できめの粗い胎土。9—同前。高台端部がやや外反する。胎土は灰色できめが細かい。10—同前。片口付き。口縁端部に沈線が廻る。口径28.9cm。胎土は6に似て、灰色できめが粗く、岩石質に近い。11—同前。口径29.4cm、底径14.2cm、器高16.8cm前後。胎土は灰色でややきめが粗い。12—同前。口縁部やや外反。きめ細かな灰黒色の胎土で、器表面は灰黒色。13—鉢。口径17.3cm。端部は角形の断面を呈し、上縁部に浅い凹帯が廻る。

渥美 (14)

鉢。口縁端は外側に少し肥厚する。胎土は灰色、きめ細かく岩石質。外面上部に灰黒色の釉薬を刷毛塗りしている。

火鉢 (15)

土器質。外面口縁下に凹帯が廻る。胎土は芯部で灰色、器表近くで淡褐色ないし肌色を呈し、きめが粗い。内面・外面とも焼けた痕跡がある。外面はよくなでられている。

かわらけ (16~83)

手捏ね成形では、ミニチュア内折れ型のII a (16)、II b類 (21~25)、II d類 (26~30) がある。ロクロ成形は、次の通りである。

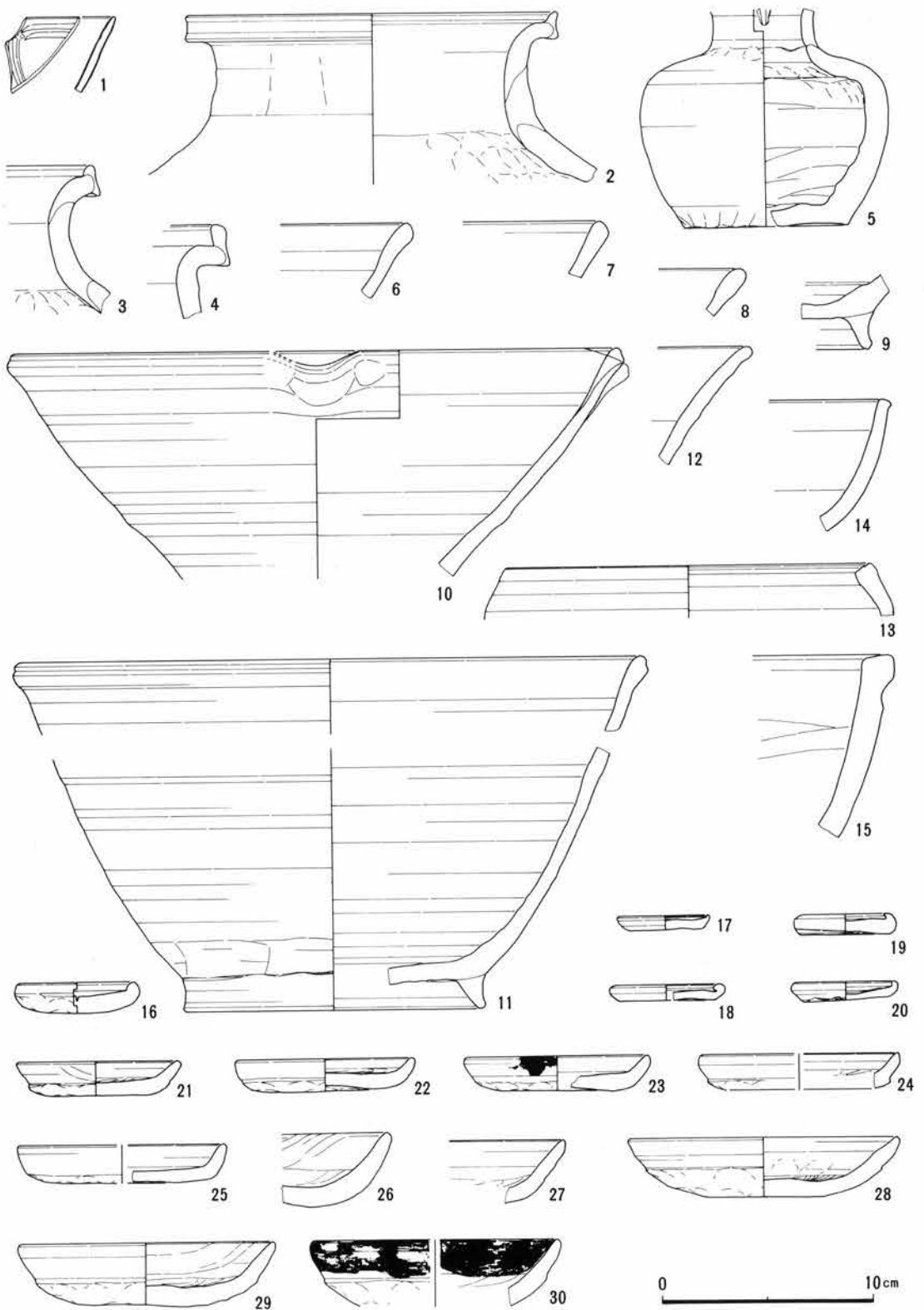


図50 III面上包含層出土遺物(1)

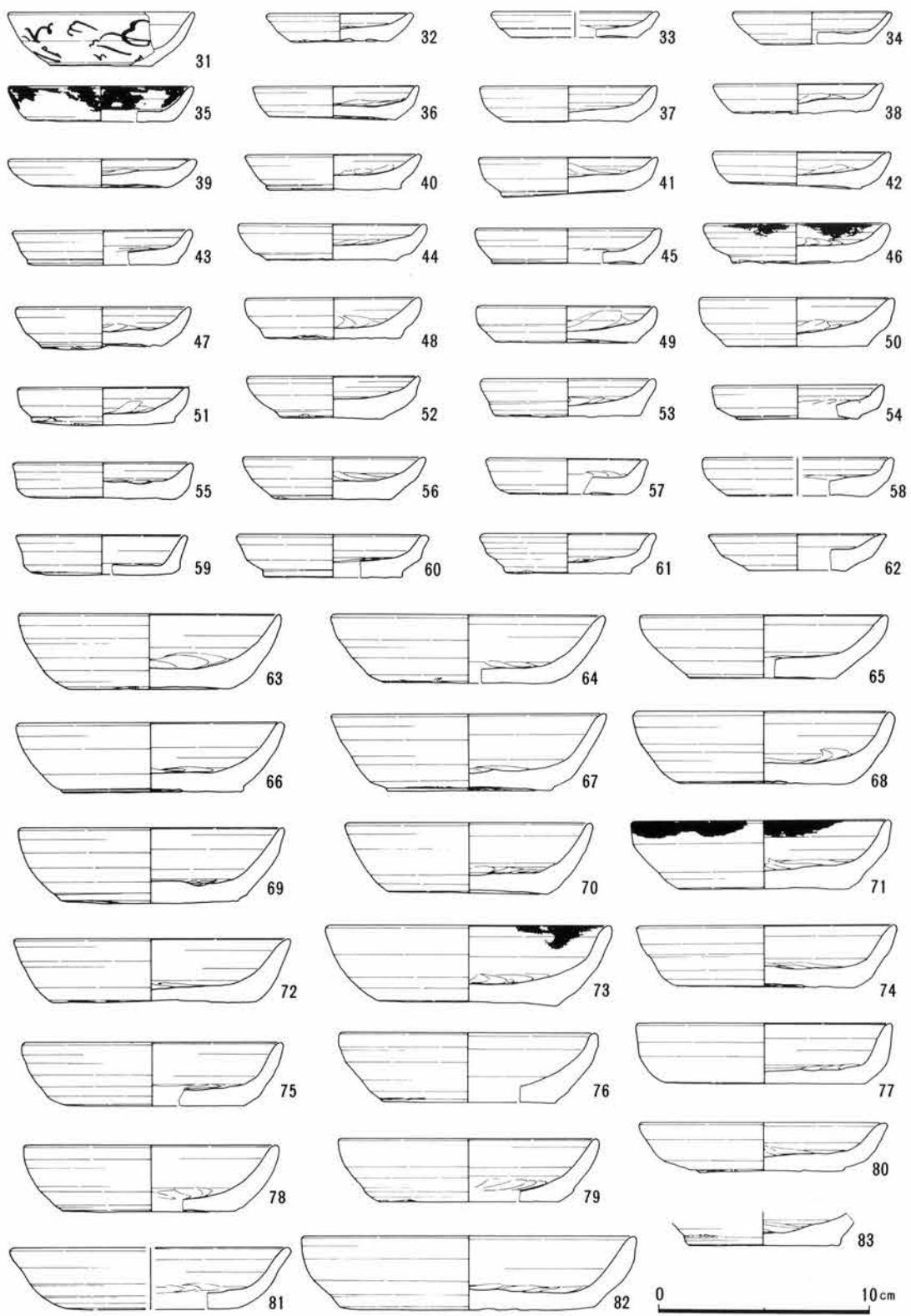


図51 III面上包含層出土遺物(2)

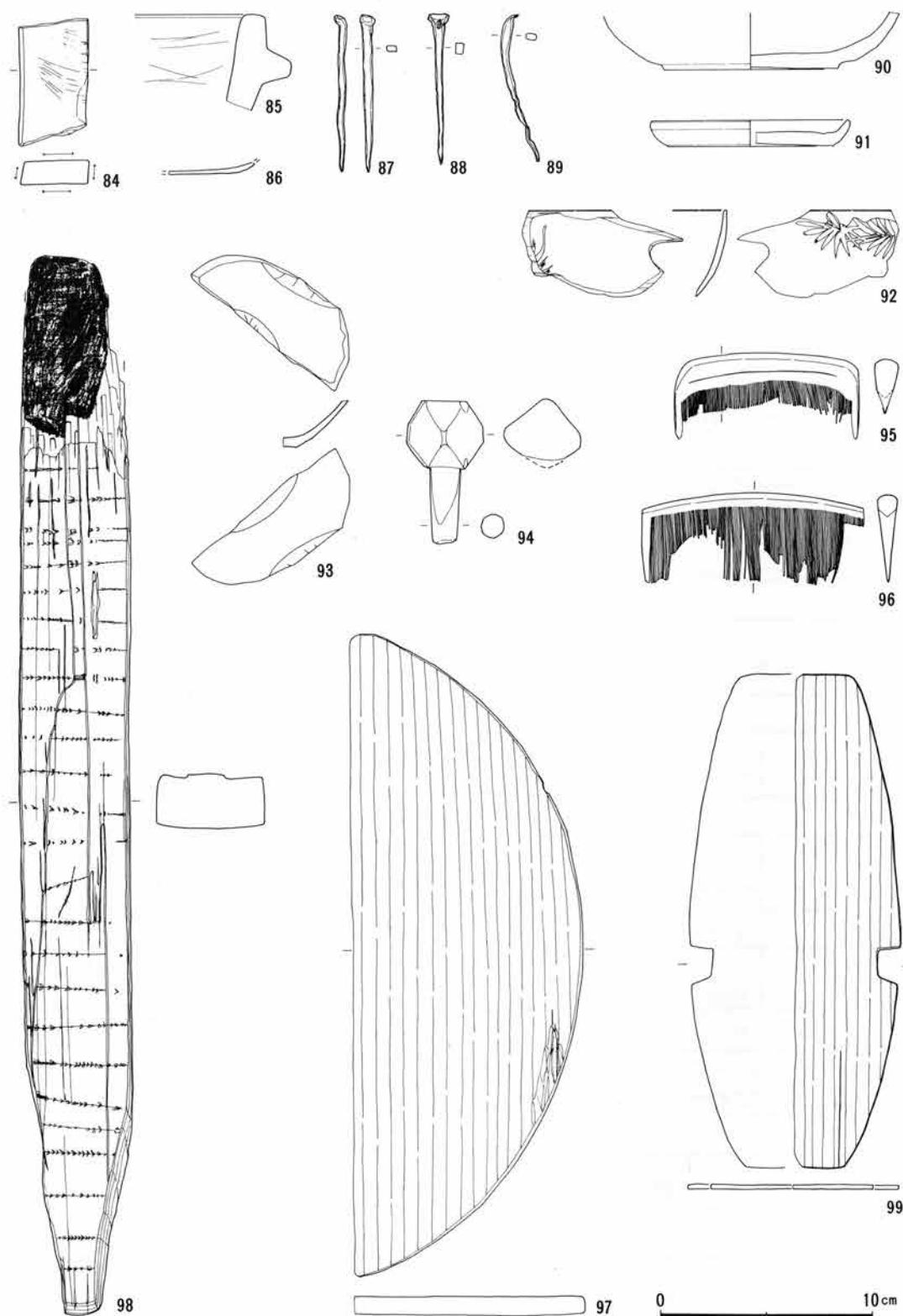


図52 III面上包含層出土遺物(3)

I a - 1 : 18~20

I a - 2 : 17

I b - 1 : 31 該品の器表面には墨書が見られる。

「□□乃
〔いか〕〔つか〕
乃乃

□□ □□」

(鎌倉国宝館々長三浦勝男氏御教示による)

I b - 2 : 34

I b - 3 : 32・33~39

I b - 4 : 40~46・48~51・53~55

I b - 5 : 47・56~58

I b - 6 : 59

他に52は体部下半～底部が厚く、内彎する体部を持ち、口縁部のみ薄い造りで端部は尖る。60・61は体部中位に稜を形成して上部は外反気味にくびれる。また62は古式の様相を残すもので、全体に厚いが、口縁端のみ薄く、体部下半には稜を持つ。焼成は非常に良い。

I d - 2 : 74・75・77

I d - 5 : 72・78・79

I d - 6 : 63~71・73・76

この他80は器高2.4cmと低く、体部下半の垂れ気味になるもので、非常に稀れであるといえる。81は口縁部の外反する、これも珍しい形である。82は口径15.8cm、底径12cm、器高3.5cmの大振りのもので、体部中位の肥厚する点はやや古式に属すると言える。83は底部のみの破片で、赤褐色良好の焼成の、かわらけ中最も古式のもの。

砥石 (84)

緑色変岩製の中砥。上下を欠失するが、長さ6cm以上、幅3.2cm、厚さ1.1cm。4面とも砥面。

滑石製石鍋 (85)

僅かに褐色がかった銀灰色の滑石による。外面にはいちめんに煤が付く。内面には使用時の大小の傷がみられる。

鉄鍋 (86)

底部片。厚さ1.5~2.5mm。

鉄釘 (87~89)

87—長さ7.5cm、断面は5mm×3mm、重量4.7g。88—長さ7.1cm、断面は5mm×4mm、重量6.8g。

89—長さ8.2cm、断面は5mm×3mm、重量2.5g。

漆器 (90~96)

90—無文椀。底径8.2cm。器厚は厚手で、高台は盤状。91—無文皿。口径9.3cm、底径7.8cm、

器高 1.2 cm。無高台。92—椀。内面、外面ともに草花文の一部がのぞく。93—椀。これも無高台。内底面と内外の器壁に菊花または日輪が描かれる。

94—黒漆塗のつまみ、あるいは栓。つままれる部分は14面体、装着部分は円筒形で、幅はそれぞれ3.6cm、1.4cmを測る。全体の長さは 6.8 cm。

95—横櫛。棟厚1.1cm、棟高1.8cm、歯の長さ1.7cm。棟の部分に沈線がみられる。96—同前。棟厚9 mm、棟高1 cm、歯の長さ 3.5 cm。

曲物底 (97)

直径はおそらく31cm前後、厚さ 9 mm。

杭 (98)

鋸様のもので、大体半寸おきに目盛らしき印が付けられている。木組みの際に位置を特定するためのものか。上端を焼失するが、長さ50cm、幅5 cm、厚さ 2.5 cm前後。

板草履 (99)

長さ23.3cm、幅(復元)9.7 cm、厚さ 2 mm。

連歯下駄 (100・101)

100—長さ23.9cm、幅9.7cm、厚さ1.4cm。101—長さ22cm、幅9.2cm、厚さ1.5cm。

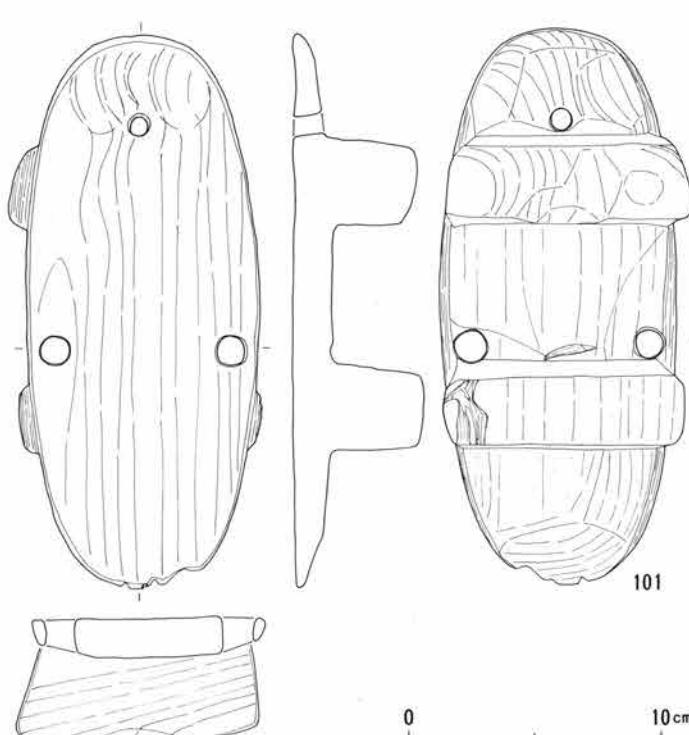
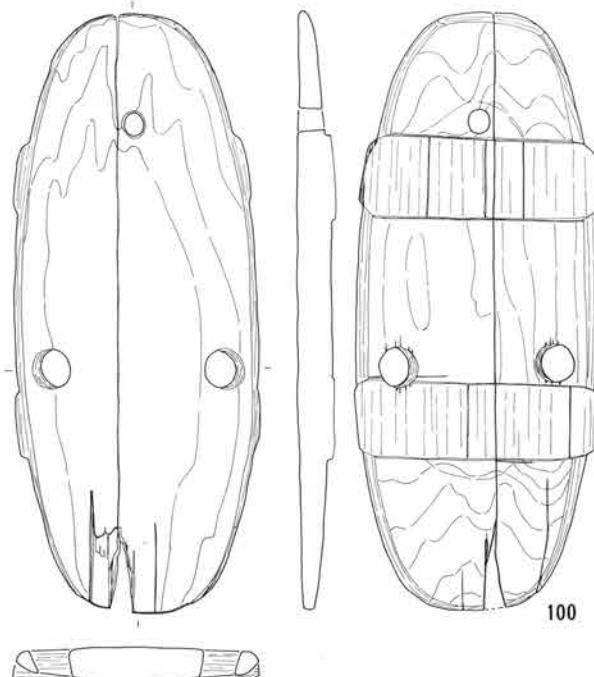


図53 III面上包含層出土遺物(4)

5. 表採品 (図54)

青磁 (1)

碗、底径 3.2 cm。釉薬は灰青色失透、胎土は灰色～明褐色、岩石質に近いが、焼成やや甘い。

青白磁 (2)

水注蓋。全体として菊花を呈する。全幅3.8cm、長さ 2.8 cm、差し込み部分の径 1.8 cm。釉薬は水青色半透明、胎土は白色で結晶状。

白磁 (3)

口兀皿。口径10.9cm。釉薬はやや灰味帯びた透明釉、胎土は灰白色結晶状。

人形 (4)

鳥帽子を冠るが、顔の表情などは不明。下端は欠失。長さ 23.5cm、顔の幅 1.9 cm、他の部分の幅 1 cm、厚さ 4 ~ 5 mm。

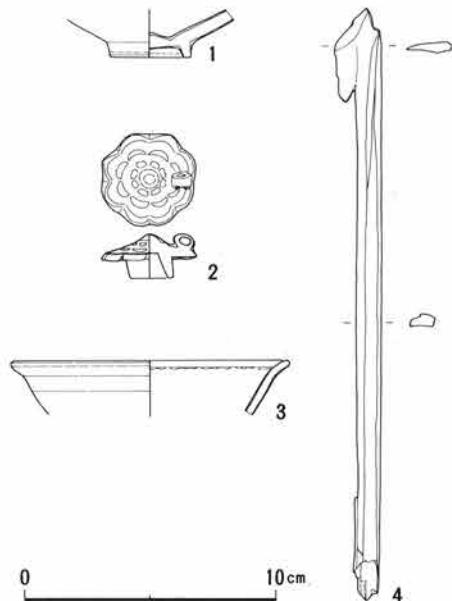


図54 表採品

第四章 調査のまとめ

遺構の変遷とその年代

本地点調査において、最も早い時期（第1期）は、一部しか調査できなかつたがⅣ面である。この面からの遺構にはほとんど見るべきものはなかつたが、面そのものは平坦で、非常に堅く構築されているので、おそらく調査区外の近接地には、建物など遺構群の群集していることが充分に予想できる。あるいは、ひとつの建物の範囲内にあることも考えられよう。

ここからの出土遺物には、おそらく細めの蓮弁文を持つと考えられる青磁碗（図41-1）があり、かわらけは、手捏ね成形小型のものを2点含むほかは、概して器高の低いものが多い。ロクロ成形の大型のものは、やや厚手で直立気味の体部を持つ。この遺物群の年代は、多少の混入を考慮に入れても、おそらく13世紀中葉～後半代に比定できると思われる。

本地点の第2期には、Ⅲ面を充てることができる。この面の検出遺構の特徴は、南北に走る木組と、東西方向の木組の名残り、およびこれらに囲まれた多数の柱穴群である。南北の木組には修復がみられ、東西方向のものはほとんど原形をとどめないが、その構造からみて、いわゆる方形堅穴状遺構の壁体であることも考えられる。柱穴群はこの木組と直交あるいは平行した方向性を持ち、概ね深く、しっかりとしたもので、確かに掘立柱建物の柱であると思われる。またこれらの柱穴の多くは、土間状の非常に硬い面の上にあり何度かの建直しを観察できるが、全容は不明である。

ところで、主としてこのⅢ面上には（他の層の多くもそうであるが）、しばしば述べたように、黄褐色または明褐色のきわめて柔弱な、植物纖維質土の堆積がみられる。この土は陽に曝されると忽ち暗い色調に変わっていき、水気が多く、薄い層の幾重にも重なつたもので、水平方向の板状剥離を示す。いわゆる箸状木製品など、木製品の遺存状態は非常に良好である。鎌倉市内の、地下水位の高い遺跡ではたびたびみられる。筆者は、おそらくこれはわら屋根の腐蝕したものと考えているが、時に何百本も一度に出土する箸状木製品についても、いまいちど、わら屋根のとめ櫛等の可能性を考慮してもいいと思われる。

この第2期の遺構群に伴なう遺物は、Ⅲ面上包含層出土のものである。1点の割花文青磁の他、口縁部上辺に凸帯状の縁帶を持つ常滑、口縁部の外方に肥厚する山茶碗窯系捏鉢、渥美鉢、数点の手捏ね成形かわらけ等がみられる。若干の年代的混乱があると思うが、こういった諸相は、およそ13世紀後半～14世紀初頭に位置づけられよう。

第3期にはII面が該当する。Ⅲ面とII面との間に見られた人頭大土丹の集合部分は、あまりに荒れて不明瞭であった。該期は遺構の重複がしきりにみられ、本来ならば幾つかの時期に分けられるべきと思われるが、層位的に分かつことは困難であった。非常に接近した時間内になされた改変か、あるいは、上層遺構（例えば南北溝など）構築の際、間層を削り取つたものと考えられる。

該期には、調査区北域に掘立柱建物と覚しき柱穴列を持つ分厚い土丹版築面が見られる。この版築面上には、柱穴列を切って井戸が掘られ、さらに井戸を壊して、大きな南北の木組溝が作られている。調査地点南端に設けられた調査区では、南北溝と直交する木組の東西溝も確認している。また2基の囲炉裏が検出されている。さらに南域にはいくつか土塹もある。

南北溝はしっかりした木組による立派な規模のもので、おそらく、市街地を区画する役割も負っていると考えられるが、これについては後述する。

2基の囲炉裏はどちらも方形で小さく、板組みの下部構造しか残っていなかった。本調査とほぼ同時期にされた雪ノ下一丁目273番口地点の調査では、3基が確認されており、いずれも本地点検出例と同様、縦位の板を横に並べた構造を持っていた。^{註1}3基のうち2基は浅い方形堅穴の中にあり、うち1基は中に火鉢が据えられていた。「信貴山縁起」などにみられる、囲炉裏の中に火処（ホド）^{註2}を据えた例で、火はこの中で燃される。また火鉢が可搬の囲炉裏替りに使われることがあるが、図29-58・59も、その装飾性からみて、単体で火処として使われていたと思われる。すると、煮沸施設としての囲炉裏と、主として暖をとるための可搬の火鉢とで、機能分化が始まっていた可能性がある。また前者には、東国では自在鉤が多く使用されたので、図47-128の自在鉤がそれにあたろう。後者を煮沸に使う場合には五徳しか使えないが、本地点の調査からは出土していない。

該期の出土遺物には、若干混乱しているように見受けられるが、面上および面上包含層などのものが相当する。蓮弁文青磁、口兀げ白磁、等が多く、またかわらけは厚手で器高の低いものが多い。手捏ねかわらけをいくつか含むことを考慮に入れるとこれも年代的にはⅢ面と大きく違わず、14世紀前半代を中心としていると考えられる。

第4期にはⅠ面が相当する。Ⅰ面ではいくつかの柱穴、土丹版築による生活面の一部を検出したが、建物などは確認できなかった。

該期の遺物にはⅠ面出土遺物がある。蓮弁文青磁、口兀皿など前代のものと器種構成はさして変わらないが、かわらけ中に手捏ね成形のものが見られず、ロクロによる薄手で内巣する器高の高いものが多く含まれている。こういった点はやはり前代よりも多少時期の降る要素であり、14世紀中葉の年代が相応しいと言える。

以上大雑把に遺構面の年代を辿ったが、これら遺構面は13世紀中葉～14世紀中葉に営なされたものと考えられる。

南北溝について

近頃、若宮大路周辺の「北条泰時・時頼邸跡」や本地点の所在する「北条時房・顯時邸跡」のいくつかの発掘調査で、大路の側溝と覚しい木組の大溝が検出され始めている。本地点検出の南北溝も、これら大路側溝の木組と似た構造を持っており、おそらく街割を示す役目を負っているものと思われる。この機会に、この近辺の土地区画についてちょっと述べておきたい。

まず側溝からみた若宮大路の幅であるが、側溝の南北角材の間で測ると33.6mとなる。これは約

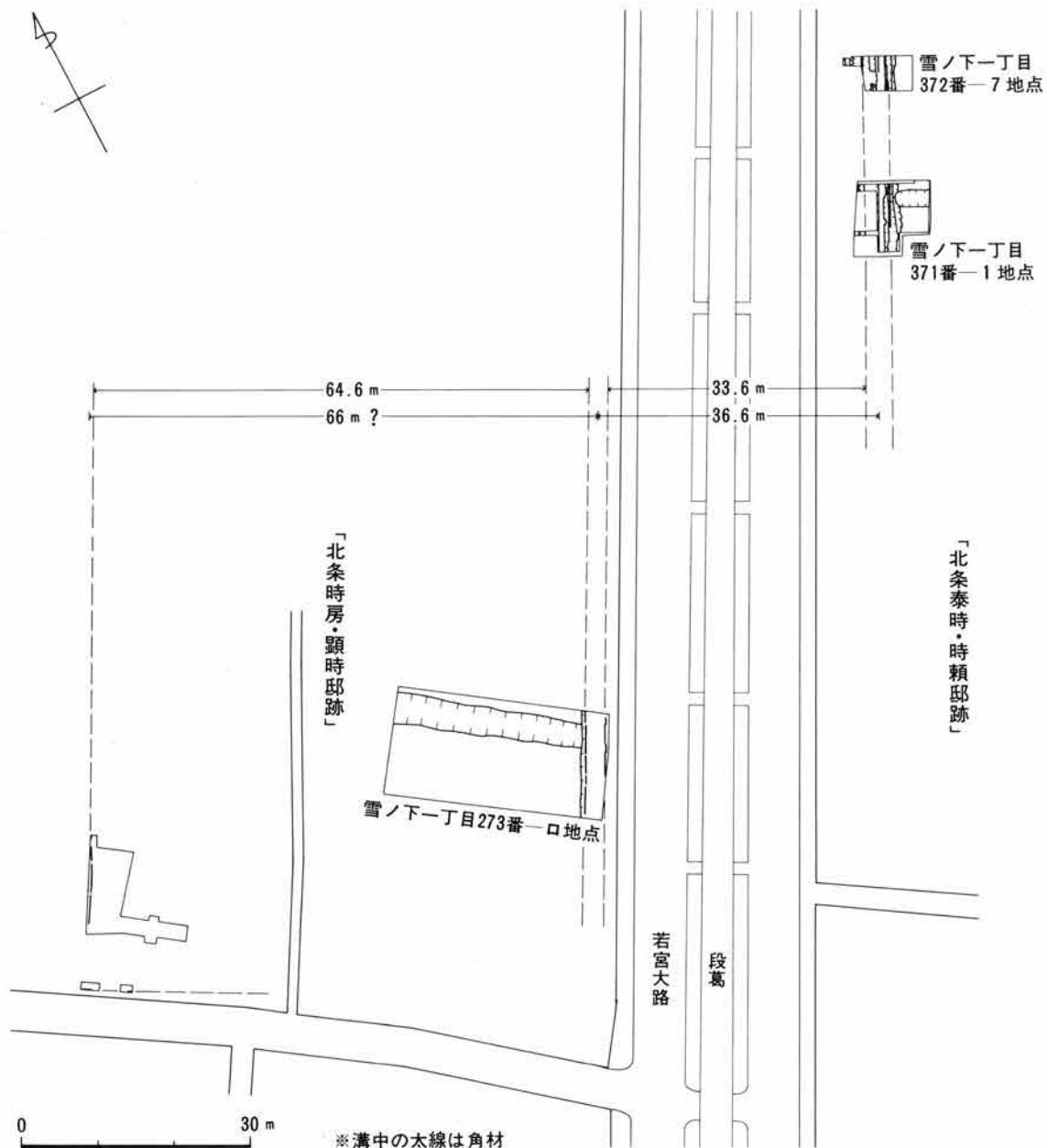


図55調査地点近辺の溝検出例

112尺 (11.2丈) である。側溝の中心軸間では34.6mで、約115尺 (11.5丈) 強ということになる。

次に若宮大路西側側溝と、本地点検出の南北溝を測ると、南北角材間で64.6mであり、ほぼ 215 尺 (21.5丈) 強である。また側溝の中心軸間では、本地点の西側壁が確定していないので不安は残るが約66m前後と思われる。これは220尺 (22丈) である。

今のところこれらの数字のみが、中世の地割溝の詳しい数値であるが、多少の誤差は考慮に入れ

ても約11丈の単位が得られよう。次は地図からの計測値をみてみる。

南北方向では、本地点南端で検出された東西溝から現在の横大路南辺まで約 230 m 強の距離がある。これは約 770 尺（77 丈）となり、11 丈の倍数であることがわかる。東西方向は、現状では、横大路西半分（つまり北条時房・頼時邸跡の北辺）が約 115 m、東半分（つまり北条泰時・時頼邸跡の北辺）が約 230 m 弱を測る。38.5 丈と 77 丈ということである。

大縮尺の地図による計測値なので多少の誤差はあると思われる。またこの近辺のみに当て嵌まる数値である可能性もあり、鎌倉旧市内地一般に普遍化するつもりはないが、大三輪龍彦氏が試み^{註6}たように、丈尺の制を実際の道路・溝などの検出例で検討することは必要であろう。その意味で、今回の単位を算出したのである。

註

1 調査担当者原広志氏の御教示による。

2 渋沢敬三・日本常民文化研究所『新版絵巻物による常民生活絵引』第1巻平凡社1984 66図

3 「絵師草紙」註2 前掲書第4巻538図

4 馬渕和雄『北条泰時・時頼邸跡 雪ノ下一丁目 371 番-1 地点発掘調査報告書』北条泰時・時頼邸跡発掘調査団／鎌倉市教育委員会1985

馬渕和雄「北条泰時・時頼邸跡 雪ノ下一丁目 372 番-7」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書1 昭和59年度発掘調査報告』鎌倉市教育委員会1985

5 雪ノ下一丁目 273 番-1 地点および雪ノ下一丁目 274 番-2 地点の調査において。いずれも1986年度に吉田章一郎氏を調査団長として実施された。

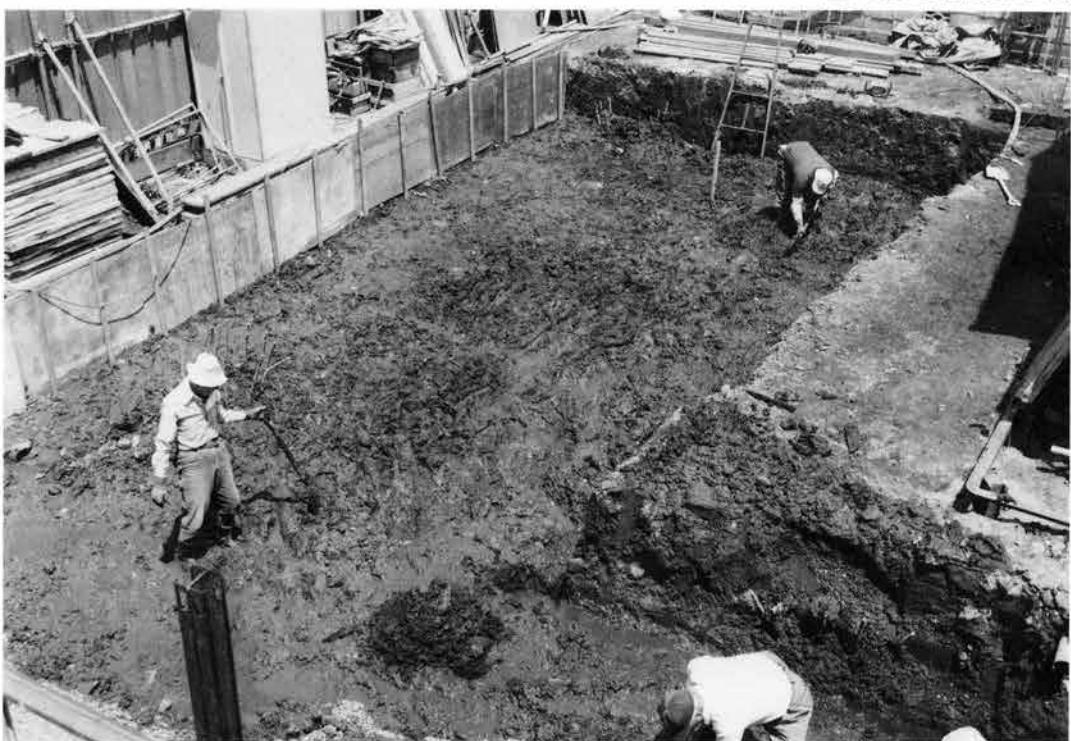
6 大三輪龍彦「中世都市鎌倉の地割制試論」『仏教芸術』164号 毎日新聞社1986

図版 1



1. 調査開始時近景(南から)

2. 調査開始時全景(南東から)



図版 2



1. I 面上南東土丹面(西から)

2. 同上(東から)



図版 3



1. I面西域全景(北から)

2. 同上(南から)



図版 4



1. I面東域全景(西から)

2. 同左(東から)





1. II面西域全景(北から)

2. 同上(南から)



図版 6



1. II面東域全景(西から)

2. 同左(東から)



図版 7



1.南北溝(南から)

2.同左(北から)



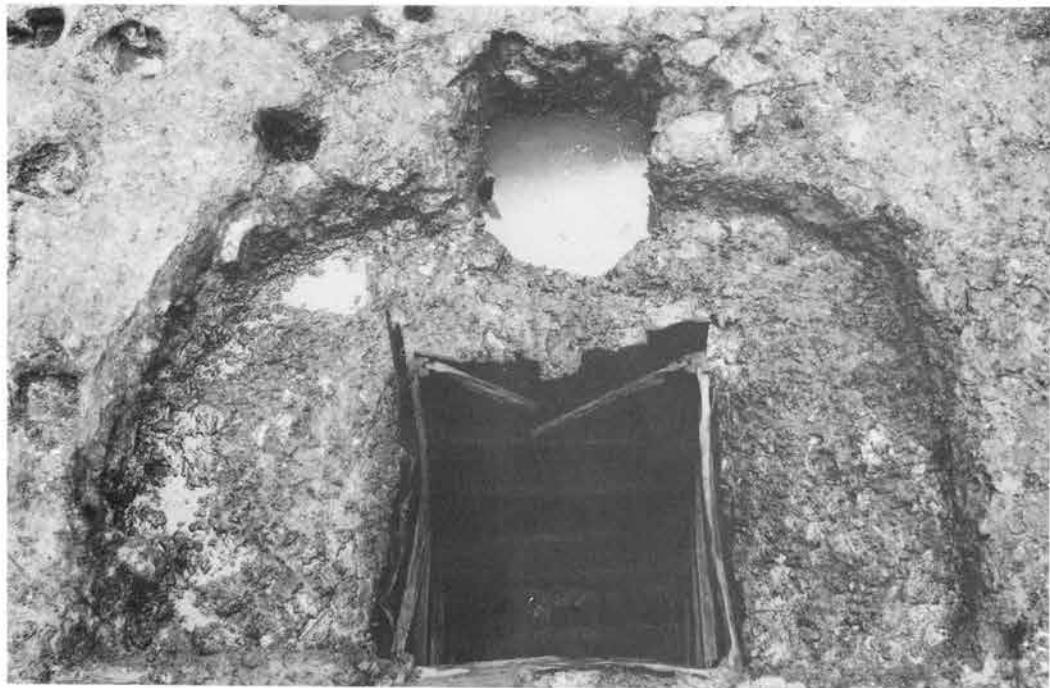
図版 8



1.南北溝北端拡張区(南から)

2.東西溝(東北から)





1. 井戸(西から)

2. 同上木枠内部(東から)



図版10



1. 囲炉裏 1 (南から)

2. 囲炉裏 2 (東から)



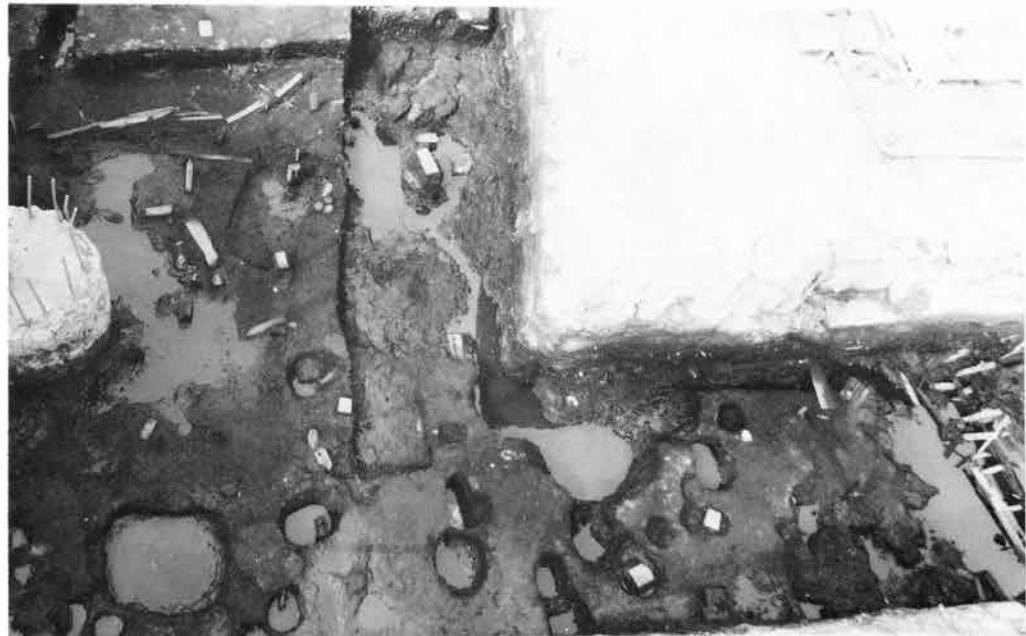


1. II面木組遺構(東から)

2. 柱穴列(北から)



図版12



1. III・IV面全景(南から)

2. 同上(西から)





2. 同左(北から)



図版14



1. かわらけ
出土状況



2. 木製品出土状況



3. 自在釣出土状況

図版15

1. 漆器(鏡箱蓋)出土状況



2. 漆器椀出土状況



3. 漆器椀出土状況



図版16



1. かわらけ・漆器出土状況



2. 漆器・板草履出土状況



3. かわらけ・漆器出土状況

図版17



1. 高足駄出土状況

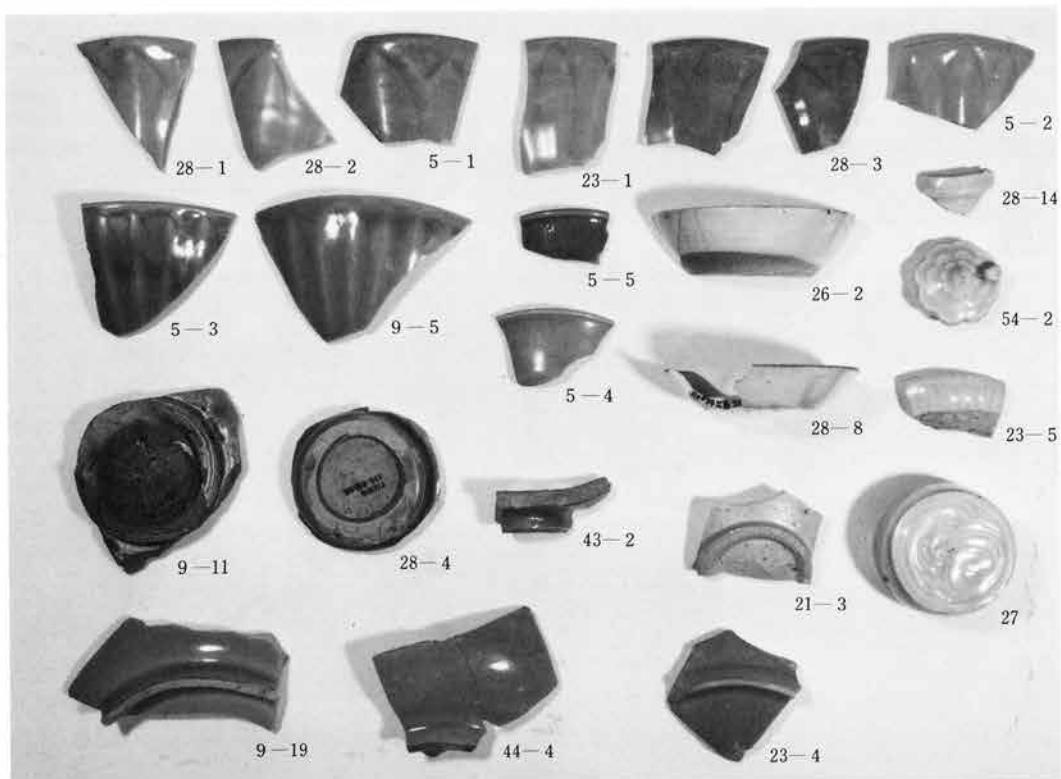


2. 鎌出土状況



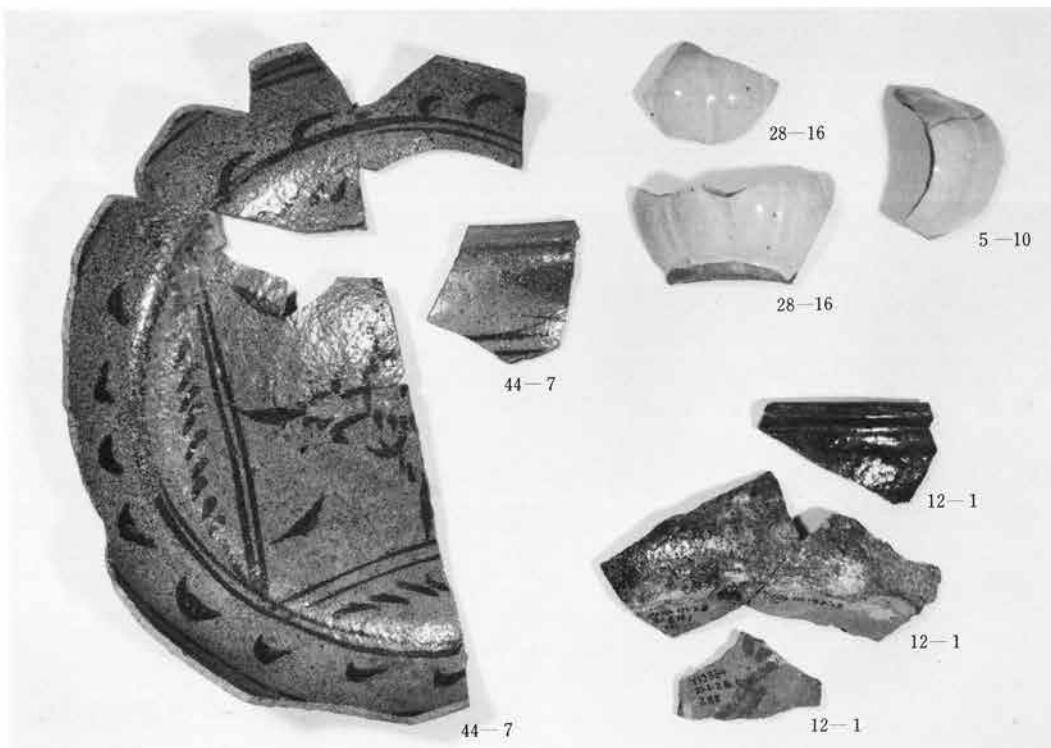
3. 子供用下駄出土状況

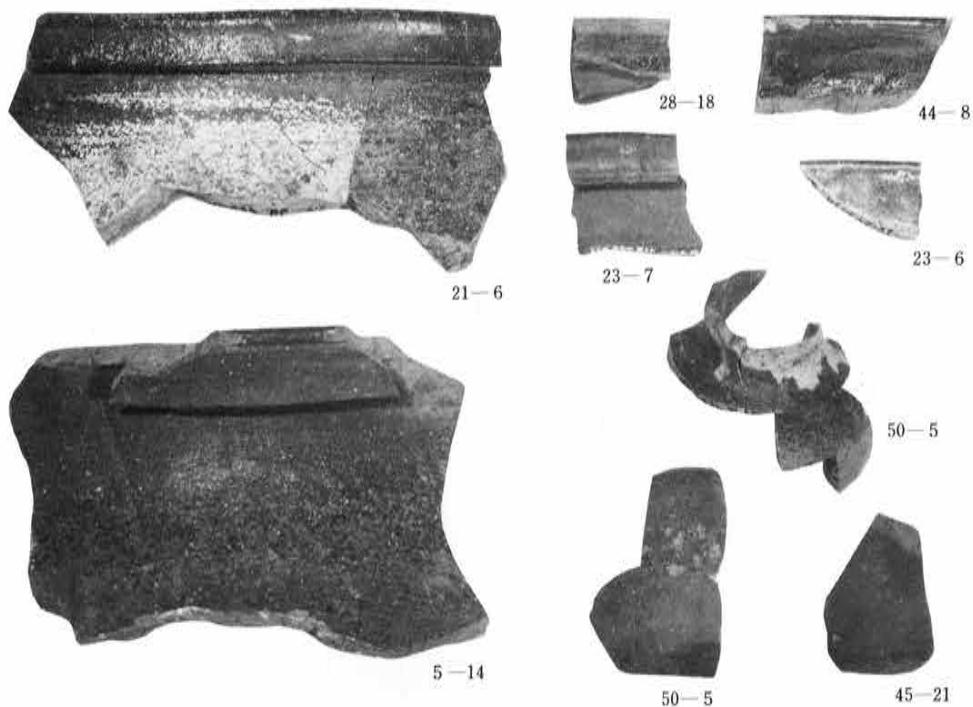
図版18



1. 船載陶磁器

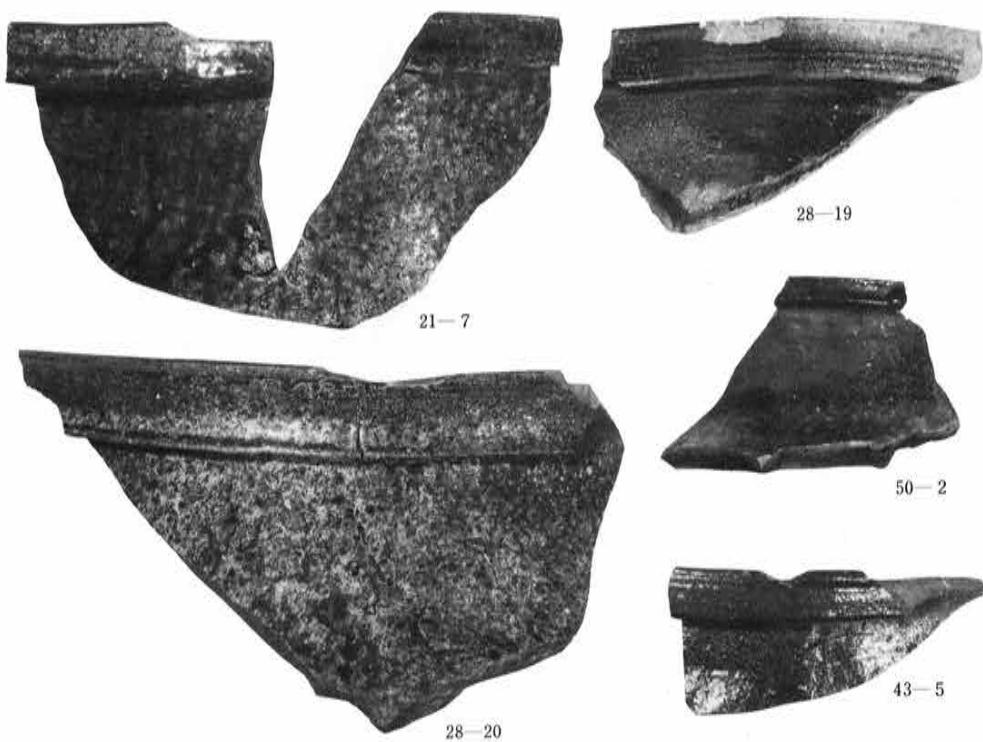
2. 同上



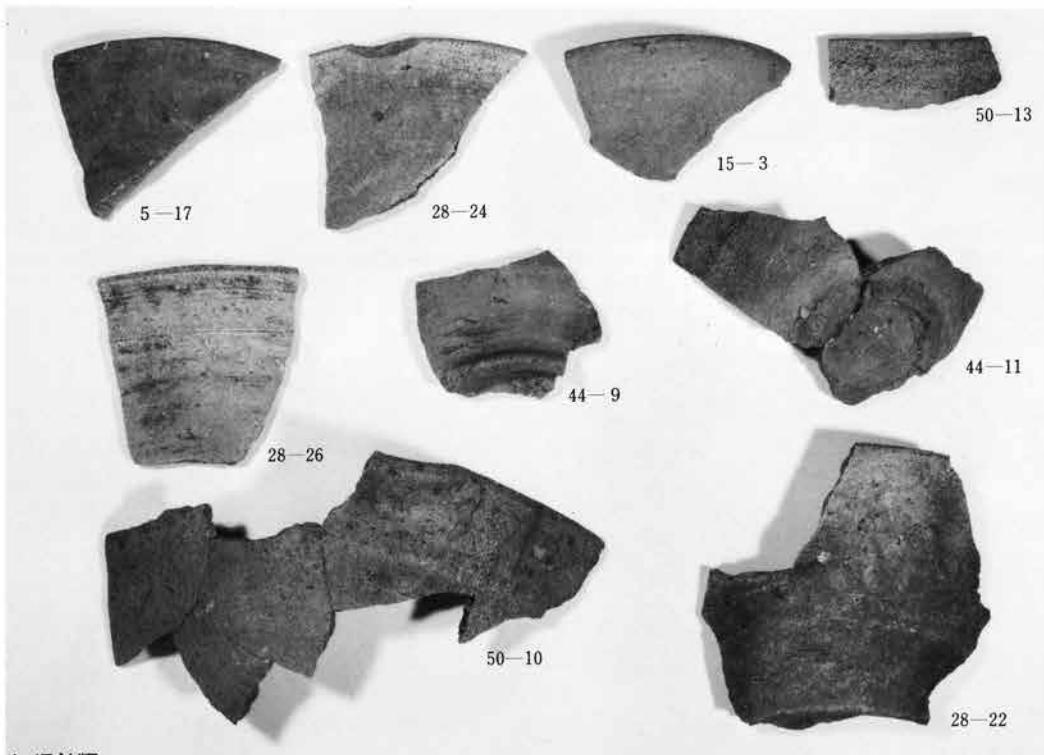


1. 常滑・渥美

2. 常滑

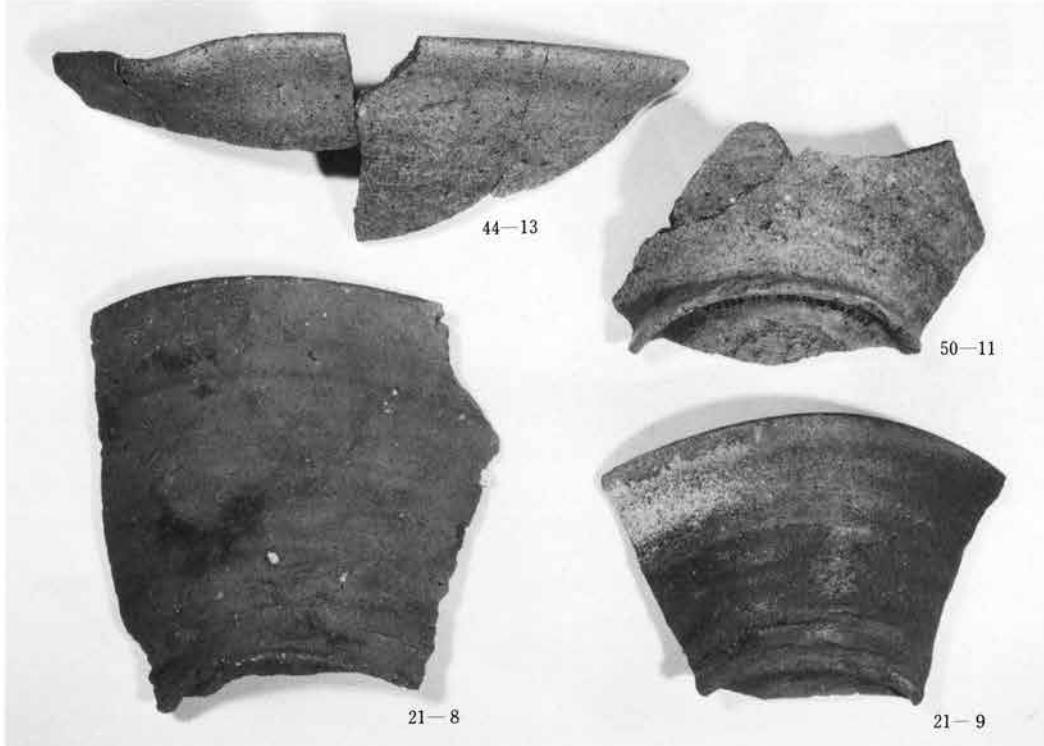


図版20



1. 捏鉢類

2. 同上

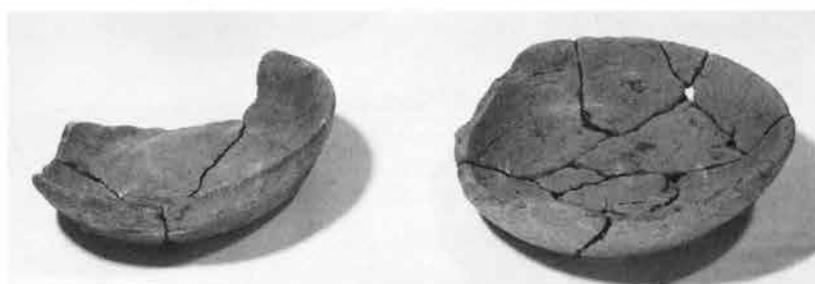


1. 墨書かわらけ



51-31

2. かわらけ類

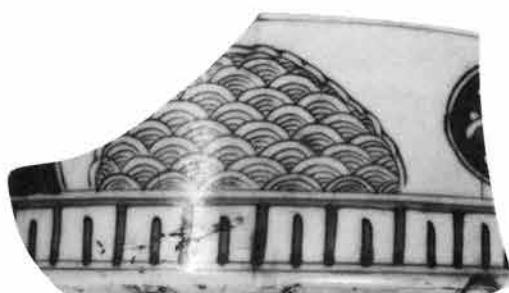


図版22

1. 火鉢



2. 土釜



3. 伊万里染付

4. 白かわらけ



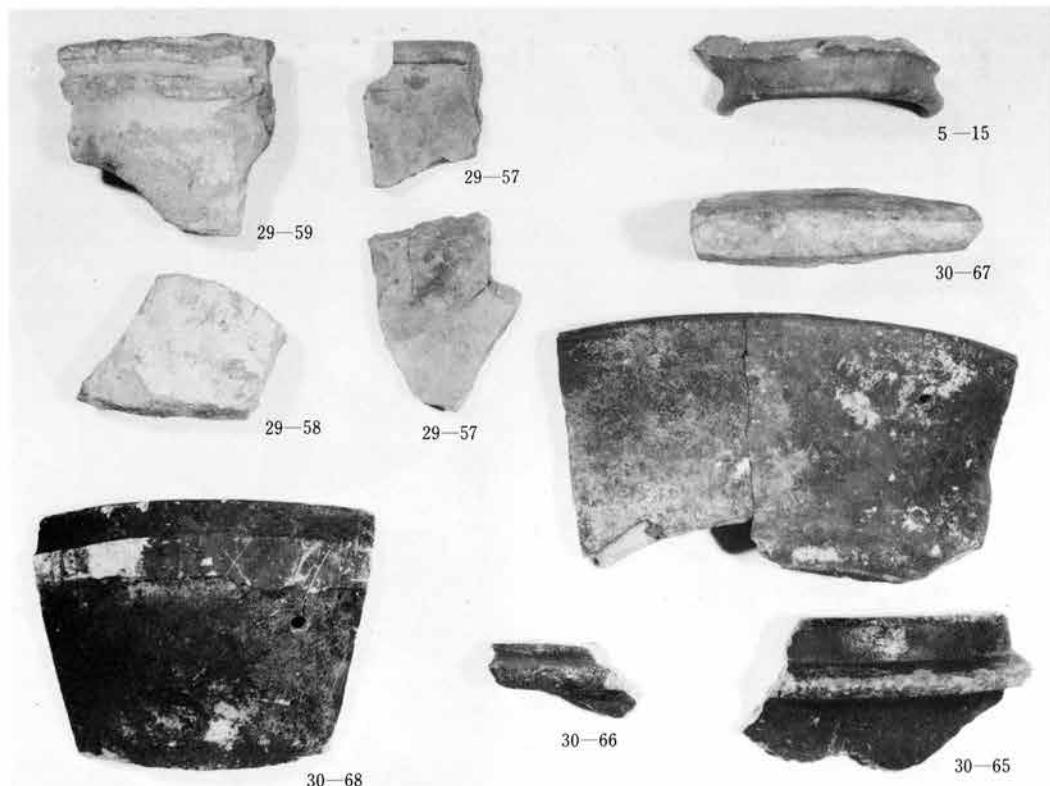
5. ミニチュアかわらけ



6. 箕

47-113





1.火鉢と滑石製品

2.砥石と硯



図版24



40-14



43-32



47-121



30-70



30-69



30-77

2. 勅文字



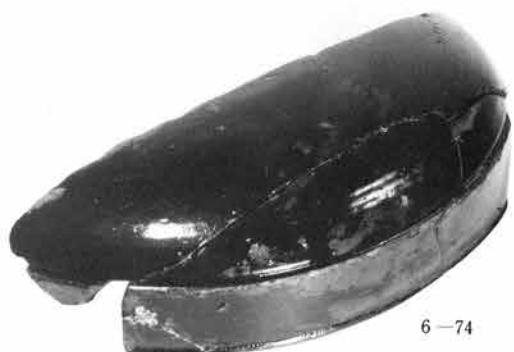
30-75

3. 漆器蓋



43-29

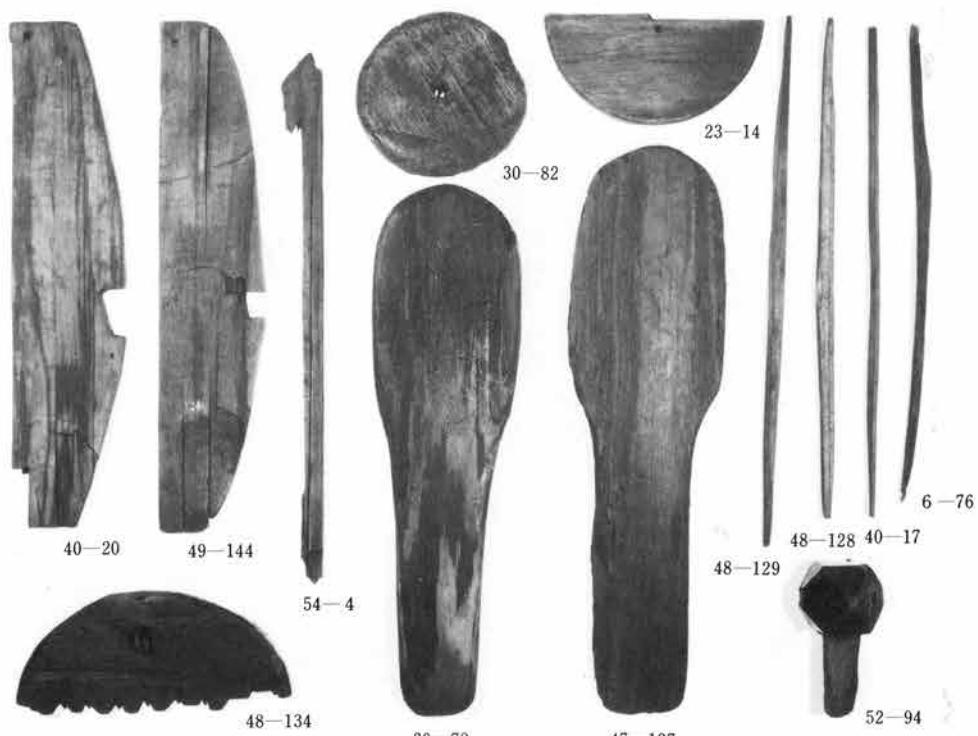
1. 漆器椀



6-74

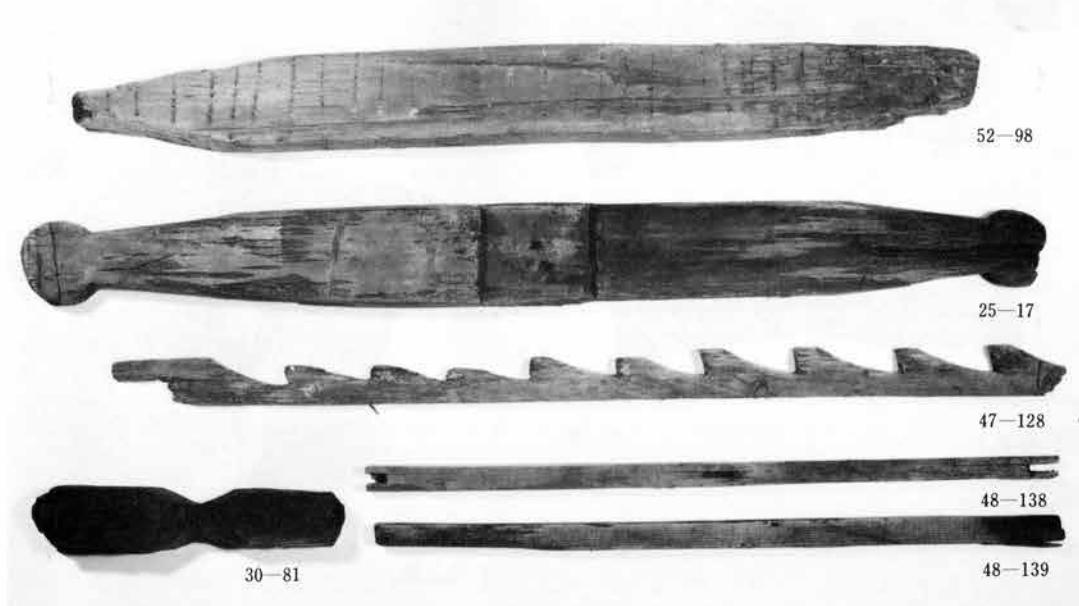
4. 漆器鏡箱蓋

図版25



1.木製品

2.同上



図版26



1. 木簡



13



15—31

41—15



31—83

53—101

3. 下駄



52—96



2. 橫櫛

52—95



49—142

4. 高足駄

2. 北条泰時・時頼邸跡

雪ノ下一丁目419番3地点

例　言

1. 本書は鎌倉市雪ノ下一丁目419番3における、山本すずの個人専用住宅新築工事に伴う発掘調査の記録である。

2. 本書の執筆は玉林美男が行った。

3. 現地調査には玉林美男・田代郁夫・藤原直人・新国哲・田中哲があたった。

4. 資料整理・報告書作成は玉林美男・馬淵和雄・浜口康が当り、田代郁夫・藤原直人・新国哲の協力を得た。

5. 調査体制は以下のとおりである。

担当者　玉林美男（鎌倉市教育委員会文化財保護課）

調査員　　田代郁夫

　　馬淵和雄

　　浜口　康

補助員　　藤原直人

　　新国　哲

　　田中　哲

6. 出土品等発掘調査資料は鎌倉市教育委員会が保管している。

第一章 調査地点の位置と歴史的環境

当遺跡は若宮大路の北端東側に位置し、北は横小路をはさんで鶴岡八幡宮に接し、東は小町小路、南は小路をはさんで若宮幕府に接している。

当遺跡の名称に冠せられている北条泰時は鎌倉幕府の第三代執権であり、北条時頼は第五代執権である。彼等の館はいくつか知られているが、当遺跡は北条氏宗家の鎌倉における「正家」と考えられる。

当遺跡については、すでに3箇所の発掘調査が行われている。そのうち2箇所は若宮大路に面した部分であり、若宮大路に沿った側溝や一本柱列（堀跡か）が発見されている。^{註1}もう一箇所は若宮大路の中心線から60m程の地点で、玉砂利を敷きつめた庭と考えられる地業面が発見されている。^{註2}今回の調査区も若宮大路の中心線から50m程東、横小路中心線から南へ190m南へ入った地点である。



図1 泰時・時頼邸の発掘調査地点

註1 北条泰時・時頼邸跡発掘調査団「北条泰時・時頼邸跡」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 1』

所収 昭和60年3月 鎌倉市教育委員会

北条泰時・時頼邸跡発掘調査団 「北条泰時・時頼邸跡」 昭和60年8月 鎌倉市教育委員会

註2 「北条泰時・時頼邸跡」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 2』所収 昭和61年3月 鎌倉市教育委員会

第二章 調査の経過

昭和61年4月28日から5月1日まで、予定地について2箇所の坪掘を行い、土層の堆積状況、遺構の様相を把握した。この結果、遺構を形成する基盤層が浅く、また攪乱も多いため、遺構面は実質的には一面であることが判明した。このため調査に先立ち根切部分の表土を厚さ cmまで重機が除去し、場外搬出した後、発掘調査に入った。残土処理のため、最初に調査区を東西に二分し、東側から調査を開始した。8月20日、東側調査区の遺構確認が終了したため、排土及び西側調査区表土を重機を用いて除去し、場外搬出した。調査区は南に向ってゆるやかな傾斜があり、ピット群の部分のみやや高い状況であった。調査の結果、多数のピット・土塙を確認したが、それらは調査区北側に集中していた。また調査区南側には江戸時代と推定される丸太杭を打ち並べた溝が発見された。これらの状況を写真撮影した後測量を行い、8月30日現地調査を終了した。なお、表土除去・排土搬出は事業者の協力を得て行った。

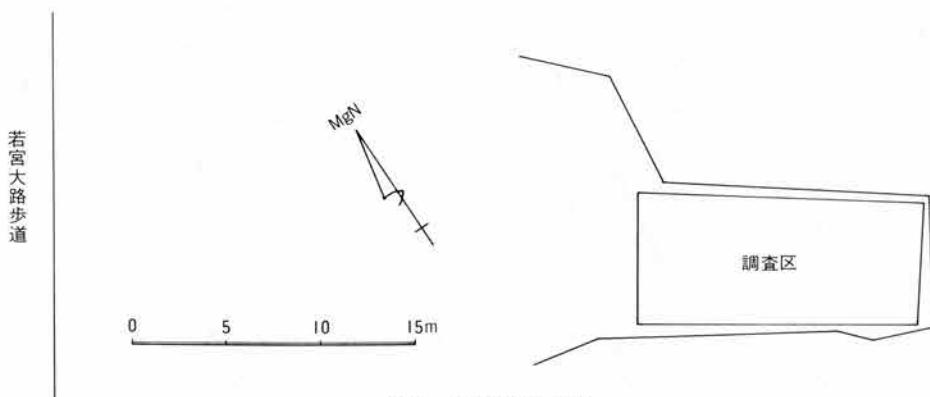


図2 調査区配置図

第三章 検出遺構

多数の小ピットと若干の土塙を発見した。小ピットの中には礫板を残すものがあり、何らかの建築物であると推定されるが、調査面積が狭いため、全容を明かにすることはできなかった。ピット

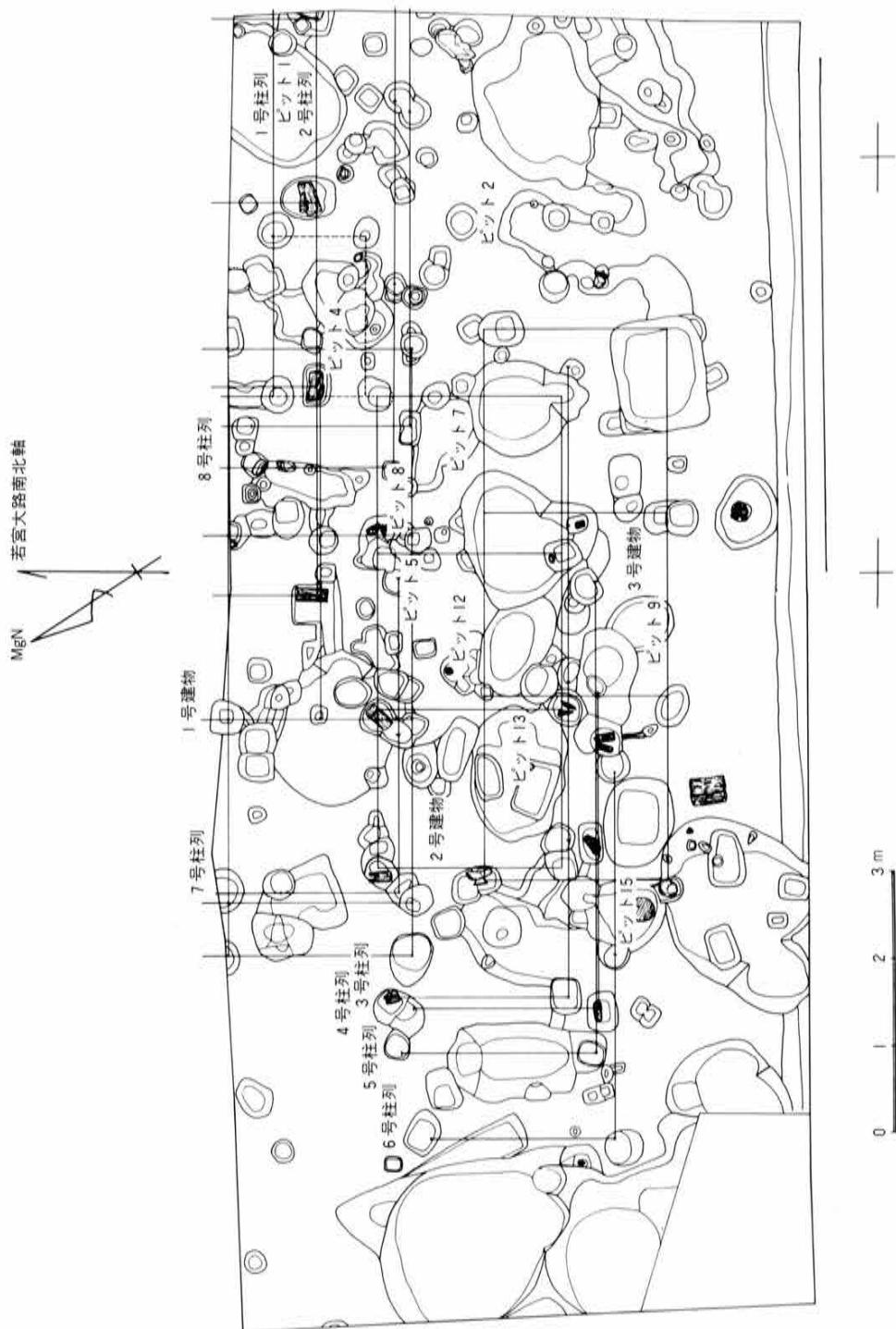
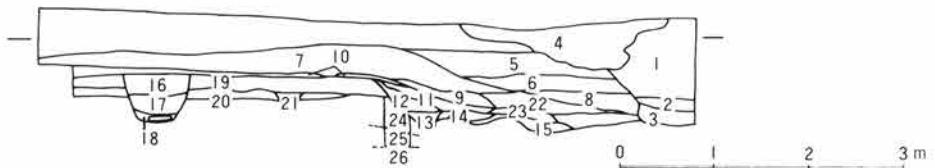


図3 遺構全図



- | | | | | |
|---------------|------------|---------------|-------------------|----------------|
| 1. 黒褐色土(近世) | 6. 灰褐色土 | 12. 黑色土 | 18. 暗褐色土 | 23. 黑褐色砂質土 |
| 2. 黒褐色土(近世) | 7. 灰褐色混土丹土 | 13. 茶褐色土 | 19. 暗褐色粘質土(地山風化土) | 24. 黄褐色粗砂、小土丹粒 |
| 3. 黒褐色砂質土(近世) | 8. 黑褐色砂質土 | 14. 暗黃褐色混土丹粒土 | 20. 暗褐色粘質土(地山) | 25. 黄褐色細砂 |
| 4. 表土 | 9. 黑褐色砂質土 | 15. 茶褐色土 | 21. 暗褐色粘質土 | 26. 暗茶褐色粒質シルト |
| 5. 灰褐土 | 10. 土丹地業 | 16. 暗褐色土 | 22. 黑褐色砂質土 | |
| | 11. 黑褐色砂質土 | 17. 暗褐色土 | 23. 暗褐色土 | |
| | | 18. 暗褐色土 | 24. 黄褐色粗砂、小土丹粒 | |

図4 土層断面図（調査区東壁）

は主に調査区の北側中央から北側東部に集中し、西側及び南側ではわずかに存在するのみであった。以下遺構毎に記述する。小ピットの配列は一列あるいはL字形にならぶ埠状のものと、建物としての配列又は配置を持つ、あるいはその様に推定されるものとがある。

1. 掘立柱建物跡（図5）

建物跡として明確に把握できるものは3棟である。いずれも南北軸がN-34°Eで、若宮大路と平行している。

(1) 1号掘立柱建物跡

調査区北辺に存在する。東西3間、北側は調査区外になるため南北1間以上になり、西側に庇がつく。柱間は210cm(7尺)で、庇の幅は60cm(2尺)である。南北柱の中間には各々小ピットがあり、主柱穴との距離は105cm(3尺5寸)である。

(2) 2号掘立柱建物跡

調査区中央に存在する東西3間、南北1間の建物で、柱間は180cm(6尺)である。北西端とその東側及び南西端から東へ2つ目のピットには礎板が遺存していた。

(3) 3号掘立柱建物跡

2号掘立柱建物と重複して、その南側に存在する。東西3間、南北1間の建物で、柱間は210cm(7尺)である。

2. 掘立柱列（図6・7）

8列存在する。いずれも東西方向の柱穴列であるが、1、2、7号柱穴列を除き、北側へ1間折れている。柱穴の東西軸はN-124°Eで若宮大路と平行している。

(1) 1号柱列（図6-1）

調査区北東端に存在する東西2間以上の柱穴列である。東及び北側は調査区外になるため、規模は不明である。柱間は180cm(6尺)である。西端のピットから北側へ幅30cm程の小溝が延びている。東西軸とほぼ直交することから、柱穴列が北側へ折れている可能性がある。建物跡である可能性もあるが、一応ここに入れておく。

(2) 2号柱列 (図6-2)

調査区北東端の1号柱列に接してその南側に存在する東西3間以上の柱穴列である。東及び北側

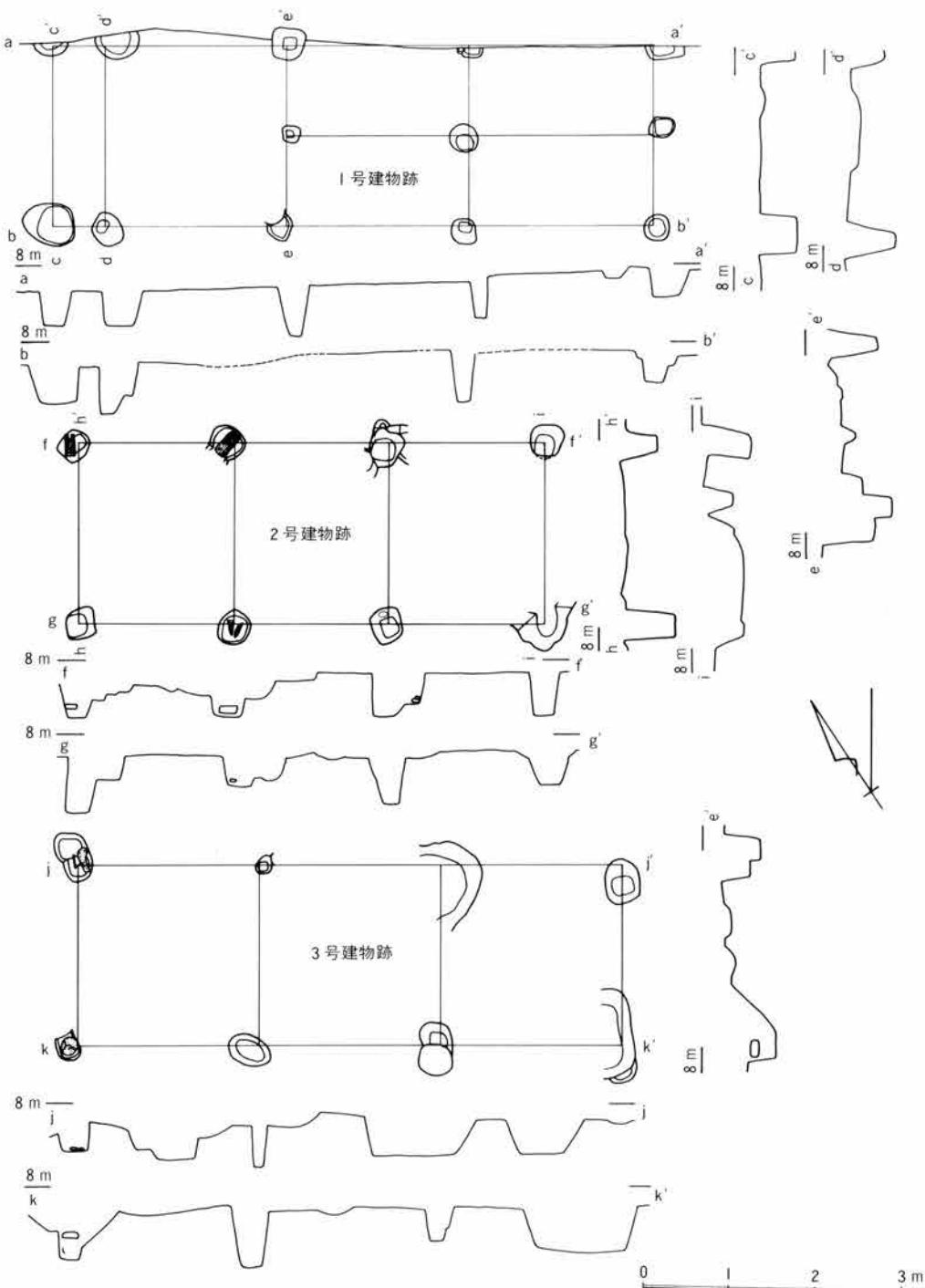


図5 掘立柱建物跡

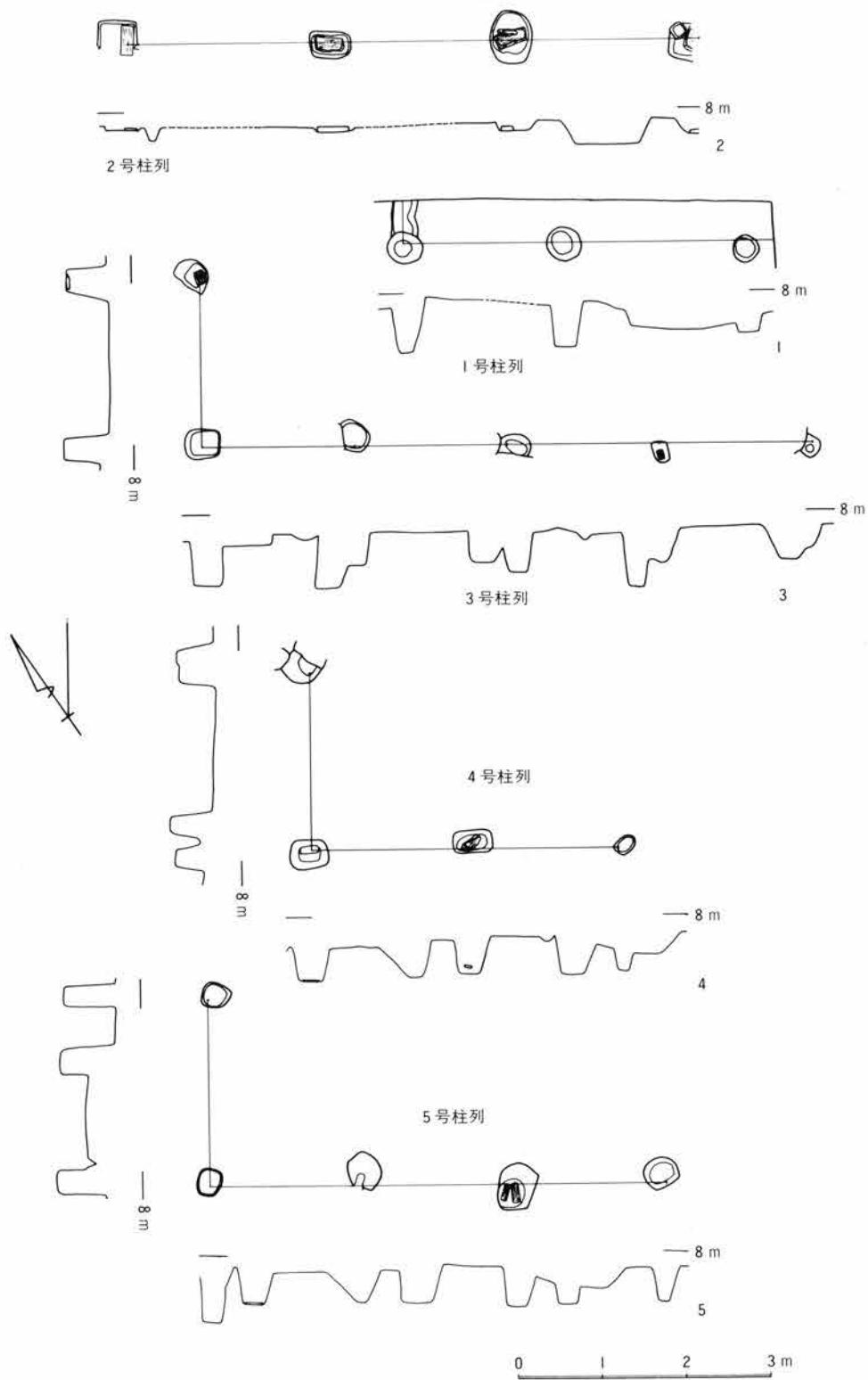


図 6 掘立柱列(1)

は調査区外になるため、規模は不明である。柱間は西端が 240 cm (8 尺)、他は 210 cm (7 尺) である。ピットにはいずれも礎板が遺存しており、東端のみ伊豆石が入っていた。ピットが大きくて深く、礎板等が使用されていることから、建物跡である可能性が強いが、一応ここに入れておく。

(3) 3 号柱列 (図 6-3)

調査区中央部西寄りに存在する L 字形の柱穴列で、西端が北へ直角に折れ曲がる形になる。東西 4 間、南北 1 間であるが、東西列東端の 2 穴はあるいは別の遺構であるかもしれない。柱間は東西列が 180 cm (6 尺)、南北列は 210 cm (7 尺) である。

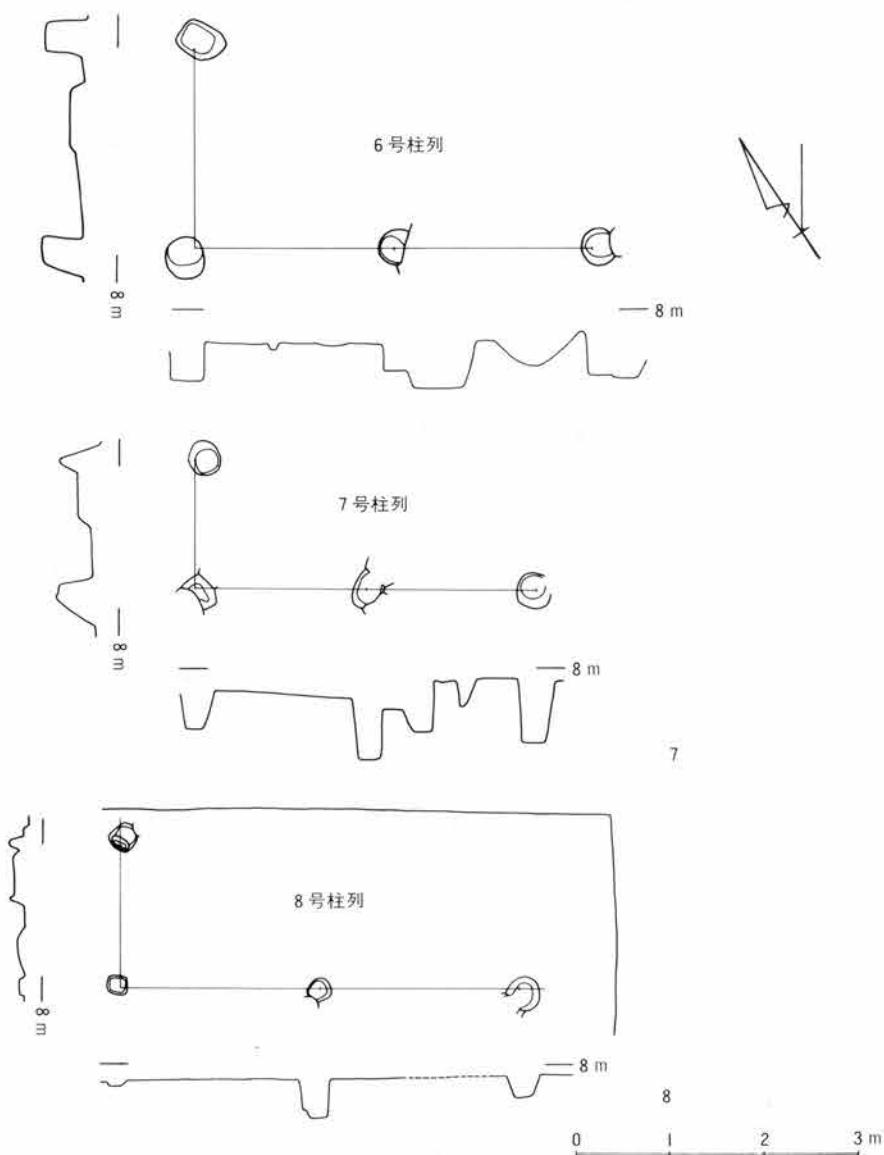


図 7 掘立柱列(2)

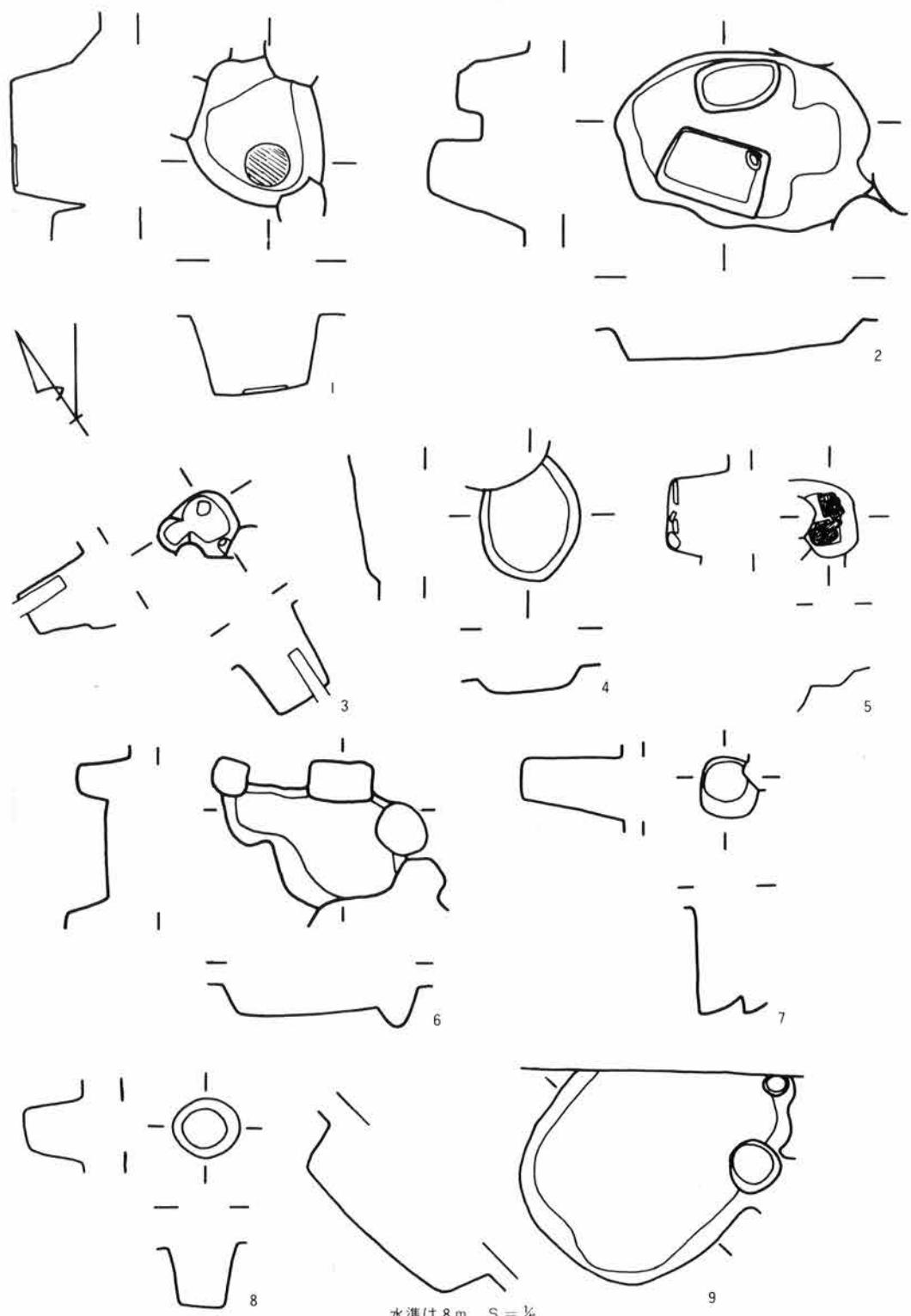


図8 ピット・土塙

(4) 4号柱列(図6-4)

3号柱列の南西部に接して存在する。柱列の形は3号柱列と同様であるが、東西2間、南北1間で、柱間は東西列が180cm(6尺)、南北が210cm(7尺)である。

(5) 5号柱列(図6-5)

4号柱列に接して存在する。柱列の形は3号柱列と同様であり、東西3間、南北1間で、柱間は180cm(6尺)である。東西軸は4号柱列と同一で、4号柱列の改修も考えられる。柱間は東西列が180cm(6尺)、南北列は220cm(7尺3寸)である。

(6) 6号柱列(図7-6)

5号柱列の南西に存在する。柱列の形状は3号柱列と同一であり、東西2間、南北1間で、柱間は210cm(7尺)である。

(7) 7号柱列(図7-7)

1号掘立柱建物跡の南辺北側に存在する3穴から成る柱穴列で、柱間は180cm(6尺)である。その西側2穴は建物跡南辺西端2穴と切りあっている。あるいは1号掘立柱建物跡の改修であるかもしれない。

(8) 8号柱列(図7-8)

1号掘立柱建物跡の東側に存在する東西2穴から成る柱列で、東側は調査区外に出るため不詳である。柱間は180cm(6尺)であり、柱列の軸は7号柱列と略同一であり、1号掘立柱建物跡の北側に接している。

3. 土塙・ピット(図8)

(1) 15号ピット(図8-1)

調査区南西部に存在する不正円形の土塙である。長径96cm×短径85cmで深さは46cmである。底面形は長楕円形である。

(2) 13号ピット(図8-2)

調査区中央西側に存在する楕円形の土塙である。長径150cm×短径105cmで深さは30cmである。土塙内には3箇のピットが存在し、その内南西のピットは55cm×45cmの長方形で、深さは60cmである。北東隅の底面に接して黒漆碗が1箇出土した。

(3) 12号ピット(図8-3)

調査区中央に存在する隅丸方形のピットである。長辺40cm、短辺30cm、深さは55cmであり、中に一辺8cm程の木杭が残存していた。

(4) 9号ピット(図8-4)

調査区中央南側に存在する楕円形の土塙である。長径90cm×短径60cmで、深さは20cmである。壁は垂直に近い。

(5) 8号ピット(図8-5)

調査区中央北側に存在する不正形のピットである。長径48cm×短径30cm、深さは37cmである。

(6) 7号ピット（図8-6）

調査区中央東側に存在する楕円形の土塙である。北側及び南側はピット、土塙と重複しており、形状が不明確になっている。長径82cm×短径80cmで、深さは75cmである。

(7) 5号ピット（図8-7）

7号柱列の東端のピットである。上端は方形で38cm×30cmであるが、下端は直径25cmの円形である。深さは67cmである。

(8) 4号ピット

調査区北東部に存在する隅丸方形の小ピットで、2号柱列の軸線上に存る。長辺25cm×短辺20cm、深さ20cmである。

(9) 2号ピット（図6-8）

調査区東側中央に存在する卵形のピットで、長辺42cm、短辺38cm、深さは37cmである。

(10) 1号ピット（図6-9）

調査区北東隅に存在する小板形の土塙である。北東隅は調査区外である。長辺（現状）は170cm、短辺133cmで、深さは36cmである。

第四章 出土遺物

1. 遺構出土の遺物

(1) ピット15出土遺物（図9-1～4）

1 剣頭文軒平瓦である。剣頭文は上向きで凸線で剣頭が表現されている。剣頭文の幅と高さは、1.3cmである。素地は明灰色を呈し、赤褐色の混和物があり、粉性で、焼成は良好。表面は黒灰色を呈する。瓦頭裏面には指で瓦当にそって引いた調整痕が存る。瓦表面は砂痕が存る。

2 剣頭文軒平瓦である。剣頭の表現・向きは1と同様である。剣頭文の幅は1.5cm、高さは1.1cmである。素地は灰白色で、褐色の大小の粒子を混じている。焼成は良好であるが、二次焼成を受けている。器面調整は1と同様であるが、瓦当上面の範削りが幅1cmとやや広目である。

3 口縁が外反する浅い皿形のかわらけである。復原口径9.2cm、底径7.4cm、高さ1.2cmである。部分的にヒダスキ状に赤変した部分が存在する。焼成は良好である。鎌倉第III期の製品である。

4 手づくねのかわらけである。口縁部と胴部手づくね痕との境がなだらかであり、手づくね痕の上から範整形が行われている。焼成は良好であり、部分的にヒダスキ状に赤変している部分がある。鎌倉第III期の製品である。

この他、平瓦、常滑小片、木片が出土している。

(2) ピット13出土遺物（図9-5～8）

5 内面に櫛状工具による沈線文を配した青白磁碗の胴部である。素地は白色で良質であり、釉は

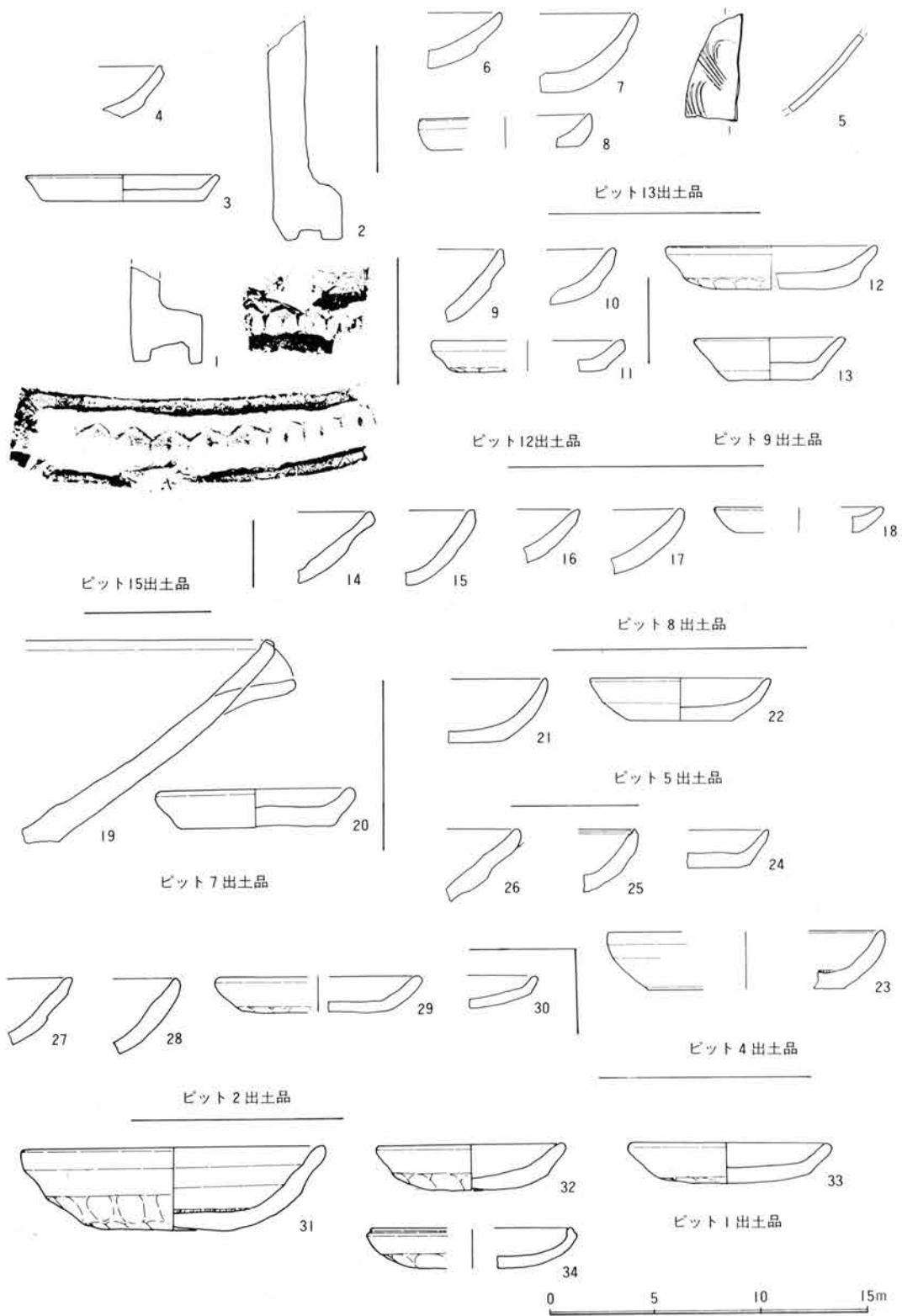


図9 出土遺物

透明な青白色で、貫入はない。焼成は良好である。

6～7 手づくねのかわらけである。いずれも口縁部と手づくね部の境が不明瞭である。

8 糸切の浅い小皿である。

いずれも鎌倉第III期の製品である。

(3) ピット12出土遺物（図9-9～11）

9～11 鎌倉第III期に属する手づくねのかわらけである。

(4) ピット9出土遺物（図9-12～13）

12 手づくねのかわらけである。口縁下の稜線は明瞭である。底面は範整形されている。鎌倉第II期の製品である。

13 口縁が直線的に開く小皿である。底は糸切で、板状の圧痕が残る。焼成は非常に良い。鎌倉第VI、VII期の器形に近いが、II期の異形かと考えたい。

(5) ピット8出土遺物（図9-14～18）

14 口縁下に明瞭な稜をつくる手づくねのかわらけである。鎌倉第II期の製品か

15～17 口縁下の稜が不明瞭な手づくねのかわらけである。鎌倉第III期の製品である。

18 口縁が大きく開く浅い皿形の糸切底のかわらけである。鎌倉第III期の製品である。

(6) ピット7出土遺物（図9-19・20）

19 山茶碗窯系といわれているこね鉢である。素地は灰白色で、白色粒子を多く含み、黒色粒子を若干含む。焼成良好。鎌倉第IV期の製品である。

20 口縁がわずかに外反する、浅い四形の糸切底のかわらけである。鎌倉第III・IV期の製品である。焼成は良好であるが、砂質である。

(7) ピット5出土遺物（図9-21・22）

21 底面からゆるやかに丸味を帯びて開く糸切底のかわらけである。鎌倉第IV期の製品である。

22 脇中央に稜を持ち、大きく開く皿形の糸切底のかわらけである。鎌倉第IV期の製品である。

(8) ピット4出土遺物（図9-22～25）

23 内彎気味に大きく開く中型の皿形の糸切底のかわらけである。鎌倉第III期の製品である。

24 直線的に開く小皿形の糸切底のかわらけである。鎌倉第III期の製品である。

25 口縁下の稜が不明瞭な手づくねのかわらけである。鎌倉第III期の製品である。

26 口縁下に明瞭な稜を持つ手づくねのかわらけである。鎌倉第II期の製品である。

(9) ピット2出土遺物（図9-27～30）

27 底面近くまで口縁下横までが行われている小皿形の手づくねのかわらけである。鎌倉第III期の製品である。

28 口縁下に明瞭な稜を持つ手づくねのかわらけである。鎌倉第II期の製品である。

29 口縁下に明瞭な稜を持たない手づくねのかわらけである。鎌倉第III期の製品である。

30 底部が丸味を帯び、口縁部がくの字に折れて外反する手づくねのかわらけである。畿内系の白

かわらけと推定される。

(10) ピット1出土遺物(図1-31~34)

31 口縁下に比較的明瞭な稜を持つ手づくねの大形のかわらけである。底面はやや後家底となっている。鎌倉第II又はIII期の製品である。

32 口縁下に明瞭な稜を持つ小形の手づくねのかわらけである。鎌倉第III期の製品である。

33 口縁下に明瞭な稜を持たない、小形の手づくねのかわらけである。鎌倉第III期の製品である。

34 口唇部がくの字形に内側に折れる手づくねのかわらけである。鎌倉第III期の製品である。

第五章　まとめ

今回の調査では、当地域における遺跡の形成が鎌倉第III期になって本格的に始まる事を確認することができた。調査区内での遺物は少いが、かわらけで見る限り、遺構に伴う出土品は、いずれも鎌倉第II・III期の製品であり、それ以前の第I期と推定される製品は全く存在しない。遺跡は茶褐色粘質土及び黒色土上に形成されており、当地の古環境が微高地であった事が判明した。この茶褐色土、黒色土中には川の氾濫による堆積土と推測される川砂層がいく筋か存在したが、東西南北各方向ともその傾斜をつかむことはできなかつた。しかし、この地を冠水させる程の川が付近に流れていたことは確かであろう。それが御谷からの流水か、西御門からの流水か、あるいは旧滑川なのか、今後の課題としておきたい。いずれにしろこの微高地には、鎌倉第II期(13世紀前半)になって遺構が形成されているのであり、それ以前は若宮大路に面する微高地とはいえ、館等が建設されていない未利用地であった可能性があるのではないだろうか。

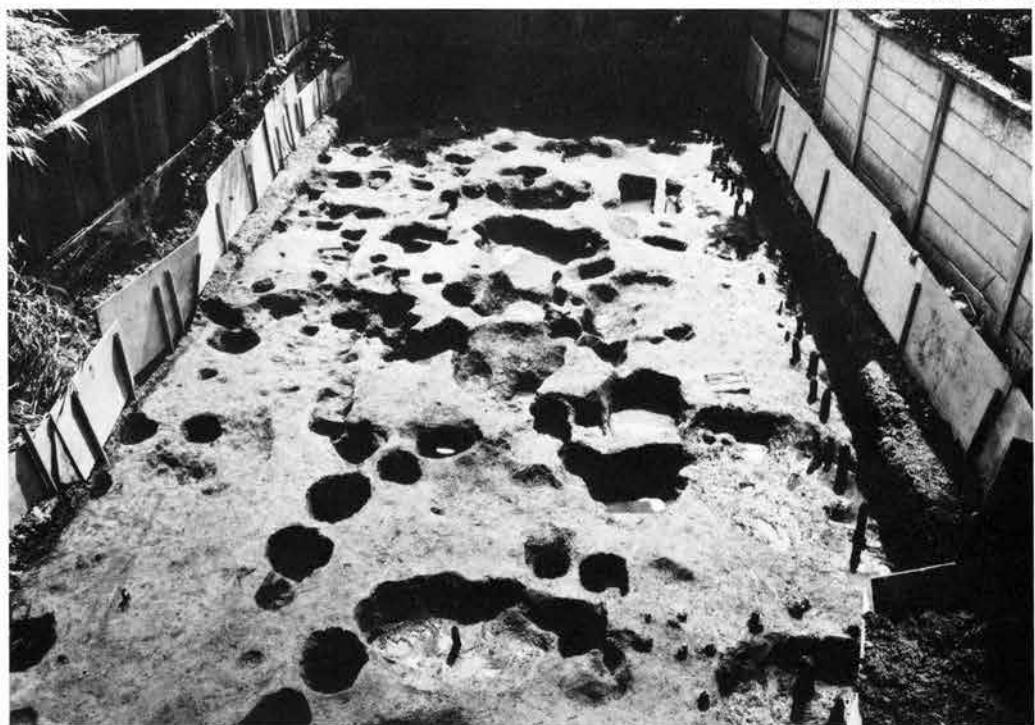
発見された遺構の大部分は柱穴又は杭跡と推定される小ピット及び若干の土塙である。これらのピットの内、建物等の構築物を推定できる配置を持つものは、わずかに11である。しかし、これらは、いずれも若宮大路と並行又は直交するよう配置されていることは注目されよう。これらの建物の時期は必ずしも明確ではないが、出土遺物の大部分が鎌倉第III期を中心としており、当該時期前後に構築されたと考えるのが妥当であろう。それ以降の時期については遺構面が削平されているため、状況を明かにすることはできなかつた。

図版 1

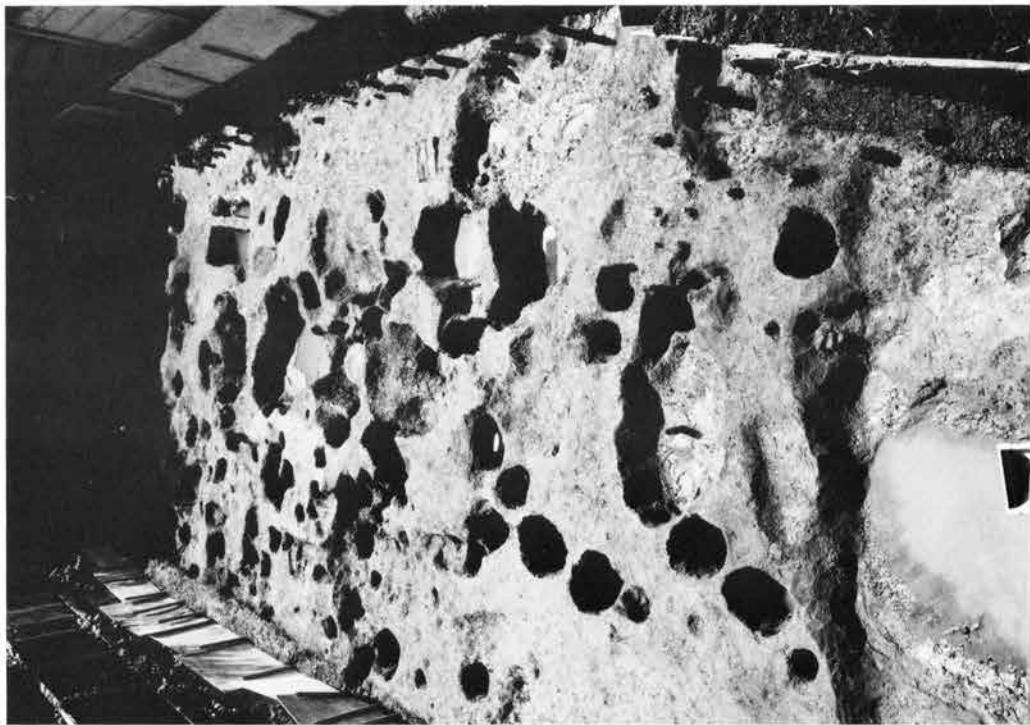


▲調査区西側(東から)

▼調査区全景(西から)



図版 2



▲ 調査区全景(西から)

▼調査区西側



図版 3



▲調査区中央部

▼ピット群



図版 4

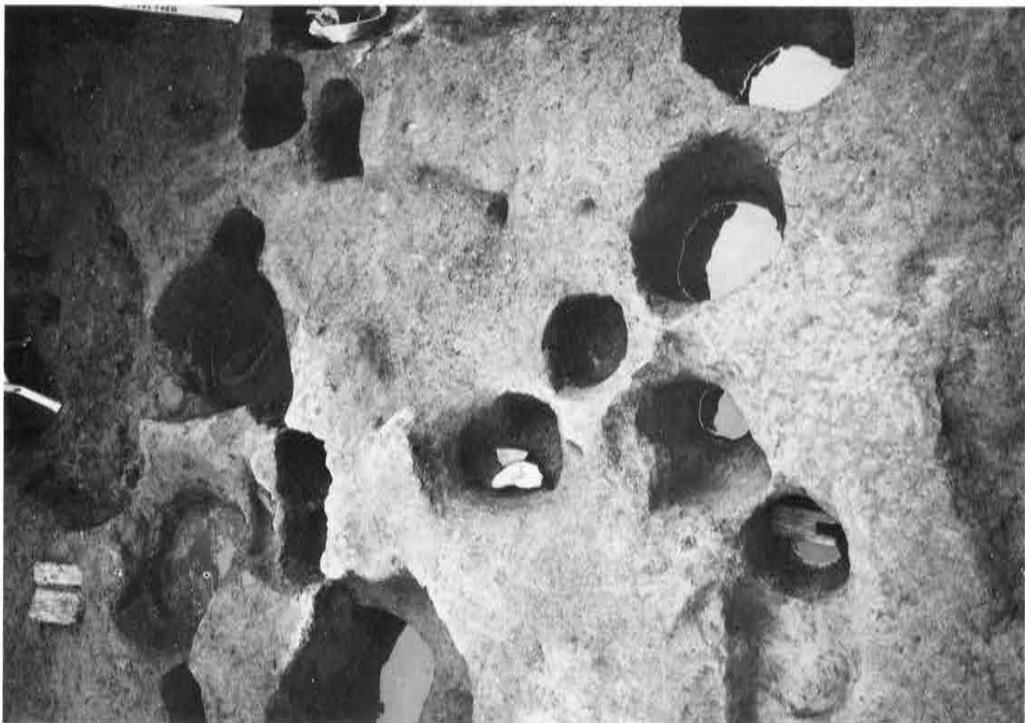


▲調査区中央土塙群

▼ピット13付近



図版 5



▲ ピット15付近（北から）

▼ ピット13 黒漆椀出土状況

